ニッポン発二一世紀オリジナル

鉱脈としての日本長寿社会

堀　亜起良

元『知恵蔵』編集長　堀内正範

はじめに

世界の宝石鉱脈としての日本

はるか遠い日に、東に向かった文化の波は漢・韓を通じて日本に達して開花し、西に向かった技術の波はローマ・西欧・米国を経てはるか遠い日本に至って開化した。

漢字かなカナローマ字混じりの日本語は世界の文化を総合し、衣・食・住の日用品のありようは世界の技術の統合を示している。

その仔細な成果は、日本人なら見て、聞いて、触れて、わがものにすることができる。

二一世紀の日本は、世界に輝く宝石である。

というこの歴史に残るひとことは、日本語オリジナルでここに記された。なぜといって、新世紀一五年余を観察したうえで、現地でいちはやく確認できたのが本稿だからである。

世紀初頭にすでにその姿を露わにしているものもあるが、なお原石のままのものも多い。それらの原石をこれから磨きあげて輝かせるのは、一人ひとりの日本国民の力である。

静かに前世紀に思いをいたせば、前世紀の世界大戦は世界各地に未曽有の戦禍をもたらしたが、この国にも広島・長崎の原爆投下を含む多大な傷跡を残した。

「国破れて山河あり」の思いを胸に、焦土に立った先人は、世界と将来に向かって戦争放棄を訴える「憲法九条」を掲げて国土復興にまい進し、九割中流といわれる「近似大同社会」をなしとげた。そして今世紀には平和であることの証として、誇るべき長寿国のさきがけとして登場している。

「長寿」は人間であることのそして人類としての普遍的な価値である。

だれもがどこででも生涯を通じて健康で安心して豊かにすごせることを願って暮らしている。しかし願っているだけでは新たな社会のしくみは成立しない。日本は二一世紀の長寿国（青少年・中年・高年「三世代」が平等の社会）としての姿を構想し、「憲法九条」とともに掲げて、努めて平和国家を達成すべき立場にある。

日本人の平均寿命は女性が八七・〇五歳、男性が八〇・七九歳。九〇歳まで生きる人の割合は男性二五・〇％、女性四九・一％。健康寿命の延伸もつづいている。

その成果は、食と衛生と医療と暮らしを便利にするモノと安心して休める住宅とみんなのたゆまぬ努力が総合してもたらされたもの。なにより重要な「食」は、世界中から食材が集まり、飽食といわれるほどに満たされて、首都東京の街筋には国際色豊かなレストランがたくさん店を開いている。「和食」は世界文化遺産に登録されて、訪れる観光客の人気

を集めている。観光ばかりではなく、これからはさまざまな分野の国際会議やセミナーや芸術の上演・展覧や展示会が常日ごろ各地で催され、国際病院にやってくるリピーターや定住・永住者も多くなるだろう。

「一生に一度は行ってみたい国」のトップにあげられて、四季折り折りの富士や風景を眺め、温泉につかって疲れを癒し、和食を楽しみに世界中からやってくる人びと。迎える側の「お・も・て・な・し」の心は、優しい天恵である風物（祭りも）とともにある。

北欧の冬を際立たせる国際賞として有名なノーベル賞が、二〇世紀に引き続いて二一世紀も各分野への貢献をたしかなメッセージとして刻みつづけるなら、東亜のこの国からはなお重ねて医学・生理学賞、化学賞、物理学賞、文学賞の受賞者を出し、その上で世界中の国ぐにの民衆からスタンディング・オベイションを受けながら平和賞を受賞する日がくるだろう。そしてさらにはいつの日にか経済学賞も。その日のためには、本稿がここに掲げる「ニッポン発二一世紀オリジナル」を達成して、安定した持続可能な経済社会をつくり出し、日本発オリジナルの「経済原理」を紡ぎ出さねばならないだろう。

前世紀から明治、大正・昭和・平成期の今を生きてきたわれわれは、「三世代平等型」社会を確かなものにし、共にその成果を享受し、次世代と高齢化途上国の人びとのために「長寿社会」のモデル（成功事例）を築きつつある。

二一世紀の日本は、磨きあげて世界史のなかに輝く宝石であらねばならない。

第一章　日本初出のオリジナル人生

1　華麗な加齢はだれのもの

加齢が価値でありつづける人生

華麗な加齢はだれのもの、と始まることになったので、ここはみなさんにも異論がないと思うので、七〇歳の古希に達した吉永小百合さんにご登場いただこう。華麗な加齢はだれよりもあなたのものだから。

となれば、ふたつ年上の橋幸夫さんにもご登場を願って、デュエットで「いつでも夢を」を歌ってもらうことになる。

「あぁぁ星よりひそかに　雨よりやさしく　あの娘はいつも歌ってる　声が聞こえる　淋しい胸に涙に濡れたこの胸に　言っているいる　お持ちなさいな　いつでも夢を　いつでも夢を・・・歩いて歩いて　悲しい夜更けも・・・あの娘はいつも歌ってる」

・・・のところは歌える人はご随意にどうぞ。

作詞佐伯孝夫、作曲吉田正、一九六二年九月にビクターから発売された。一九六四年の「東京オリンピック」の二年前のこと。佐伯さんの詞もいいけれど吉田さんの曲が明るい。

そこでここでは「いつでも夢を」と「歩いて歩いて」と「七十古希」という三つのキーワー

ドを取り上げたい。

では事の始めに、七〇歳の賀寿を祝って「七十古希」から。

「人生七十古来希なり」は、唐代きっての詩人杜甫が一二〇〇年余も前に詠んだ詩「曲江」の、「酒債は尋常行く処に有り、人生七十は古来稀なり」に由来するもの。

「古希」に酒債（酒のツケ）がかかわっていたことは知らなかった人も多いだろう。

お酒のツケは自分が行くところどこにでもあるけれど、「人生七十」は古来希れであると、目の前に有り余るほどあることと遠くに有りそうで無いこととを対比したもの。四九歳のときにこう詠った杜甫は、七〇には遠く五九歳で長安に戻る舟中で没している。

杜甫の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」（「春望」七五七年）のほうは、先の大戦の敗戦のあと、焦土に立ちつくしただれもが口ずさんだ詩句だった。自分が遭遇した戦乱の災禍を「詩史」として残して五九歳で去った詩人を悼む後人の思いが、「七十古希」には込められている。千年余もつづいてきたその憂いや願いが今は実感を失って、だれもが七〇歳に達することができるという古来希な時代になっている。

戦後七〇年、平和の時代もまた七〇年続いて「古希」を迎えたことを祝って先にいこう。

つぎは「夢」について。

ここまでの十数行のあいだ、まだ橋さんと吉永さんの「いつでも夢を」が胸の中をリフレインしつづけている人もいるだろう。若いころの悲しい夜更けを思い出したりしながら。

歌ってすばらしい。

歌のない人生はないが夢のない人生もない。鼻歌もなく、語れるあすの夢もないようなら、あなたの人生はおしまいだ。

「夢・ゆめ・ドリーム」は人間にとって命の輝きだからである。

「夢とは・・」と、ここまでくると、これまでは必ず欧米の「夢」の分析の成果を披歴することで点数かせぎをするところだが、本稿はそういう後進（国）的な手法をとらないし、とる必要もない。

これが本稿がオリジナルというゆえんで、今、この国に表出している事象の中から恰好な事例を取り上げて、みんなが納得できる「原理（理屈）」をみつけること。

それが最良の答えになる。

なぜなら、この国の「今」はこれまでのどこの歴史にもなく世界のどこにもない、とんでもない時代状況にあるからだ。

百歳の人が五万人を超えた。四人にひとりの三四〇〇万人が高齢者（六五歳以上）になってなお増加中という社会は、人類史にとって初めての経験なのである。

といって個人にそんな実感はないし、社会からも実感しえないのは、そう意識していないからで、高齢者が増えても「高齢社会」はほっておいてできるわけがなく、意識したみんなが意図して努めることで初めて、成果としての新しい「社会」として見えてくる。

「はじめに」でも紹介したが、東西から渡来した文化・技術が日本で開花・開化したのは、当事者が意識して対応し、意図して受容を推進してきた結果なのである。

秋恒例の「ノーベル賞」受賞者に、ここ毎年、日本人の受賞者がつづいている。医学・生理学、化学、物理学賞をはじめ、国際的オベイションを受けての平和賞も、成長・成熟・円熟する時代や人間を描いての文学賞も、日本人の営為が国際的成果であることを明かしてくれている。重なる受賞がその証になる。本年は医学・生理学の分野で、大隅良典・東京工業大学栄誉教授が受賞した。

その上でここで確認したいのは、三五年ほど前の一九八〇年ころには、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(『Japan as Number One: Lessons for America』Ezra F. Vogel・一九七九年刊、ことし中国で翻訳出版された書名は『日本第一』)とまでいわれて、海外からも関心を持たれた日本経済が、そのあとバブルがはじけて「ゼロ成長」の迷路に紛れこんでしまい、「失われた二〇年」を経ても展望が開けないために、経済学賞だけはその気配すらないことである。

明るい展望をもって本稿がいえることは、本来ありうべき世界初の「三世代平等型社会」が世紀初めに成立し、その後も持続可能であることを明らかにし、それを史的に分析する「経済原理」が紡ぎ出されてはじめて、経済学賞を受賞する経済学者がノミネートされることになる

ということである。誇らしく北欧の会場をにぎわして東亜からの最初の経済学者が登場するまでにはまだ間があるが、遠くないいつの日にか、わが国がノーベル各賞を総なめにする時が必ずくるはずである。

これは本稿の「夢」である。

「加齢が価値である」という人間としてのそして人類の普遍的原理（尊厳）を追究し貫くことによって、二一世紀にまず日本に実現する社会は。国際的に十分に賞されるに値するはずである。先ほど本稿が「あなたの人生はおしまいだ」と言い放ったとき、とまどいと異和を感じた人もいただろうが、この「夢」を共有できるなら「明日があるさ」ということになる。

＊東洋の哲学では「生命体」が存在原理

経済活動はもちろん、人間あるいは人生に関する東洋の哲学の「原理（理屈）」について、はじめにひとこと、ここに記しておきたい。

その前にまずは今、世界を覆っている西洋の「原理」についてひとこと。

西洋の「原理」は、「モノ」に始まって「ヒト」に至る。あるいは「ヒト」に始まって「モノ」に向かう二元論を根っこにもつ。創造主がいて「ヒト」のすべてはそこに始まりそこに帰る。「モノ」に向かうほうは原子・素粒子から宇宙・ビッグバンまで、分析は極小へあるいは極大へと広がって、なお存在の原理を追いつづけている。

一神教の「原理主義」の特殊な事例とはいえ、ＩＳ（イスラム国）では、異教とのぶつかりあいのはてに、自爆して地上の「ヒト」を抹消しあう。人類はみずからが発見した終末兵器（見えない武器である放射線や電磁波？）によって滅亡する。創造主のために地上から「悪しきヒト」を消すことが正義とされて同時滅亡はいつかは起こる。いつかであれ、人類にそんな未来があってはならない。

東洋の「原理」は、はじめから「生命体」があり、その現実に変容する存在のありようとしてヒトがいてモノがあると説く。「生命体」はある発展の形はとるが、新たに生まれたものではなく、最初から在るものだ。それゆえに生まれたヒトの人生の加齢は価値でありつづけ、生はかぎりなく尊い。

この東西の存在論・認識法の違いは文明論にまで広がるので、ここでは「ヒトの生」が何よりも優先して尊いことをいうことで止めておきたい。いずれどこかで子細に論じますから。

「ヒト」は、「からだ」と「こころ・こころざし」と「ふるまい」という三元からなる「生命体」であり、これ以外に存在はないというのが東洋の「原理」であり、本稿が掲げる「理屈」である。よく観察すればそのとおりであることにだれもが納得できるはず。

「からだ」と「こころ・こころざし」と「ふるまい」は、

漢字で書けば「体」と「心（志）」と「行」の三元。

生活の立場でいえば「健康」と「知識」と「技術」。

ケアの立場でいえば「疾病」と「認知症」と「介護」のケア三元となる。

これらの三分類（カテゴリー）はこれから「体・志・行」の三元として本稿の所どころに出てくるので、ここで記憶しておいていただきたい。

ということで、「夢（志）」にもどると・・

まずはこの国の事例から新しい「原理（理屈）」を見つけるためのかけがえのない人物資産として、いまや世界に輝く宝石である三浦雄一郎さんにご登場いただくことになる。

われわれは他に「夢」の素材を求める必要はなく、われわれの前にいる八〇歳でエベレスト登頂を成し遂げた三浦雄一郎さんがここでの最良の事例なのだから。

三浦さんは、次には八五歳で、高山登頂ではなく、世界屈指の高山の頂上から息子と滑降するというのがご本人の語る「夢」であり、それをめざして日ごと二〇キロを背に負い両足に五キロの負荷をかけて、銀座や渋谷を歩いているという。「歩いて歩いて」いる三浦さんに出会った人もいるだろう。傍らで激励しつつ激励されればよい。

三浦さんの「からだ＝体」は六〇歳代という。キラキラと輝く「夢」を成し遂げる「志」をたいせつにし、「歩いて歩いて」行動力の維持に努めて、「三元」すべてに怠りがない。

八五歳での成功を待ちましょう。

さて、「夢」を取り上げた次は「歩いて歩いて」について。

この「ふるまい＝行」による効能はみなさんもすでに体感しているところなので、ここで改めて説くまでもない。ただ若いときから定年期までデスクワークが多かった男性のみなさんは、「努めて努めて」歩くこと。

アンチエイジング（若づくり）は女性のためだけではない。何につけ男性がアンチエイジングに努めることが個人の健康寿命を延伸するばかりでなく、暮らしにイノベート（刷新）をもたらし、後に説くように日本経済の回復のためのイノベーション（技術革新）の元になる。

華麗な加齢は吉永さんに見倣ってみんなのものとしなければ。

「がんばらない」と「がんばる」と

世紀をまたいだせいかずいぶん遠い記憶のように思えるが、働きづめに働いてきて、以後をどう暮らすかに思い悩んでいた人びとを慰労してくれたことばがあった。

「老人力」である。

最近亡くなった画家の赤瀬川原平さんと建築家の藤森照信さんによる命名で、赤瀬川さんには同名の著書がある。先の大戦後の復興と成長と繁栄を成し遂げて、みずから噛みしめて、

「やれやれ、よくぞここまで」

とためいきまじりに高齢期を迎えようとしていた人びと。

その功労者を、「日本列島総不況」（経企庁長官だった堺屋太一さんの命名）が襲ったのは前

世紀末のころだった。

働きづめに働いてきて、人生の晩期を迎えている自分の姿をすなおに顧みる。

来し方のがんばってきた人生を納得した上で、がんばりすぎずにクールダウンしてゆくこと。

赤瀬川さんは「老人力の伝道師」として体験に即して納得しながら巧みに解説している。

そのクールな自己認知の能力を「老人力」と呼んだ同時代人のことばに納得して、疲れた人びとはみずからの判断で体を休め、疲れを癒した。多くの人が納得することで、「老人力」は流行語になり、『老人力』（筑摩書房）はベストセラーになった。

「捨てていく気持ちよさ」を味わって過ごす「老人力」は有効だが、おのずから表出される「頑張り」もまた人びとを感動させるものである。

近ごろ街に出れば、元気に活動する高齢者の姿を数多く見かける。

健康のために「一日三〇〇〇歩」といわれれば家の中にばかりはいられない。

外出スタイルとしては、男性はアウトドア・リュック姿が多いが、女性はハイミセス・ファッションを楽しんでいる。この街に出はじめた元気な高齢者について、いろいろな立場から実にさまざまな表現が用いられている。

「アクティブ・シニア」「スマート・シニア」「アクティブ・アダルト」「ハイエイジ」「スーパー老人」「支え手の高齢者」「新老人」「創年者」「熟年者」・・など。世代としては「プラチナ世代」「グランド・ジェネレーション＝ＧＧ」や「アクティブ・エイジング」「熟年世代」・・とい

う捉え方もある。

ここで本稿からもみなさんの長い高齢期人生への励ましとなることばを提供したい。

あの「三・一一東日本大震災」の被災地で、お互いの励ましのことばとして飛び交っていたのは何だっただろう。

「がんばろう！」だった。

「頑張ろう」はその後、「復興へ頑張ろうみやぎ」（宮城県）や「がんばろう東北」（東北楽天ゴールデンイーグルス。星野（仙一）監督や田中（将大）投手らと優勝までの頑張りを共有）、「がんばっぺ福島」や「がんばろう俺！」まで、復興活動のキャッチフレーズになってきた。

それにもうひとつ、被災地の現場では、

「だいじょうぶ？」「だいじょうぶ！」

もまた、お互いの心を支えあって飛び交ったのだった。

「大丈夫」のなかには、美智子妃の被災地での「よく生きていてくださいましたね」とともに、

「だいじょうぶ！」

という励ましのことばも記録されている。大きい声を必要としないでも、静かに心の深みに伝わる励ましのことばとして。

この「大丈夫」の「大」を横に置いて、男性をいう「丈夫」のうちの「夫」から二をはずしてみる。芯にあるのは「丈人」である。

性別を問わず「だいじょうぶ！」といったときに、胸の内にあふれ出る気概が「丈人」のもの。「がんばろう！」が外向きなのに対して、「だいじょうぶ！」はどちらかといえば、内にある力（本稿の丈人力）を呼びさまし励ましてくれることばといえよう。

＊「老人力」と「丈人力」を交々に

「丈人」（『論語』にも出る古語を援用）は「老人」とともに漢字の古語として対比しながら用いられる特徴があるので、高齢期の人生を励ますことばとして、「丈人」「丈人力」をプラスして使っていただきたい。

高度成長をなしとげて、世紀をまたいで高齢期を迎えて、なお活力のあるアクティブ・シニアは、今、「人生九〇年」にむかって「青少年（成長）期」、「中年（成長＋成熟）期」の期間をかけて培ってきた専門知識や高いレベルの技術を保持して暮らしている。

この「高年（成熟＋円熟）期」を迎えて保持している「健康」「知識」「技術」や「人脈」「資産」の活用こそが、デフレ脱却（日本経済の回復）の対策であると本稿は今世紀の初めから注目して説いているのだが、若手の政治リーダー（といっても六〇歳前後）には実感できず、理解できず、活かす気配がない。

最近になって、日本老年医学会が高齢期を説明するのにわかりやすいことばを公表してくれた。「フレイル」（Frailty）である。

健康と要介護のあいだのことで、早く気づいて予防や治療をすれば戻る状態をいう。筋肉が衰えて活力に自在性が失われ気力も衰える段階のことで、そこまでには間がある元気な高齢者なら、だれもが保っている潜在能力を用いて何かをやってみたいと思っている。「自己実現」のためばかりでなく、「成長型」社会から「成熟＋円熟」社会づくりへと、自分のためばかりでなく、みんなのためにも活かしたいと願っている。

高齢者の潜在力を再認識するために、三浦雄一郎さんがいい時期にいい事例を残してくれているのである。

二〇一三年五月、八〇歳でエベレスト登頂を果たした三浦雄一郎さんが推奨するのは、健康を保ちながら、わくわくするような夢をもち、その実現をめざすために頑張ること。ハイエイジ期の自己目標を達成する潜在力（本稿の丈人力）はおのずと涌いて出るものなのである。

といって「老人力」ということばの意味を「支えられる高齢者」用に限定する意図も内容も持ってはいない。長い経緯をもつ「老人クラブ」や「敬老の日」の存在はたいせつな基盤である。その積極的な意味合いはこれまでどおりに理解した上で、それに重ねて、現代日本の社会がいま必要としている「成熟＋円熟期」にある高齢者の活力をプラスしてとらえる意味合いをもって用いている。この国の「高齢社会対策」が二〇年延滞してきたために、「老人」というこ

とばが本来もっているはずの「敬老尊賢」とか「老練」「老師」「長老」といった熟成期の社会的な意味合いを失ってきた。それをフォローすることになるからである。

「人生六五年」から「人生九〇年」へ

内閣府は永田町の国会議事堂の横、霞が関の省庁や首相官邸が見わたせる丘の上にある。

各省庁からの要請をとりまとめて、『高齢社会対策大綱』（一九九六年七月、橋本内閣が閣議決定）を再々改定したのは二〇一二年九月（野田内閣）のことである。

その「大綱策定の目的」のところで、

「『人生六五年時代』を前提とした高齢者の捉え方についての意識改革をはじめ、働き方や社会参加、地域におけるコミュニティや生活環境の在り方、高齢期に向けた備え等を『人生九〇年時代』を前提とした仕組みに転換させる必要がある」

とする新たな対策の指針を定めている。

ここに三行を引き出したのは、長く対策の指針の基盤としてきた「人生六五年時代」を二五年延伸して「人生九〇年時代」とし、それにふさわしい社会へしくみを転換する必要を指摘していることにある。

制定から二〇年、新世紀になって一六年。こんな重要な改定を当の高齢者は知らない。

国からそんな指摘や参加の要請が高齢者にむかって出されたことはなかった。

まだ国庫に余裕があったころに制定された『高齢社会対策基本法』（一九九五年一一月、村山内閣制定）と『高齢社会対策大綱』（前出）には「社会の功労者」としての高齢者をねぎらい「温存」しようという官僚と学者の矜持と善意があふれている。

来たる二一世紀は平和でありつづけて高齢化が国際的な潮流になる。

国連はそう想定して、九〇年代を通じてメッセージを送りつづけ、各国に対応を求めた。

急速な高齢化のすすむわが国の対応は、国際的にも注目されてきたのである。その間、わが国の政界は離合集散を繰り返し、世代交代の疾風が吹き荒れていたことは、みなさんのご記憶にあるとおりである。冷静に対応していたのは国連と福祉に関係する官界の部局と学者と一部の自治体と先駆的な活動団体だけであった。

当時の高齢者としては、六〇歳定年と六五歳年金給付の開始年齢の時間差に不安を持ちながらも、なんとかつないで六五歳からは年金の給付を受けて、質素に過ごす。この高齢者「温存」のしくみがどこまでつづくのかに不安を感じながら、働きづめできた多くの高齢者は、みんなで生きられるところまで生きればいいと考えて、さしたる切迫感は感じなかったのである。

それが一気に「人生九〇年」時代へ。

六五歳から一気に二五年延びて「人生九〇年」への「高齢者意識」の変革。就業、健康づくり、学習活動、生活環境、市場の活性化、世代交流といった各分野への積極的な参加。いわゆる「社会参加」への要請である。その上でさらに全世代が支え合える社会を構築することが必

要ということになった。

このあたりの仔細な経緯はのちの「失われた二〇年」の章で詳しく論じるが、つい先ごろまでは六〇歳まで（定年延長して六五歳まで）働いて、年金の支給を受けて、質素に高齢期を送る。そういう暮らし方がふつうの人生計画だったのに、一気に二五年も延伸してしまうとなると、たしかに「人生六五年」時代の「引退余生」の意識では対応できそうにない。

自分はそんなに長生きしないからと勝手に決めている人もいるようだが、統計的に見てそう都合よくいかない。女性の場合は約半分がいやでも九〇歳まで到達する。六五歳になって、なんとかこのまま年金と貯蓄とで夫婦つましく余生を送れると予測していたみなさんにとっては、いまさら何だということになる。

戦後七〇年。平和裏にみんなで努めてきて、その成果として得た豊かさと長寿。

六五歳からの二五年を、国の立場にも配慮して、財政赤字（すでに超一〇〇〇兆円）を増やさず、後人への国の負債を残さないように生きてほしいというのが国からの要請なのだ。

さて、どう応えるかは個々人の高齢期の生き方次第であるが。

＊「引退余生」でなく「現役長生」で

史上初のことであり、世界初であるこの難題に、国民一人ひとりがみずからの人生を懸けてどういう回答を出すか。

前人未踏の「人生九〇年」時代をどう踏破したらよいのか。

高齢者（六五歳以上）が三四〇〇万人、二七％にまで達してなお増えつづける社会では、一人ひとりの高齢者の二〇年を越える「余生」に、高いレベルの介護や医療を提供しつづけ、穏やかに終末までを看取るという「社会保障」ができなくなるということは、周辺を見、総体を考えれば、だれもが納得せざるをえない。

たとえば「還暦」を迎えたばかりの人びとにとってはどうなのか。

「人生九〇年」はこれから三度目の三〇年を迎えることになる。六〇年まではさして長くはなかった。三度目の三〇年もおよその見当がつく。ただし今回は途中のどこかでリタイアするかもしれない。高齢期人生への助走期に達したのだから「まだ、いいか」といってはいられない。というので、ウオーミッグ・アップをはじめようかといったところだろうか。

「団塊の世代」（一九四七～一九四九年生まれ）の人びとはどうか。

定年を迎えて年金生活にはいったばかり。ほどほど働いてきたし、横並びに比較してもほどほどの貯蓄もある。これまでだって贅沢やムダをしてこなかったのだから、他は知らず、自分はやりたいことをやって、このままでいく。いますぐに自分にまで災難がおよぶことはないのだからと、結論を先送りして「まだ、いいか」となる。

二〇一四年にはみんなが六五歳以上の高齢者の仲間入りをして六〇歳代の後半にいるこの六五〇万人という大集団の人びとの多くが黙止してしまった場合には、経済社会的な欠落を生

じて、総量として国力の萎縮を引き起こす要因としてカウントされるにちがいない。
「高齢者意識」については、多くの国民は、定年が延びて年金が支給される「六五歳」からを意識することはあっても、「人生九〇年」の幅で考えることはなかった。「六〇歳以上の人口表」（三〇ページ）でみるように、各年代ともに多くの人びとが暮らしているのだが、この二五年の間のありようを示さずに延伸だけをすることこそがこの間の対策不在の証なのだ。
成熟・円熟期の意識を持ちえた人びとは、「引退余生」などわが人生にあらずとして、「現役長生」の暮らし方で通してきた少数の人びとである。
これらの人びとは、今回の要請にもあわてず騒がず、
「やっと来たか」
と、遅すぎた要請を受け入れられるだろう。
つまり人生の到達目標が六五年から九〇年に延びた。マラソン人生でいうなら三〇キロ地点での突然のゴール延長である。三〇キロ地点。マラソンはこのあたりからが次第にきつくなることはみんな知っている。
それでも前方を見ると、多くはないが、たしかに「人生九〇年」時代の成熟＋円熟社会をつくりながら「現役長生」の意識でひたはしる先輩シニア・ランナーの姿が見える。その後ろ姿を追いながら一団となって「人生九〇年」にむかって力走することでいいのではないか。
「引退余生」を楽しめないで不愉快な顔をしているまわりの仲間はさておいて、まずはわが人

生のためと決めて「現役長生」型の人びとが走りはじめる。そうしなければ、みんなが安心して暮らせる「日本高齢社会」の達成などおぼつかないと分かっているからである。

「体・志・行」がケア三元カテゴリー

家人がだれもいない時にでも、そっと三面鏡を開いて、裸形の自分を映してみよう。

まぎれようもない年齢相応の自分の「からだ」が眼の前にある。上半身・下半身とながめて、「まあ、いいか」と納得するのが「こころ」の動きである。そして男性なら腹部に、女性なら胸部に手をやるのが自然な「ふるまい」である。

この「からだ＝体」と「こころ・こころざし＝心・志」と「ふるまい＝行」という三つが人間（人生）としての同時存在であり、この三つ以外に存在はないというのが、東洋の哲学の人間観（人生観）なのである。

ややまとめて哲学ふうにいえば「存在としての体・志・行の三元論」。

ここはその場ではないので、コメントは差し控えておくが、西欧の「物・心」にわけてその発展形態として「人間」という存在を理解する二元論ではない。最初から「生命体」が存在であり、その存在の形態が人間であり、「体・志・行」の三元であるとする。

この存在論・認識法の違いは世界観・文明観（一神教と多神教）、歴史の行き着く将来にまで及ぶ。ここで人類の将来は一神教ではあやういというと、現実的な反論を浴びることになり、

地球規模での千年論争になる。
ここは小ぢんまりした論考の場なのでそこまでの論争は避けたい。
ここで重要なのは、再度繰り返すが、東洋の哲学は「はじめに生命体あり」であり、その現在でのさまざまな発現形態の姿が「現代」である。人間と人類という存在を正確に認識する基本は、この「体・志・行の三元論」による生命存在の理解から発するにあるとするにとどめよう。一人の人間の生は地球よりも重いのである。
天動説より地動説が、地動説より人動説がより真理に近いのである。
ちょっとややこしくなりかけたので、ここで暮らしの場へもどろう。
暮らしの場でなら次のような三つの現場での話になり、だれにも理解される日常的な議論が可能になる。三元の内訳はご自分でどうぞ差し替えてください。。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
からだ＝体＝健康
食べる・薬・サプリメント・休息・健康体操・・・有訴・疾病・・・↓医療
こころ・こころざし＝心・志＝知識
しゃべる・考える・読む・情報・文化・歴史を知る・・・・↓認知症
ふるまい＝行＝技術
歩く・自分でする・雑事・芸能・芸術・スポーツ・・・・↓介護

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この「生命体」としての三つの存在と発現の意味合いが納得できるのは、やはり人として半世紀を生きてきて、「からだ（体）」のどこかに故障・症状（すすむと有訴・疾病へ）を生じたり、記憶ちがいや物忘れが重なって「こころ・こころざし（心・志）」（すすむと認知症へ）に違和が生じたり、「ふるまい（行）」が自在でなくなったり（すすむと介護へ）といった自覚が現れる時期になってからのこと。

「ケア三元」（疾病・認知症・介護）に配慮してバランスよく暮らすこと。フレイル状態（一五ページ）に気づいたら、急いで予防・治療に当たること。

＊家庭内「雑事」が健康寿命を延伸

日ごろから「体・志・行」の三つのバランスに配慮した暮らしを心がける。

まずは「健康（からだ）」に留意し、その上で「知識や夢（こころ・こころざし）」をたいせつにし、「技術（ふるまい）」はさびつかないようにして暮らすこと。

この三つをバランスよく働かせることによって、「健康寿命」（健康上の問題で日常生活が制限されることなく送れる期間）は延び、高齢期の実人生はどんどん先を見通せるものになる。

スポーツ界で「心・技・体」として認識されているのは、スポーツでは心の構えが技・体のありように優先するから。高齢期の認識が「体・志・行」の順なのは、まず体を基本とし、そ

の上での志・行となる。とくに心（志）から入ると体・行に無理を生ずることになる。

ここで繰り返してまとめるが、日々の暮らしでのこの三つのカテゴリーのバランスが「健康寿命」を延ばす秘策になる。とくに男性で、三つの要素のバランスを欠いていることに思い当たる人は、症状が出ないうちから足腰を鍛え、三つそれぞれの「アンチエイジング＝若づくり」に努める。家庭内の雑事はいとわずに探してでも、奥方から奪ってでも担うのが何より三要素のバランスに効果がある。奥方との平均六年のエンディング期の差を詰めるにはこれしかない。

Ⅱ　「三世代平等型」長寿人生

「G型ライフサイクル」

これまで長いあいだ「ライフサイクル」というと、次の八つの階層にわけて説明されてきた。

「乳児期」「幼児期」「児童期」「学童期」「青年期」

「成年期」「壮年期」「老年期」

がそれで、この発達心理学から生まれた「八つのステージ」は、自分の経験としても、あるいは子どもの成育の姿や父母の生き方を通じて、だれもが納得できる分け方として認めている。

ところが今、史上に新たな「高齢化」という状況にあって、「高齢者」や「高齢社会」の実情をつぶさに考察しようとすると、上の「八つのステージ」ではうまく把握できない。高齢者本

人としては、やたらと長い「老年期」を「余生」として過ごすことになるし、若い人からみると、やたらと遊んでいる老人が多いなということになる。

なぜかははなはだ明解である。

このE・エリクソン以来の発達心理学による分類は、八つのうちの五つまでが三〇歳くらいまでの「青少年期」に当てられていて、「成長期の社会」を反映しているからだ。

いまでも発達途上の国ならこのままでいいのだろうが、いわゆる先進諸国の「高齢化する社会」つまり「成熟・円熟期の社会」の把握には適当ではない。長寿時代には逆に六〇歳から九〇歳までの三〇年に配慮したライフサイクルが要り用なのである。

「ジェロントロジー」(gerontrogy 加齢学、訳し方はいろいろ)という比較的新しい学問の観点からの高年齢層に配慮した「G型ライフサイクル」の導入、これが「人生九〇年」時代の人生のありようを明解にし、三世代がそれぞれ実情にあった暮らしやすい三つのステージを創り出すきっかけとなる。

＊「三世代」を平等に位置づける

新世紀にはいって国際的トップランナーとして先行するわが国の「高齢化」を、熟視し熟慮してきた本稿がここに提案する「G型ライフサイクル」は、「青少年期」「中年期」をすごしおえて「高年期」にある人びとが、暮らしのなかで納得できるものでなければならない。そして

当然に「青少年期」「中年期」にいる人びとが、これから迎える「高年期」の姿としても。
やや大振りにいえば、自然のめぐりである「春華秋実」のように成長、成熟、円熟してゆく姿を示して、後人からも高齢化途上国の人びとからも敬愛を受けることができるような人生。
そのための「G型ライフサイクル」なのである。
ここでは学問的にうんぬんするつもりはなく、いまこの国で高齢期を過ごしているみなさんが生活の実感として納得できればいい。穏やかに三つめの現役期である「高年期」の日又一日をたんたんと迎えて過ごす。
そこでまず次の表にご自分の来し方行く末を当てはめながらゆっくり見てほしい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「青少年期」　〇歳～二四歳　自己形成期　成長期
バトンゾーン二五～二九歳　選択期
「中年期」　三〇～五四歳　労働参加・社会参加期　成長＋成熟期
パラレルゾーン　五五～五九歳　高年準備期・自立期
「高年期」　六〇～八四歳　地域参加・自己実現期　成熟＋円熟期
高年前期　六〇～七四歳　成熟期
高年後期　七五～八四歳　円熟期
「長命期」　八五歳～　ケア・尊厳期　達成期

ここで「高年期」を中心に振り分けている「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の五つは国連が提唱している「高齢者五原則」で、国際的指針になっている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

これが「人生九〇年」時代を豊かにするための第一の流儀である。

標準としてだから、個人的に異和を感じるところがあればご随意に修正すればいいと思う。スミのミスをつつくのではなく、活かして用いてほしい。何も工夫せずに過ごして、エンディング・ノートや遺言書を何度も書き直すよりは着実に、「高年期」を体感しながら自己目標の実現や社会参加をつづけることができるだろう。

お気づきのように、二五年ずつの三期を「青少年」「中年」「高年」に当てている。

「高年期」は三つめの現役期として平等の存在感をもって据えられている。

この三期を三世代がそれぞれ平等な立場で「成長」「成熟」「円熟」期として理解し合って暮らすことで、二一世紀オリジナルである「長寿時代の三世代平等社会」は成立することになる。

「バトンゾーン」（二五～二九歳）。

というのは、青年期から中年期への個人的ライフスタイルによって生じる幅であり、青少年期として過ごすかモラトリアム期とするかは個人が選択することになる。大学院をおえたり、資格をとったり、就職企業を選びなおしたり、外国へ出たり、と若者が主体的に選択するために活かす期間である。中年期から高年期までを遠くみて選択するので「バトンゾーン」と呼ぶ。

「パラレルゾーン」（五五～五九歳）。

というのは、中年期から高年期への「パラレルライフ」（ふたつの人生）期にあるということで、自己目標の確認のための「高年準備期」である。こうして二〇世紀まで主流であった二世代＋α型社会の「老年期」ではなく、三つの現役期のひとつとしての「高年期」があって初めて、長寿時代を実体のあるものにできることになる。

これが先駆けて「人生九〇年時代」を迎えているわが国の実情を注意深く観察したところから整えた「G型ライフサイクル」表であるが、おそらく同様の考え方は当面する実情を異にしながら各地各所から発信されて、学問を通じて国際的基準として成立するはずのものである。

ここでわが国の高齢者であるみなさんと誇りをもって確認しておきたいことは、国際基準でいう「高齢者」（六五歳以上）が四人にひとりという社会を最初に達成した日本が、学問的な移入によるのではなく、みずからが「三世代平等型」長寿社会を想定し、国民みんなで磨き上げて輝かせる「ニッポン発二一世紀オリジナル」の宝石の一つだということである。

成長・成熟・円熟の二五年三期を体感

わが国の「高齢化」の実情をよく観察した上でここに採用した長寿時代の「G型ライフサイクル」の特徴は、人生のプロセスとして三つの二五年期を等しく据えていることにある。

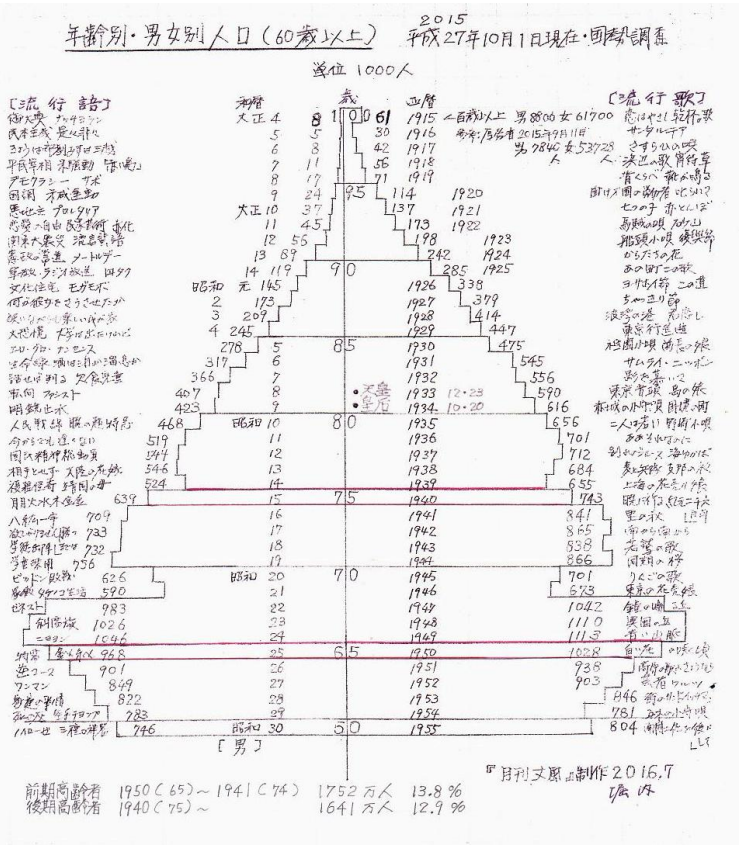
「青少年＝成長期＝〇歳～二四歳」

「中年＝成長＋成熟期＝三〇～五四歳」
「高年＝成熟＋円熟期＝六〇～八四歳」
改めていうまでもないが、青少年＝成長期の二〇歳ころの「体・志・行」（九ページ）、その後の中年＝成熟期の五〇歳ころの「体・志・行」、そしてそれに継ぐ高年＝円熟期の七五歳ころの「体・志・行」は、一貫していながらそれぞれに時期的な特徴をもっている。
それぞれにご自分のものだから、思い返してあるいは想像してどういう姿かを確認してみてほしい。どこといって明確な区切りがあるわけではないから、風呂あがりにそっと三面鏡の前に立ってみると、今、自分がどのあたりの「体・志・行」をもって人生を経過しているかが理解できるだろう。
前記の「発達型社会」のライフサイクルとは逆に、ここでは「高年期」に重点を置いていることに気づかれたこと思う。この三つの二五年期を等しく据えているところに先行する日本の「高齢化」の実情に即した分類のオリジナリティがある。
その上で「高齢期」を次の三つの時期にわけている。
「高年前期」（六〇～七四歳、成熟期）
「高年後期」（七五～八四歳、円熟期）
「長命期」　（八五歳以上、達成期）
いうまでもなく高齢期になると「体・志・行」のバランスには個人差があって、だから年齢

の幅も標準のものであって、実際には三期をどう振り分けるかはご自分が決めればいい。その配慮の上で、自己実現や社会参加をどう繰りこんで暮らすかの工夫が、長寿人生の充実をつくることになる。

ご自分が想定する高齢期の自己実現の課題を、無理なく「成熟期」「円熟期」「達成期」に三分して、ご自分なりの「G型ライフサイクル」をつくってみてはどうか。下の「年齢別人口表」を参考にして、はめこんでみるとよくわかるだろう。

若い人は先輩の活動を見守りながら、将来の自分の生き方の糧にする。今、自分が人生のどのあたりにあるのかの見当と実感が持てればいい。実感だから七五歳ですでに円熟期という人もいれば、まだ成熟期にあるとする人もいるだろう。



「自分は案外に若いんだな」

とおおかたの高齢者は自分がかなり年長だと思っているから、上の表で見れば案外に若いことに気づく。戦争による影響が出ている年代を除けば六五歳以上の高齢者三四〇〇万人は、安定したピラミッド型をしている。

実のところ、いまの天皇も「生前退位」をなさるにはお早いのであるが、「人間天皇」のお気持ちは最優先されなければならない。

六〇歳～七五歳の高齢者層は、史上新たな「日本高齢社会」を創出しながら成熟＋円熟期を迎える現役シニアである。後の章でその顔ぶれをご覧いただくと実感されるだろう。

その上の七五歳～八五歳（女性はすでに九〇歳）の高齢者層は円熟した「日本長寿社会」を形成している主役の人びとである。九〇歳からがいわゆる達成期としての余生。九〇歳代の男性は数は少ないが、戦中・戦後を生き抜いてきた頑強で「不死身」の大正丈人の方々である。

＊ 高齢後期からは「フレイル」に注意

国は七五歳以上の人を「後期高齢者」（一七五〇万人。参考東京都民一三六〇万人）としているが、七五歳で階層を刻むことの意味はなんだろう。

七五歳で暮らしが截然と変わるわけではないけれど、「フレイル」期を迎えて、からだの機能のどこかに症状が出て元にもどらない状態がはじまる時期であることには注意する必要がある。

七五歳ころからは生命体としての心身の活力が衰えるのを意識するとともに、病がまとわりつく時期であることにも注意しようということなのである。

もうひとつ、「長寿時代」の「G型ライフサイクル」の特徴は、「高年期（前期・後期）」という六〇～八四歳の第三の二五年期に繋いで、八五歳～の「長命期」を設けていることにある。

だれもが人生の成熟・円熟を実感するなかで、持病を得たりかけがえのない友人を失ったりしながらすごして、穏やかに「無為自化」という達成感を享受する「長命期」を迎える。

「わたしにはそんなものはない、日々これ好日」という「生涯現役」の方もおられるが。

八五歳～という刻みについては、「それは男性主体の認識です」という女性の側から異議をとなえる人があるかもしれない。

そこで男女に六歳の「平均寿命」の差がある実情にあわせて、男性の「長命期（達成期）」は八五歳～とし、女性の「後期高齢期（円熟期）」を七五～八九歳とし、「長命期（達成期）」を九〇歳～と分けたほうが納得しやすいかもしれない。ここでは「平均寿命」（女性）が八七歳であるという現実にも留意している。まずはご自分の人生設計と重ねあわせてみていただきたい。

お気づきかもしれないが、ここでは「余生」という表現を用いていない。「余生」ということばがお好きなら、八五歳～（女性は九〇歳～）ならいいのではないか。「定年後は余生」などとする前世紀的意識がいかに現実的でないかが知られるだろう。

「賀寿期五歳層」は八ステージ

いまも「何何先生の喜寿の会」とか「おばあちゃまの米寿の会」などとして個人的に祝われているが、先人は見定めえない人生の前方に次々に賀寿を設けて、個人的な長寿のプロセスを祝福してきた。

今日のような長寿時代になって、多くの同年配者が傍らで次々に祝いの会を催す時代。それなら同年配の仲間とともにお互いを励まし合って、前方に次々にやってくる「賀寿」をクリアしながら「百寿期」をめざすのもいい情景ではないか。（二〇一六年基準）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

還暦期（六〇歳～六四歳）　昭和三一年～昭和二七年　還暦＝六〇歳
禄寿期（六五歳～六九歳）　昭和二六年～昭和二二年　禄寿＝六六歳
古希期（七〇歳～七四歳）　昭和二一年～昭和一七年　古希＝七〇歳
喜寿期（七五歳～七九歳）　昭和一六年～昭和一二年　喜寿＝七七歳
傘寿期（八〇歳～八四歳）　昭和一一年～昭和七年　傘寿＝八〇歳
米寿期（八五歳～八九歳）　昭和六年～昭和二年　米寿＝八八歳
卒寿期（九〇歳～九四歳）　昭和元年～大正一一年　卒寿＝九〇歳
白寿期（九五歳～九九歳）　大正一〇年～大正六年　白寿＝九九歳
百寿期（一〇〇歳以上）　大正五年以前

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ただ漠然といつまでか知れない不安な「余生」をだらだら・はらはら過ごすのと、この「賀寿期五歳層」の八ステージを、仲間と励まし合いながら一つひとつ迎えて、「百寿期」をめざしてたんねんに過ごすのとでは、高年期人生に雲泥の差が生じるだろう。

「賀寿期五歳層」の人生。これが「人生九〇年時代」を豊かに過ごすための第二の流儀である。

＊仲間とともに「賀寿期」を過ごす

聖路加病院名誉院長の日野原重明博士が二〇一一年一〇月四日に百寿に達して話題になった。その翌年に映画監督の新藤兼人さんが到達した。新藤さんは到達してすぐに亡くなったが、百寿到達が前向きな人生の目標として実感をもたれるところまできている。

今年はおしいかな、百寿期のむのたけじさん、三笠宮が亡くなった。

還暦から百寿に到達するまでの間を「五歳層八段階」（百寿期は別格）に分けて、その年齢層である「賀寿期」の一つひとつを仲間とともに過ごす。

「還暦期」から「白寿期」までを八層飛びして「エンディング・ノート」を書くなどはバカげたこと。一つひとつをたんねんに迎えて過ごしてゆく間にも残念ながら「ちょっと、お先に」といって途中下車をする仲間を見送らねばならないこともある。

そんな友人の願いを引き連れて、どこまでも長寿を全うすること。普遍的価値である長寿を、

一年又一年、加齢を価値として意識して刻んでいくこと。一人ひとりのそれが総体としてこの国に新たな世界モデルとなる「日本長寿社会」を形成することになる。

二〇一五年末には次のみなさんがそれぞれの「賀寿期」に到達した。みなさんのお仲間の代表としてここにご紹介できるのは楽しい。新聞・ニュースその他で出合ってまとめた資料から勝手に選ばせていただいたことをお恕しねがいたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「卆寿期」（卆寿は九〇歳＝大正一四年＝一九二五年生まれ）には清水司、豊田章一郎、江崎玲於奈、小尾信弥、梅原猛、永井路子、富永一朗、橋田壽賀子、杉本苑子、大関早苗、色川大吉、杉下茂、岡田卓也、野中広務さんら。

「傘寿期」（傘寿は八〇歳＝昭和一〇年＝一九三五年生まれ）には倉本聡、柴田翔、大江健三郎、李恢成、松岡享子、畑正憲、美輪明宏、高橋幸治、野村克也、堺屋太一、根岸英一、富岡多恵子、吉行和子、羽田孜、小沢征爾、宝井馬琴さんら。

「古希期」（古希は七〇歳＝昭和二〇年＝一九四五年生まれ）には松原智恵子、東郷和彦、落合恵子、佐高信、川端達夫、宮城谷昌光、谷垣禎一、吉永小百合、栗原小巻、宮本信子、小此木政夫、増田実、鹿内春雄、茂山千五郎、池澤夏樹、タモリ、田中直毅、永井豪、福岡政行、水前寺清子、樋口久子、直嶋正行、櫻井よし子、岡本行夫、中曽根弘文、富司純子さんら。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ご覧のように、それぞれのお歳でお立場で、「現役長生」の日々をすごしておられる。

七〇歳の「古希」はやっと「第三賀寿期」に達したところ。まだまだ未踏の沃野がある。これらのお仲間といっしょに人生の新たな出会いを楽しむ日々が待っているのである。

第二章　モノ語りするマイホーム

1　マイホームに「MY・・」がない

団塊パパとママの憂鬱

マイホーム。

なんともいえず響きのいいことばである。これほどまでにやわらかい生活感を内包しえたカタカナ語を、他に探すのはむずかしい。耳にすると心安まる。

マイホーム。

繰り返しても変わらない。

それはいま高齢者となっているみなさんが、それぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年の間にその内容をつくった日本語といっていい。

だから細部の意味合いは個人によって異なる。

よき（良き、好き、善き）もの、ひよわなもの、やわらかいものを守る城として、「マイホーム」は先行の「わが家」や「家庭」などとともに、それに負けない温もりを日本語として持つに至っている。そこはかとない温もり。

だからそのぶん「ホームレス」ということばがそこはかとない侘びしさを伝える。

実は戦後っ子だったパパとママは、企業戦士といわれた先輩には「マイホーム主義」とから

かわれながらも、狭い団地の２ＤＫに身を寄せ合って暮らして、ふたりの子どもを育ててきたのだった。夫婦と子どもふたりの家族が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。

その後、職場までは遠くなっても、マイホーム・パパとママは、二段ベッドで育った子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、というより子どもたちにせがまれて、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての３ＬＤＫに引っ越した。そういう体験をもつご家庭は少なくないだろう。人生模様はあれこれあっても、振り返ればそれが「しあわせ家族」だったのである。

そういう「核家族」のしあわせをそのまま保っておられるご家庭はここでは静かに見守ることにしよう。

いま、たしかに築ん十年の家はある。でも、わが家にいま「しあわせ家族」はない、と藤谷さんはいう。

「しあわせ家族」がない？

藤谷さんもまた、郊外の３ＬＤで「しあわせ家族」をめざしたひとり。そしてその成功者と見えたのに、「マイホーム」の意味合いの細部に変化が生じているもよう。

なぜ？　藤谷さんのいい分をここで聞かないわけにいかない。

人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得して、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。長かった来し方を顧

みていま、築ん十年のマイホームの当主として、存在感の薄かったことを感じている。家もまた年を経て傷んでいるが、資材不在で、というより費用がことのほか多額で直せない。

みずからの希望を抑えても家族の希望をかなえることを優先してきた。だから藤谷家には応接セットや家具といった家族の共用品はそろっていても、自分のための専用品というのは少なくて、「モノと場」に表わされる当主としての存在感が希薄なのである。しかしこのあたりのありようは、本稿のテーマからすれば確認のための横道だが、藤谷さんが特別な例とも思えない。

＊アノヒトとかヒカラビてる人とかいわれて

子どもたちが自立して「エンプティ・ネスト」（空の巣）とはならず、夫婦と子どもふたりの核家族の形をなお保っている。娘と息子がふたりとも三〇をすぎても「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。サッカーならイエローカード一枚ずつといった子どもと暮らしている藤谷さんは、いま「しあわせ家族」ではないという。

藤谷さんは団塊でも最多の昭和二四年の生まれ。奥方は一つ下の「ぶらさがり団塊」である昭和二五年生まれ。結婚が遅かったため、子どもたちからは年とった両親はいやだと難題をいわれたりするが。

イエローカード一枚の娘は、「子団塊」のあおりを受けて、短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。親に結婚資金の準備がなかったか

らオヨメにいかないのだという。
そう娘にいわれてみると、たしかに外の人のためには熱心に相談にも乗り支援もしてきたが、娘の結婚について相談に乗った記憶がない。というより家庭内のことは家内にまかせてきた。
「こういう考え方はもっと高年齢の人のもので、団塊的でないようです」
藤谷さんはその件に関しては反省の色は見せるがそこだけ変える気はないようである。
下の息子は浪人はしたが、ごく普通の大学をごく普通に卒業して、就職試験を受けて勤めはじめたふつうより名の知れた輸送会社だったのに、短期でやめてしまって家にいる。
親のひいき目でもしっかりしてきたように見えるのだが、子どもの自主性にまかせているのだが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをしてすごしている。「ニート化」（ＮＥＥＴ。就業希望を有しない若年無業者）への気配もただようが、時折り出かけて「職さがし」はしている。
藤谷さんが毎日家に居るようになって、娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、ごくふつうに両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といっていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親には面とむかって「キミ、元気かね？」とか「オマエは・・」などと軽くあしらわれていると感じることがある。
父親の存在など意識せずに気ままにすごしている。
「この家はわたしが名義人なのだ」

というのも愚かしい。

壁面に娘が貼ったままの「のりか」（藤原紀香）のポスターほどには、底値までさがった土地の築ん十年という家の壁に存在感があるわけはない。

「ヒッペガシ娘」 vs「ツカエナイ親父」

「高齢者は資産を塩漬けにしているのです」

と、カネ儲けに抜け目がないと噂される経済学者が、TV番組で、経済の停滞はそれが理由ですと言い切る。

周りにだれもいない。藤谷さんは身を乗り出してTVに向かって抗議する。

「資産を塩漬け？　バカいうなよ。塩漬けにできる資産などどこにもないし、わが家ではとくに娘に強奪に近い形でヒッペガシ（資産移譲）されているというのに」

高齢者の「平均貯蓄額」が二三七〇万円という解説がはいる。暮らし向きに心配のない人が七割を超えると若いアナウンサーがいう。こんな話題を同居の娘と息子に聞かせたくない。数字にいつわりはないのだとしても、将来が不安で貯蓄をしたというのだから、貯蓄の多さより、将来展望をもって貯蓄など考えず生きられるような国づくりを話題にすべきではないのか。

入社のときから信頼していた会社の先輩は、

「ほどほどの赤字人生が男子の美学だよ」

と、貯蓄など考えずにきっぱりといい、
「きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするものだ」
と言い切って飄々としていた。
藤谷さんは後輩として、赤字まではともかくゼロに始まってゼロに終わる人生を納得する男子の覚悟ぐらいはしてきた。
このあたりの考え方は、将来が不安で貯蓄をしたという「純正団塊の世代」の考え方とは違うように感じる。だから貯蓄とはいえないほどの貯蓄しかないのを、娘や息子には申し訳なく思っている。思ってはいるがわたしはわたしだからしかたがない。
それにしても「下流老人」「老後破産」とはなんということをいうのか。
戦禍からの復興の時期に、貯蓄など考えていられない。みんなが等しく豊かになるために分けあい助け合ってきた。そういう生き方をしてきた善意の人たちに対して失礼ではないか、と藤谷さんは憤慨する。
しごとはほどほどにして、家にＦＡＸを置かず、確定申告で税金逃がれをし、貯蓄にいそしんでいた同じ団塊Ｍの顔が浮かぶ。
「あいつが人生の勝利者か」
藤谷さんはしごとはとことんやってきたと自負しているし、まだやるつもりでいる。
しかし高齢者のしごとは探すとなると少ないという藤谷さんの話を聴きながら、ここにも二

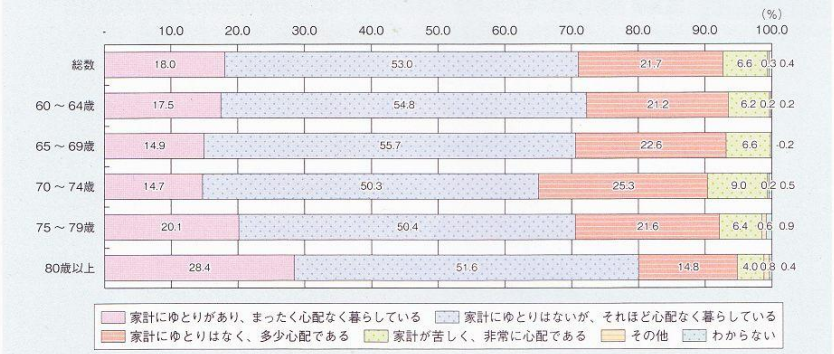
〇年の国の対策の延滞が露呈しているように思う。

一方で女性の登用は「ダイバーシティ」（多様性）と呼ばれて多様に用意されている。女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるとはやしたてるのはいいのだが、どれほどの若い女性が実力で仕事をし、自分の実力（かせぎ）で暮らしているのだろうかと、ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそといつものディオールのパーティー・ドレスに着替えて、「変衣変性」する娘の姿をみながら、藤谷さんは際限なしの「女性化」に懸念をもっているのである。親の育て方がどうのではなく、これが風潮なのだからとやかくいっても仕方がないとはわかっているが。

＊総理は女性と若者に肩入れ

娘たちを「時代の花」として擁護し、女性の活力に期待する立場からは無条件に、両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じての家庭内ヒッペガシは当然と考えている。

図1－2－3　高齢者の暮らし向き



資料：内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」（平成23年）
（注）対象は60歳以上の男女

教育費一五〇〇万円まで無税譲渡の政策を見逃がさない。それなら目前で必要としている娘たちの社会教育費としてまわすべきだという論法である。こんな風潮に耐えられる家庭はどれほどあるのだろう。

女性への追い風は経済界から吹いてくる。

毎年、「男女格差報告」についてのダボス会議の報告で、日本はこれまで長く一〇〇位以下という女性活用の低位置が放置されてきた。それが急に経団連や同友会までが女性の登用を言いだし、「ダイバーシティの推進」としてすすめる。

そして安倍総理もことあれば女性と若者の成長力に期待し、女性重視を打ち出している。

女に生まれてよかった。笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面は、すでにどのチャンネルもどの番組も、はしゃぎまわる女性たちで占められている。若づくりの男たちがわき役で、高齢者は違和感があって出られない。

藤谷さんは職場の雰囲気をこんなふうに想像する。

「団塊の世代」の男たちがいなくなってしまった職場は、残った男たちでは頼りなくてもたない。そこで女性社員が実力以上にはしゃいでいてくれたほうが華やかでいい。経営側の見積りにはそんなところにもあるのだろう。

いまの職場では意に沿わないと「ツカエナイ上司！」になる。

家では人並みに応じられないと「ツカエナイ親！」としてあしらわれる。

「お前こそヒッペガシ娘！」と、いってしまえば悲しい花いちもんめである。

いい返せないのである。藤谷さんばかりか、うかうかしていると心優しい高齢者がみんな居場所もない、おカネもないになりかねないのである。

新世紀になって、若い女性やＩＴ青年たちとともに、年輪を経て熟成した生活感性で渋く輝いているはずだった高齢者が、居場所もおカネもなくなるとは何たる仕打ち！

職場ではＩＴ音痴と揶揄され、はてはリストラの対象ともなった。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見られた「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、藤谷さんには、戦後すごろくの「上がり」に近かったところから「ふりだし」へと戻って行くように思えてくる。

だれもが安心のできる老後どころではないではないか。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」の予感

もう少し、二一世紀オリジナルへの藤谷さんの負の感想を聞いてもらいたい。

何としたことか、わが家にいて、「ホームレス」とさほど遠くない侘びしさを感じている戦後ッ子パパが増えているという。

「下流老人」や「老後破産」ということばが先回りして待っている。

パパが過ごすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでもなかったのに気づかなかっただけのこと。

テレビのチャンネル権はもともとない。というより見るに値する番組がない。ラジオのほうは深夜にふとスイッチをいれて、ほっとするいい人の話や音楽とめぐりあうことがあるが。

クルマは一台しかないから行く先が違えば使えない。というより子どもたちのようにあちこち行く場所がない。しかし車検・整備・ガソリン・ＪＡＦ費用まですべて親持ちである。

食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。おでんよりスープ、魚より肉料理。自分では急に作りようがないから外食時代に好きだったものも食べられない。これがつらい。

聞けばだれもが同様で、会社でのしごとがなくなって、家にも居場所がなくなって、「ホームレス」気分になる。といって屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか、公共図書館か、パチンコ屋の休憩室くらい。だからウオーキングでいらいらを解消するしかない。

二〇世紀のよき「マイホーム」はほんとうに無事なのだろうか？

老後を子どもに期待しないという高齢者の増加が「世代交流」の必要性の底を流れているとしたら、藤谷さんは特別の例ではないのかもしれない。

屋外に「ステージ」がない原因は社会のしくみにあるといってみても、どうしたらいいのか解らない。わが家のなかにさえ「居場所」がなくなるのだから。

このまま推移していては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かっていると感じられる暮らしは招き寄せようもない。

＊どうする家庭内孤立パパ

藤谷さんは改めてじっくりわが家の中を見直して見る。

本だなの本が動いていない。

家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の中古品だ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は百均（DAISO）やスーパーものが多くなった。

シャツはユニクロ（UNIQLO）かアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物にはブランド品もあって、ルイ・ヴィトン（LOUIS VUITTON）やプラダ（PRADA）やディオール（Dior）やシャネル（CHANEL）などは藤谷さんにもわかる。しかしスーパー品とのアンバランスに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

藤谷さんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ（OMEGA　終わりの意）の腕時計だけ。家族を優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないかとさえ思う。

気がつくと、少ない自分のものが孤立して見えてくる。

家のなかにもっと高齢期の専用品を増やさねば。

ロ　わたしのモノの存在感

マドギワに「ＭＹ・チェア」を据える

前の項の藤谷さんはリスクを負わない着実なタイプなだけに現状への解決にふみきれない。だが、同年の中村さんは可能だとみれば挑んでみるタイプである。企業側の海外進出の事情で同じころリストラに合ったときに、給料は度外視して国内でやれることがあった同業他社に移った。と同時に高齢期の暮らしを考えて「家庭内リストラ」にも着手した。

子どもふたりのうち、息子は会社の出張で東南アジアに出ているが、娘の方は当然のようにして居座っている。そんな中村家のようすを覗いてみよう。

リビング・ルームの一画、ネコの額ほどの庭と室内の双方が見渡せるマドギワに、特別席「シニア・スペシャル・シート」を据えている。会社でもマドギワだったし家でもマドギワと、居心地を合わせることにして。

まずは旅先で記念に入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。文字盤が気にいっているスイス製の置き時計をサイドボードの隅に。

中村さんの「ＳＳ（シニア・スペシャル）シート」は、高齢期人生をゆだねる「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。含みというのは「不在の在」としての存在感。重量感より意匠センスより何より座り心地を優先する。いうなればわが家の「玉座」か「師

子座」か「座禅座」かである。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのだから、「ＳＳシート」として大切に扱うことにしたい。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「ＭＹ・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日を静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。わが国には古来坐して過ごす習慣がなかったので、「ＭＹ・チェア」がない。そこで、高齢期人生への投資をする。

＊即座の効用は不在時の存在感

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要があり、そうなって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」

というのは、中村さんがマイホームを建てたころの有名建築家の提言で、まことにその通りと思ったものの、家族思いの当主としてはそこまでの自己主張をしなかった。老い先長い高齢期を通じて使い込むことによって座り心地を熟成させてゆく「ＭＹ・チェア」。

中村さんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらしていて、見るからによく、座り心地もよさそうだという。

最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製リクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅がある。

中村さんは調べの段階で、思い悩んだ末になんども座ってみてドイツ製スツールにした。

長い高齢期を安らいで過ごす拠点が「MY・チェア」なのだから、これといったイスと出会ったら思い切って投資（浪費）をすること。初恋の人を失った思いを二度もすることはない。還暦の祝いでもいいし、古希でも遅くはないが。

一日の活動を終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとしきり一日をふりかえる。「さて」と気を引き締めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのだ。

どっしり座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

このあたりの選択と実行は挑戦派の中村さんから学ぶとしよう。

わたしのモノ同士のモノ語り

意識して高齢期のモノのありようを考えることは、これまでになかった「家庭内高齢化リス

トラ」のはじまりであり、新しい歴史がはじまる原点である。

個人にとっても、企業にとっても、社会にとっても。

家庭内でモノが動けば、企業が動く。企業人がそこに気づいてわが社の高齢化製品を考えるきっかけになる。小回りのきく中小企業が保持する技術が動く。それが「高齢化経済」への突破口になる。需要側からの強い要請がないかぎり、いま企業はリスクを負っては動かない。

中村さんのような高齢者がさまざまな用品を求めて要請を出すことで、「足踏み」していた中小企業が動く。動かなければマーケットを他に奪われることになるからだ。

わが国の高齢者が、百均商品でがまんしてきた日用品を、生活感性にあった優良な国産品に差し替えるチャンスになる。モノが良く安心して使えて長持ちすれば、やや高でもユーザーは家庭内の「高齢化コア用品」として入手する。

候補はいろいろ。

中村さんはデジタル化したがシャッター音と手触りの感触に思いの残る高級一眼カメラまで手元に置いている。古物ではないという生活感覚で。部品を揃えるのに一苦労するがオーディオの愛用機器が混じっている。

楽器。碁・将棋盤や釣り具セットはある。ゴルフはやらない。手仕事に感じ入っている碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンチーク（西洋古美術品）。日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車などのミニチュア。

素朴な木製アフロ・グッズ・・けっこうあるものだ。手芸品もある。
それにあちらこちらに散在していたのを全員集合！をかけてあつめた七〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれくらいで十分だという。
どれもお気に入りの「わたしのモノ」であり「高齢化コア用品」の候補だが、その中から五～七点を選び出して配置し、時折り並べ替えをする。暮らしの基点になる「ＭＹ・チェア」から動いて出会える範囲に配置すればいいとのこと。
家庭内に大道具・小道具による「高齢期ステージ」が立ち上がる。

＊専用品を結ぶ暮らしネット

地球儀なんか意想外におもしろいのではないか。
極東アジアにある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角にあって、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋大国」（領海・排他的経済水域では世界九位）であることを宇宙飛行士の視点で納得することができる。
極東（ＦＥ）の「小日本（シャオ・リーベン、領土では六一位）」であるとともに、パン・パシフィック（ＰＰ）の「海洋大国」であるという多重性を理解することで快い自信を与えてくれる。
本ものの夢の旅は船旅にある。タンカーも必要だが、サービスを徹底

した世界有数の中型客船を太平洋航路に数多く就航させるのは海洋国の役目である。船中で人びとと出会いながら日本と日本製品の優良なところを多いに話題にすればいい。太平洋諸国との友好も進む。

海洋大国化は世紀をかける事業となる。

家庭内の話に戻ろう。

いまや手にいれるのは困難な貴重種だというが、蝶の皇帝「テングアゲハ」なら華麗に舞う姿を思うだけでいい。胡蝶に「物化」して舞ったという壮年の荘子の「周（荘子の名）の夢に胡蝶たるか、胡蝶の夢に周たるか」という「胡蝶の夢」は味わって損はない。

旨し「天の美禄」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利。掌の上でのぬくもりは触れてなまめかしい）でもいい。

もちろん親ゆずりの骨董品でもあれば、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」の候補はいくらでもある。なければレプリカを置いてホンモノを探し出すこととなる。レプリカの現物化が重要なのは、みんながそれを期待し、企業の生産現場に声がとどけば、「高齢社会」のモノを豊かにする内需の契機となるからだ。

ユーザーとメーカーの情報をつなぐネット企業もさかんになる。

ここで「わたしのモノ」として終生にわたって愛用できるような「高齢者むけ優良品」を創り出してくれる全国各地の熟年熟練技術者のみなさんにエールを送って先にいくとしよう。で

き上がるのに何カ月も待たれるようなスグレモノの少量生産でいい。

こうしていくつかの「高齢化コア用品」とそれをめぐるいくつもの季節小物、それに奥方の「わたしのモノ」の応援をえて配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママの存在感を伝えるしかけが見えてくる。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強める。

同じ機能のモノでも親子に較差（格差ではない）があっていい。モノによる「家庭内の一品多種化」はモノを通じた親子語りのはじまりを意味する。

外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた高齢社会活動家とはいえない。

「四季カレンダー」と「床の間春秋」

木下さんは定年待ちの高齢者のひとり。

「改正高年齢者雇用安定法」（二〇一三年四月）によって会社の定年は六五歳まで延びたが、それで新たな心躍るしごとが増えたわけではないし、何であれこのまま定年まできちっと与えられたしごとをこなして過ごすつもりでいる。しごとをつくれないのは会社のほうで、きちっとした高齢社員のひとりである木下さんに、ここでは社内でのことをとやかくは聞かない。しご

との外で心躍ることがあるという木下さんのしごとの外のことを聞いてみたい。
「心躍るというと大げさですが、季節ごとの催しや、旬の料理づくりや、俳句仲間との吟行や、いろいろですよ」
ここでの木下さんへのわたしの関心は、「一年」ではなく「一季」を基本として暮らしている人だからだ。前章の藤谷さん、中村さんの一歩先をゆく「四季丈人」なのである。

＊「四季カレンダー」

居間には重厚なサクラの机にそろいの「MY・チェア」もある。部屋の真ん中には据え置きのヒノキのテーブル。「四季丈人」の木下さんは「MY・チェア」に座って眺められる壁面に、ビジュアルのしゃれた「四季カレンダー」を掛けている。季節ごとの三カ月のもので、春なら三・四・五月、夏なら六・七・八月というように、四季それぞれ三カ月の日付が視野の中に呼び出されている。
木下さんは淡々と語る。
「年末恒例の東京銀座・伊東屋の「カレンダー展」などをのぞいても、「四季カレンダー」と称するものはありますが、実際に四季ごと三カ月の九〇日間のものは見かけないですね。あるのでしょうがわたしの眼につくほどにはない」
と木下さんとわが「四季カレンダー」を見やりながらいう。
お茶の会とかお花の会とか季節の移ろいに寄り添うような暮らしをしている人びとから需要

はあるはずだし、身近にあっていい暦なのだから、いずれはカレンダー会社が競って制作する「季節しごと」になる時がくるはずだからと、あわてず騒がず待っているというのが、木下さんのひそかな希いなのだという。

「四季カレンダー」はカレンダー展で探しても見当たらないから、例年入手している馴染みの写真家のカレンダーを、四季ごとに三カ月三枚を貼り合わせて仕立てているのだという。

新年・冬は前年一二月～本年二月、春は三月～五月、夏は六月～八月、秋は九月～一一月、次の新年・冬は一二月～次年二月（まだない）である。なるほど、よく見ると月と月の間を貼っていて手製であるのがわかるが、離れてみるかぎり「四季カレンダー」になっている。

季節行事や旧暦は記されているから、「四季」はカレンダー上に鮮明に表現されている。サインペンの赤マルは、参加する催事や「吟行日」である。

＊「季節小物」あれこれ

「四季」を取り込む小物や仕掛けを、木下さんは「MY・チェア」に座って眺められるほどよい位置にいくつか配している。年四回の季節はじめにおこなうモノの配置の「季節替え」を中掃除といって楽しんでいる。三カ月の新しい季節を待って迎えて送る季節行事である。

花鉢、紋のれん、玉すだれ、星座図、雛人形、五月人形、鯉のぼり、扇絵、風鈴、蚊やり豚、菊人形、丸火鉢・・といった「季節小物」の置物や飾り物

を入れ替えたり移動したりする。季節の移ろいに応じて、住いにかんする春もの、夏もの、秋もの、冬ものを目立たせるとともに、衣・食それぞれの四季の変化も楽しんでいる。

＊「季節感」を活かす和風回帰

「茶道や華道も、そろそろ男性回帰の時期ではないですか」

木下さんは持論を述べたそうである。

「和風回帰のキイは男性による回帰です」

茶道も華道もそうだが、文化勃興期の変容は男性が主導する。けれども完成期以降は形式美として女性が静かに支えるという。木下さんは茶道も華道も双方とも奥さんより手が上というのが自慢である。

和装もまたしかりで、これまで主として女性の儀式用の盛装として、技術も意匠も素材も職人によって支えられ保存されてきたが、いまや「季節感と地方性を享受する高齢男性」の登場によって、「モダン変容」をする時期にあると、わが身に引き寄せて熱心にモノ語る。

「季節感」を活かす和風回帰をリードするのは男性だというのである。

＊「床の間春秋」

木下さんはこんな指摘もする。

「どこのお宅でも四季を取り込むために先人が残してくれた仕掛けが活かされていませんね」

と木下さんがいう仕掛けというのは、「床の間」のことである。

和風建築のお宅にはかならず和室に床の間がある。

ところが冷暖房機器があって季節感がない部屋なので、軸は年中かけっぱなしの一幅だけになる。これではせっかくの「床」が動かずに惜しい。というより無いに等しい。季節の通風を心がけている木下さんとこの床の間は、花の軸を「梅」「牡丹」「蓮」「菊」の四幅をそろえて「四季花軸」としているという。

まずは春秋一幅ずつそろえれば「床の間春秋」が楽しめる。それでも床の間は季節を感じて動くことになる。有名画家のものは高価だから、習作期の画家のものや素人画家の力作に魅力がある。

「ぶんぶんクーラーを回して密室で過ごす無季節、無機質な「常春」指向では「床の間春秋」を楽しめるはずがない。そんな部屋で過ごす文化人なんて失格ですよ」

そこまでいいますか、木下さん。

もうひとつ、木下さんお気に入りの「エイジド用品」がある。

テックタック・テックタックと振り子が行き来するウルゴスの古時計。これは形もよく据えられた部屋の一画で生きている。静かな室内でも、あるともなくある柔らかい音がいい。いわれるまでは気づかないほど。

百寿期の「おおきなのっぽの古時計」とまではいかないが、形も数字の表現にも洋風古淡の味わいがある古時計である。振り子の音はどこまでも柔らかく音楽の領域に達している。

「風鈴がうるさいなんていわれちゃうのは、風鈴のほうがいけない。現代の日本の製品は音に鈍感すぎる。あるとも知れない音でいい。カメラのシャッターのシャカシャカは最低。記者会見の時のあれがいいという神経がわからない。製品哲学のあるライカにはありえないですね」

あのシャカシャカ音が忘れられないという前章の中村さんを思い出したが、これはここでは口にできない。

古時計の遅れは気がついたところで直すのだという。

傍らにデジタル時計も置いていて、

「二もとの梅に遅速を愛す哉、です」

などと、蕪村の句を挟みながら、木下さんは新旧の時計の遅速をもまた楽しんでいる。

一日の課題を「八方時刻」に振り分ける

だれもが何の疑いもなくさしたる不具合もなく、一日を二四(時間)に刻んですごしている。一時間の体感はかなり正確である。日ごろ、テレビの一時間番組や三〇分ドラマや十五分ニュースや三分コマーシャルに接しているので、これらの長さを体内時計がうまく合算して、日々をつつがなくすごしている。

時計はデジタルが多くなったが、長短の針や数字に味わいがあるアナログ時計も二つや三つはあっていい。十二時、三時、六時、九時の三時間ごとの刻みは目に焼き付いて鮮明に時刻を示してくれる。

そこでここではそれを活かして、三時間ずつ八つの刻みを意識した「八方時刻」を、時間の多重標準としている西岡さんの暮らし方を推奨したい。

「八方時刻」というのは、次のように一日を八区にわけたものである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

更（ふけ）　〇～三時
明け方　三～六時
朝方　六～九時
午前・昼前　九～一二時
午後・昼過ぎ　一二～一五時
夕方　一五～一八時
晩方　一八～二一時
夜　二一～二四時

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一日を八区（八方）に分けることで、区ごとの印象が明解になり、それとともに行事や活動

もまた明解な記憶を残してくれることになる。

＊三時間ごとに一課題

「更」は五更まであって三更からが日替わりだが、夜更けや深更として日替わりの感覚があるので、それをはじめの一区に据える。

二区の「明け方」と三区の「朝方」には異論がないだろう。正午をはさんで四区の「午前・昼前」と五区の「午後・昼過ぎ」そして六区の「夕方」を迎える。

さて七区（午後六時〜九時）。

ここは呼称が問題で、気象庁は天気予報で「宵のうち」と呼んでいたのを、人によって捉え方が違うからという理由で、二〇〇七年四月からは「夜のはじめごろ」に変更したが、収まりがよくない。そこで本稿では朝昼晩としての実績をもつ「晩方」を七区に据えた。そのあとが一日の終わりである八区の「夜」である。

明日にメーンの行事があれば、前もって〇区に据えておく。日々を三時間ごとの八区に刻んで、そこで出合う「モノ」や「場所」をしっかり配置して過ごす。

たとえば、西岡さんの一日はこんなふうになる。

某月某日。「朝方」には散歩をしてから孫といっしょに朝食をして朝刊を読む。「昼まえ」には米寿を迎えたＳ先生にお祝いの手紙を書き、Ｔさんに電話。「昼すぎ」には軽い昼食をす

ませて郵便局と図書館へ。「夕方」にはYさんを訪ねて話をし、日用の買い物のあと夕刊を読み、「晩方」には晩飯をすませてTVニュースをみ、「夜」にはEさんへメールと読書。夜更かしはしない。

その間、三度の食事で「健康」に留意し、読書（朗読がいい）や会話で「認知症」を制し、よく歩くことと雑事で「行動力」を保持して過ごすことで、本稿の「体・志・行」三元カテゴリーに配慮しながらバランスよく暮らそうという趣旨と重なる。

「八方人生」には、日々を着実に刻んでいるという充足が感じられる。「八方美人」ほど目立ちはしないが、西岡さんのような「八方丈人」には生活実感がある。

目　「暮らしの知恵」を次世代に伝える

「実家依存症」といわれても

モノ語りするマイホームの行き着くところは住宅そのものにある。

孫はかぎりなくかわいい。

子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、祖父母としてわが家の三代目を養育する場を用意することになる。

いろいろやりくりして多くの家庭が「近居」や敷地内「隣居」や「同居」を成立させている。

「近居」の場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれるこ

とはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。
幼い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもたらしてくれる。そこで出会いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。
きちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっていても、現状ではこのあたりが標準的「しあわせ家族」となっている。
ここでは「近居」がうまく機能しているご家族のしあわせを祈りつつ、減りつづけてきた「三世代同居住宅」をめざす渡辺さんの課題を見てみたい。
三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまうからだ。国の骨格をつくっている家庭の絆を強くし、「わが家三代の暮らしの知恵」を子子孫孫に伝えるには、どうしても必要な住環境だからである。
渡辺さんも中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをして、団地よりやや広い都市郊外のこの一戸建住宅を購入して転居した。それでも「二世代住宅」が精いっぱいで、このままでは「二世帯住宅」にはならない。
二人の子どもがそれぞれに自立した後は、夫婦ふたりで暮らしている。娘の卒業記念に地元の小学校が分けてくれた梅の若木を庭に植えたときのこと。下の息子の野球の応援で甲子園までいったこと。作文や家庭科の手編みを手伝ったこと。恋人の確認に同道したときのこと・・。
父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるが、子育て期のいくつもの困難をクリア

してきた父として母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家はなお娘にとってはひそかな生活戦略にかかわるスペースでもある。

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇％までが同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇％台になっている。そんなことはないと思うのだが、諸外国と比べて親子の接触は少ないという。

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

渡辺さんの長女は第一子を産んだあと、二五歳までの予定だった第二子の出産期をはずすとあとは先延ばしして三〇歳代に。これが一般的だとすると、少子化に歯止めのかけようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか二人目の子どもをと覚悟はきめても、不安定な夫婦の収入では将来、養育・教育費が重圧になるのは見えている。

公立でも約一〇〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるというし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつのるばかり。そこで、「カアさん力を借して」ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。

＊M字型でなく真一文字型の女性就労

国はこれまで夫婦ふたりによる子育てを「エンゼル・プラン」（文部、厚生、労働、建設の四

大臣合意により平成六年一二月に策定）以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対象にして養育のしごとをしている専門職の側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていない。

みなさんは驚いてはいけない。いまでも「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では、「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていないのである。これでは孫にわが家三代の暮らしの知恵をと考えても宙に浮いてしまうのではないか。

若いふたりによる大都市での子育てと地方での実家での子育てでは異なっていいと思うのだが、さなざまな事情が重なってあって、「祖父母」は孫育てから排除されている。しかし地域の次世代育成では必要な人材となる。

「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦が少なからずいる。

渡辺家では、母が子育てに力を貸し、娘がしごとを続けながら第二子の出産を可能にすることにした。かつて専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、M字型就業を避けて真一文字型の就業により専業課長でありたい娘による「三世代同居」へのUターンを選択することにしたのである。

「三同同（三世代同等同居）型」住宅

大都市近郊に住む渡辺さん夫妻は、近居して子育て中の娘家族からの要望もあって、「二世

帯三世代同居」型の住居への建て替えを決めている。

覚悟というと大げさに聞こえるが、目をつむっても、どこに何があるかまでが分かっている住宅から、新たな暮らしへの転換は、やはり覚悟がいるという。地方のお宅なら、敷地内での「隣居」が可能だろうが、都市郊外住宅の場合は残念であるが、そこまでの土地の余裕がない。だから建て替えになる。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。そこで渡辺さんは訪問会に参加してみた。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居だから外形も安定している。樹木も育っていて、大ぶりに枝を広げたサクラも庭隅にあって、それを囲むようにしてL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

渡辺さんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻のほかには一人っ子の高校生の娘と義母の四人家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘

図1－2－1　65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合

資料：昭和60年以前は厚生省「厚生行政基礎調査」，昭和61年以降は厚生労働省「国民生活基礎調査」
(注1) 平成7年の数値は兵庫県を除いたもの，平成23年の数値は岩手県，宮城県及び福島県を除いたもの，平成24年の数値は福島県を除いたものである。
(注2) ( ) 内の数字は，65歳以上の者のいる世帯総数に占める割合（%）
(注3) 四捨五入のため合計は必ずしも一致しない。

の部屋と広いリビング。一角に書斎もあって、「マスオさん」（サザエさんのオムコさん）タイプの男性として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。

上下階の雰囲気に違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからだろう。「三世代同居型」住宅として申し分ないが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったという。

＊メーカーが高齢化対応で配慮比べ

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省）が出て二〇年になる。この年の一一月に「高齢社会対策基本法」が成立した。「基本法」から二〇年、住宅産業は、メーカーの配慮くらべで高齢化対応がもっとも進んでいる業界である。「失われなかった二〇年」といっていいほどだ。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「二世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの二世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、共用スペースのつくりつけが「ミドル＋ジュニア」主体に寄りがちになっている。だから「三世代型」住宅とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられる。ここにも高齢期が「余生」であると

いう旧来の高齢者意識が濃く反映されている。これではほんとうの高齢化時代の三世代平等住宅とはいえない。

「人生の第三期」の主役として、これから二〇年もの長い高齢期を「円熟人生」の主役としてゆったりと暮らす家ではない、と渡辺さんは気づいている。

暮らしの知恵を次世代に伝える

ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母であるバアバちゃんの出番である。アの位置が微妙なところ。ジージもそう。孫であっても、ー（ひっぱり）の位置が下に変わると顔つきがけわしくなる。

孫の日々の成長につきあいながら、わが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての居間（共有スペース）。そこを中心にして周りへ「三世代」のプライベート・スペース。孫と接点をもつ居間への動線。娘と共有する台所への動線。実質的主人であるバアバちゃんの工夫を織り込んだ「三世代住居」を実現すべく渡辺家は設計にはいっている。いまは三世代が揃っていなくとも、三世代が常に等しく扱われる同居住宅が「三世代同等同居型」住宅（長いので「三同同型住宅」と呼ぶ）である。

「家族みんなで考えていろいろ解決することができますから」

と、渡辺さん夫妻は親・子・孫三代が出くわすさまざまな場面での処理にも気をくばる。

「三同同型住宅」を実現できる渡辺家は、「超」がつくほどの「しあわせ家族」だが、国の骨格になる家族として多くあってほしいケースであり、優遇措置を講じても地方創生を担う三世代のための居場所として増やすことだ。国の骨格を形づくる強くてたおやかな国民性は、三世代あるいは四世代同居の家族によって培われ継承されていくのだから。

「三同同型住宅」の標準化のために、国や自治体は優遇措置をおこない、建設業者はノウハウを蓄積し、企業は女性社員の地元勤務型キャリアの設置とともに、子育て期の女性が能力を十分に発揮できるよう支援する。地域と家族が総出で次世代を育てることとなる。

女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトというM字型就業にかわって、高年齢まで真一文字型にしごとに集中できる女性人材として処遇されるようになる。

*「ジージ」を自慢するジュニア

そして次世代に、母系のつながりを有効に活かしながら「わが家の暮らしの知恵」を伝えることが可能になる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによってもたらされる孫世代へのメリットには計り知れないものがある。父と母はともに充実してしごとに向かい、祖父母は家の内でも外でも孫たちの成長を温かく見守る。

「うちのジージがね」

といって、ジージから教わった暮らしの知恵や悪知恵を自慢するジュニアが三分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。

高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。

これもまた「高齢社会」を構築するとともに、国の骨格を強くするために重要な「三ステージ化」の一環といえるのではないか。

第三章　高い感性に応えるモノづくり

Ⅰ　「MADE IN JAPAN」のゆくえ

「サンパク以後」（三八九一五）は片下がり

年末の東京株式市場「大納会」で、「東証一部の株価」が三万八九一五円というピーク値を記録したのは平成元年（一九八九年）一二月二九日のことだった。平成になったばかりの年の暮れの華やいだ記憶として今に残っている。

「三八九＝サンパク＝三白」というのは正月三ガ日に降る祝いの雪をいう。

一九九〇年正月の東京の空に雪ならぬ株価が舞って、「サンパク以後」（三八九一五）はひたすら右片下がりの展開となった。

いわゆるバブル崩壊と長かった成長時代の終焉である。

低成長から対前年度比の指標でマイナスになると「ゼロ成長」という。それが新世紀になってもつづき、「失われた二〇年」を過ぎてもなおつづく。先進国は同様の傾向にあるものの、米英独仏とくらべて日本の停滞ぶりが目立つ。とすれば、日本が欧米と異なる事情があるはずで、その事情を明らかにする必要があるだろう。

そんな中で、平成生まれの子どもたちは、大学バカ化をいわれながら入学し卒業し、就職し

ていま企業現場で働いている。強いられて学ばず、強いられて働くことをしない。それで国際比較で学力水準が落ち、経済がゼロ成長でもその責任は平成生まれの子どもたちにはない。むろん子どもたちはそれを知っている。だからノーベル賞の日本人受賞は誇るべきことだが、前世紀の先人の成果であり、自分たちの中からは出ないだろうと思っている。

教育は将来の諸事情を左右する重要な要件だが、ここは教育を論ずる場ではないので深入りはしない。

「MADE IN JAPAN」のゆくえを探ろうとしているのである。

昭和六四年（一九八九年）の秋から重篤な状態に陥っておられた昭和天皇が、一〇〇日を超える闘病をつづけた末に、年を越して一月七日に八七歳の高齢で亡くなられたのだった。

このときの闘病から崩御、そして平成になって二月二四日の「大喪の礼」に至るあいだの国民の自粛のようすを思われて、いまの天皇はできるかぎりそれを避けたいというご希望を述べられて「生前譲位」のひとつの理由とされている。

そして六月二四日には、「東京キッド」や「私は街の子」以来、戦後の日本を体現していた歌手の美空ひばりさんが、最後に「川の流れのように」を歌って五二歳で亡くなっている。

「やれやれ、これで戦後が終わったのだ」

とつぶやいた大正や昭和戦前生まれの人びと。

とくに終戦を二〇歳～三四歳で迎えて働きづめできた大正生まれの人びとは、このとき六四歳～七八歳の高齢期になっての実感だったにちがいない。

＊高齢者に内在するデフレーション

「昭和」が終焉し、「平成」と重なって始まった日本経済の下降。

高齢期にある人びとのなかには、みずからの戦後を顧みての終息感と、その後の「経済の萎縮（デフレーション）」とを体感として理解した人が大勢いたのだった。この国の底力を揺り起こすような新しい目標も構想も将来に見当たらなかったから、「やれやれ」というためいきまじりの到達感が何より実感だった。

戦乱で亡くなった人びとへの鎮魂の思いは心の底から消えなくとも、自分の肩にかかる荷だけは静かに降ろし、長かった戦後の緊張を解いたのだった。

わが身を顧みた高齢者の一人ひとりに生じた「内在する萎縮（デフレーション）」は、ゆっくりとした静かな変容であり、外から気づかれることはなかった。

しかし戦争の惨禍を知り、どん底の貧しさを知るという経緯をもつ昭和時代の自分たちの後を、戦争も知らず、貧しさも知らない平成時代の若い連中が一対一で引き継ぐことなどできないだろうという自負と憂慮をない交ぜにした感慨は、仲間同士の会話のうちに繰り返された。

企業現場からの自分たちの引退（労働力・企画力の消滅）が、総体として「経済や社会の萎縮」をもたらす要因となるだろうことは予測できた。仲間同士の会話では予測しえても、まさかこれほど早くに高齢者となった自分たちの医療費の負担増や年金の減額や消費税増税が現実になり、あろうことか若年層から不公平との反発まで浴びようとは、思いもよらなかったにちがいない。

九割中流という「近似大同社会」を実現

一九八〇年代に、大正人のひとり盛田昭夫氏（当時はソニー会長、経団連副会長）は、外国人にむかって「日本は社会主義的・平等主義的・自由経済の国だ」と紹介していたのだった。

盛田さんは外国人に日本の「国のかたち」を問われると、自信をもってそう説明していたという。国際的基準の中で、世界の開発途上国から目標とされるアジア地域の先進国として立ち現れたという自信と理解においてである。

「もはや戦後ではない」といわれたのが一九五六年。わずか一〇年後であった。

そのあと戦後二五年で、一億人を超える国の国民の九割までが「中流と感じる社会」を実現して、しかも長期に継続（一九七〇年～八九年）したことは歴史的にも例がないのである。

高齢者のだれもがその経緯をリアルタイムで体験してきた稀有で誇りある成果であり、個人の体験として仔細に思い返して確認し直してほしいのである。

どんな時期だったのかを思い出す参考に、話題になったできごとで追ってみよう。

一九七〇年には「進歩と調和」を掲げた「日本万国博」があり、「憂国」の三島自決があり、光化学スモッグがあり、減反があった。一九八〇年には絶頂期の山口百恵が引退し、そして八九年には昭和天皇が亡くなり、美空ひばりが世を去った。

その間の記憶をたどれば、ゴミ戦争（七一）、列島改造（七二）、べるばら（七四）、カラオケ（七七）、インベーダー（七九）。そしてフルムーン（八一）、おしん（八三）、くれない族（八四）、新人類（八五）、トラバーユ（八六）。

外にはペレストロイカ（八八）、天安門事件（八九）、ベルリンの壁崩壊（八九）・・・。

その間、「九割中流社会」といわれたのだった。「近似大同社会」である。

中国では、三千年にわたって歴代の為政者が目標として成しえないのが「大同社会」（いまの中国は「小康社会」をめざしている）。一九八〇年ころの日本は、それにほど近い理想社会であり、歴史的にも例のない貴重な二〇年の体験だったのである。

＊職場に息づく品質（モノ）と品格（ヒト）

政治が理想とする「大同社会」とはどういう社会か。

わかりやすくいうと、「外に戸を閉ざさず、これを大同という」（『礼記「礼運」』から）という。梁山泊にこもって世直しをする『水滸伝「第一回」』でも「路に遺ちたるを拾わず、

戸夜に閉ざさず」という太平の世を夢見ている。

夜「外に戸を閉ざさず」に暮らせる社会のこと。この国の一時期にたしかにそういう時期があった。「セキュリティって何？」という社会である。

「路に遺ちたるを拾わず」は、拾わないのではなく、落とした人のところへ戻ってくること。そういう時期が一九八〇年ころには確かにあった。拾ったものは必ず交番に届けたし、なくしたものや忘れたものは必ず戻ってきた。つい三〇年ほど前のこと。みんなどこかで、この歴史的に貴重な時代を体験してきているのである。

そして、いまや、もはやありえない。

ＩＴ革命が起こり、世界が狭くなり、どこからでも侵入者や破壊者がやってくる時代。

大戦後の東アジアの小世界「日本」だったから可能だったのであろう。ボートピープルが命がけでめざしたあのころの、アジアあこがれの国「日本」のことである。

いまでも「シニア海外ボランティア」の高齢者や日本企業の現地駐在の高齢社員が、開発途上国の現地の人びとから心からの信頼をかち得ているのは、生産者としてユーザーが満足する品質（モノ）にこだわるとともに、背後に息づく品格（ヒト）がおのずから伝わるからだ。

「みんなが中流」という当たり前だった平等意識に亀裂をもたらすことになる日本経済の「萎縮」（デフレーション）がはじまったのは九〇年代初めのころである。

ソビエト崩壊後のヨーロッパの混乱、その後のアメリカ一極化、アジア途上国の台頭・・。

海外での激変が、「九割中流」をなしとげた日本社会をそのままにしておくことはなく、じわりじわりと蚕食し、四半世紀のあいだ崩落させつづけてきたことになる。

「MADE IN JAPAN」のゆくえ

日本経済の頂上期に、そういえなければ盛田昭夫氏が頂上期に書いた『MADE IN JAPAN』（一九八七年、朝日新聞社）には、企業家の立場からこう記されている。

「国内のマーケット・シェアをかけた激しい競争を通し、海外での競争力を養うのだ。エレクトロニクス、自動車、カメラ、家庭用電気製品、半導体、精密機械などが、その代表的なものである」

これだけの商品がアメリカ市場での競争に勝ち、その製品を海外に商品を送ったソニーの会長であり、経団連の副会長の立場でだから、もちろん企業の製造現場をご存じである。

ひたすらに近代化（といっても戦勝国アメリカ化）をすすめた日本は、外国から素材を買い、丈夫で長持ちする良質な製品を作って売る「加工貿易立国」として、明治維新に次ぐ第二の開化を行い、国土の再建を成し遂げたのである。戦勝国アメリカの「民主主義」あるいは「資本主義」の傘の下で、一方の鉄のカーテン（ソビエト）や竹のカーテン（革命中国）のむこう側の「社会主義」の動向にも関心を払いながら。

盛田さんがあげた前記の商品は、国内でよく売れればそれは外国とくにアメリカ市場で評判

がよかった。「MADE IN JAPAN」のトランジスタラジオ、カメラ、テレビ、小型車など良質な中級品は、実用品として認められてきたのである。それがまた日本人みずからの生活を平均的に充足し、中産化することになった。

「みんなが中流」の実感がこうして生まれた。

＊丈夫で長持ちする中級品に評価

日本製品の多くは高級品ではなかった。

「良質な中級品」つまり一般の人びとが安心して使える良質なものを作ることに活路を見い出してきたのだった。良質というのは、「使いやすく、丈夫で、長持ちする」という意味でいわれた。製造側にも高級品をつくっているという意識はなかったはずである。

いまでも優れた技術者は「良質な中級品」をつくり提供することが、わが国の立国の基盤であると思っている。そのことは骨に刻んだうえに心にも銘じておかなければならない。

何度か繰り返すが、けっして高級品ではない。高級品をつくっても、それは業余のこと。

だからどこの家庭でも日用品はどれも丈夫で長持ちする国産品があたりまえだった。わが国では舶来の高級品といえば、化粧品とか時計といった欧米からのブランド品が主だった。

そこへ「途上国産品」が混じり出し、目立つようになり、はては逆に国産品はどれというような状態になっていった。暮らしの場での実感としては、そうなるまでにせいぜい一〇年余と

いったところだったろうか。

前述したが、流行語にもなった「日本列島総不況」と日本経済を堺屋太一さん（経企庁長官だった）が評したのが一九九八年のこと。当時すでにアメリカ一極体制の下で、アメリカ市場では途上国主導の経済活動（グローバル化）が進行していたということになる。日本のノウハウを求めるアジア諸国への対応は、ヨーロッパ勢や韓国に一歩も二歩も遅れることになった。

それまで途上国からの輸入品といえは「山海珍味」のパイナップルやマンゴーなどの食品で、わずかに韓国製の「衣料品」が目立つくらいだった。

日用品は輸入せずとも優れた品質の国産品でこと足りていたからである。

ロ　途上国産の日用品に囲まれて

アジア開化で「途上国産品」がニッポン乱入

「衣料品」からはじまった家庭用品の「途上国産化」のほかの製品への広がりは、日新月異の勢いで足早に進んでいった。

暮らしの中で「MADE IN KOREA」から「MADE IN CHINA」や「MADE IN THAILAND」・・といったアジアの国々からの日用品が次々に国産品に入れ替わる度に実感されてきた。

「えッ、これもか」

と驚くほど早く、「モノの途上国産化」は進んで、ついには精密機器にも及んでいった。

「日本列島総不況」の下で収入が減ったわが国の消費者は、国産品や製作技術の将来を危惧しながらも、やや粗悪であっても「安価」な途上国製品を購入することになった。

「丈夫で長持ちする国産の優良品」

に囲まれて暮らしていた一九八〇年代と比較すればよくわかる。およそ三〇年前のこと。だれもが体験してきた暮らしの上の変化である。

一九八二年が小売店のピークだったという。

そのころは全国に商店が一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所もあったという。数もそうだが商店街には人をひきつける活気があった。馴染みの店に寄るのが楽しかった。商品知識ばかりか人生の先達があちこちにいて、モノを買ってオツリと元気がもらえたのである。

「モノと暮らしの情報源」

それが商店街だった。

とくに歳末の商店街の活気はどこもなつかしい記憶になったが、そのころ購入した優良品のあれこれはまだ暮らしの中で生きている。

＊「アジアの共生」(モノの豊かさ)を実感

日本企業の海外進出は、アメリカ市場での業績悪化の果ての生き残りをかけての荒療治とな

った。アジア市場ではヨーロッパ系企業や韓国企業にあきらかに時期遅れではじまったものの、現地での歓迎と期待には大きいものがあった。

あこがれの日本から、有名企業がやってきたのである。

「日本製品を使って日本人のような暮らしをしたい」

というアジア途上諸国の人びとの願望が叶いつつあるのである。

決して褒めすぎでも言いすぎでもなく、「アジアの共生（豊かさの共有）」へむかって、わが国の私企業による公益的成果として、日本ブランドは成立している。アジア各地にしっかりと着床しているのである。一つひとつは小さくとも、その広がりは「アジアの共生」を思わせる。

企業の現場は競争にさらされて厳しいが、世紀の視野でみて、日本が誇っていい国際貢献である。国内で毎日用いている日本ブランドの生産地を逆にたどれば、アジア諸国の人びとの暮らしに日本企業がもたらしている成果は推察することができる。

いうまでもなく現地を仔細にみれば、先行の欧米企業や韓国企業、最近は中国企業の進出もあり、日本企業はなお生き残りを懸けて事業を展開しているのに変わりはない。現場での事業活動の成果は、派遣社員のていねいな指導とそれを受けて日に夜を継いで移入に努めている現地従業員の熱意の結果でもあるのである。

わかりやすい例だが、海外の大衆性に配慮して進出した「ユニクロ・UNIQLO」や「大創（ダイソー・DAISO）」の動向をみれば、「アジアの共生（豊かさの共有）」が時流としてアジア各

地で奔流となっていることが理解される。

前世紀には日米戦の戦場となった地域でも、「平和裏」に日本企業によって展開される「モノとヒト」の交渉や製品化プロセスを通じて、わが国が平和国家であり、民主主義によって「しくみ」をつくり、ユーザーが納得する品質の「モノ」づくりをし、従業員に差別なく接していることを理解しているにちがいない。

国内で競争しながら豊かさの共有をめざしてきた日本企業とその社員は、磨きあげられた宝玉の一つひとつである「日本型マネジメント」を現地で活かしている。言い過ぎでなく、わが国を代表する平成の「平和遣使」なのである。

家庭に「百均グッズ」・職場に「非正規社員」

中国へ進出した日本企業は、上海だけでも三〇〇〇社を超えるという。

それぞれ社名の漢字表記に工夫しているのはご存じのとおり。

いくつかみなさんにも親しい企業の例をあげてみよう。

たとえば「優衣庫」（ユニクロ）、「三徳利」（サントリー）、「索尼」（ソニー）、「施楽」（ゼロックス）、「佳能」（キャノン）、「楽天」（ロッテ、まぎらわしいが音ではルオ・ティエン）、「華歌爾」（ワコール）、「百楽」（パイロット）、「養楽多」（ヤクルト）、「日波」（サンウエーブ）、「可果美」（カゴメ）など、「資生堂」「富士通」「麒麟」「味之素」「朝日新聞」などはそのまま。

しごとの現場では、技能でも人格でも優れた多くの派遣社員が、ことばや生活習慣の違いや国民感情にも配慮しながら業務に当たっている。

前項でもみたように途上国主導の「グローバル化」の対応に、日本企業は遅れに遅れて生き残りをかけてとった荒療法が、生産拠点の途上国シフトと社内リストラだった。両方ができる企業はそれを急いだ。

その荒療法の結果として国内で引き受けたのが、日用品の百均商品化と自社内の社員多層化だった。海外での製品の質を一気に上げえないように、正規社員化も無理にはできない。

幸せなことにわが国は、前世紀中にアジア地域でただひとつ、「欧米追随型の先進国化」を成し遂げることができたが、アメリカ対応に熱心で、同じアジア諸国の人びとの近代化への熱い思いを理解していたとはいえない。

アメリカ市場での途上国主導の「グローバル化」がすすみ、それに迫られて日本企業は「サバイバル（生き残り）」をかけてアジア進出をおこなわざるをえなくなり、資金、人材、ノウハウを移出して、途上国の需要に見合う日本ブランド品の生産をめざすこととなった。

＊途上国日本化による日本途上国化

アジアには背を向けて、アメリカ一辺倒であった日本企業の中にも、いち早くアジア進出をしていた企業もあった。そういう企業は、比較にならないほど良い人脈と体制を現地で保持し

えている。

しかし出遅れて急きょ海外進出した多くの企業は、その結果として国内での対応に混乱し、これまでの「終身雇用」型の正社員では経営がもたなくなり、アルバイトや派遣社員で支える「日本企業の途上国化」が進むことになった。

したがって正社員への回復は「途上国の日本化」とともにゆっくりもどさざるをえない。グローバル化の結果の混乱であり、わが国の企業に現れて当然のグローバル化症候群である。

ひととき電球や電池は安くなったがすぐ切れる粗悪品になった。メーカーを見ると日本を代表する企業である。広州では、

「あの日本の索尼（ＳＯＮＹ）がこんな製品をつくるのか」

という風評が立たざるをえなくなる。これもアジア共生のための「日本企業の途上国化」の実態であり、「余儀なく受けざるをえない悪評」であった。

いまやっと家庭内の電球は、「ライト・イノベーション」（ベンチャー企業名になっている）によって、高値だが長持ちで安心して使える日用品の成功例になりつつある。

こうしてひとたび途上国製品で満たされていた家庭内日用品は、ひとつずつ国産・地産品に戻ることになる。高齢者が余儀なく受けざるをえなかった暮らしの停滞は、ひとつまたひとつ解消に向かう。

高齢者なら若き日の体験としてわかることだが、かつてたどったＸ地点まで戻って足踏みし

ながらおこなう「アジア共生」のための共同歩調であり、日本のなすべき責務なのである。

現地で尽力する日本人高齢社員にとって、現地社員から「ありがとう」と日本語で率直な謝意を受けることはしあわせなことだ。そしてその謝意の半ばは、戦後に「企業戦士」として働き、会社の基礎をつくってくれた先輩に捧げるべきものだろう。

「時代の踊り場」で足踏みして待っていた日本の熟練技術者は、「家庭用品の途上国化」のために起こったみずからの暮らしの日用品の劣化を、アジアの時流として眺めてきた。それゆえの足踏みであったから、時をまって再開する優れた製品、やや高だが丈夫で長持ちする製品の国産品化のための技術や意欲まで失うことはなかったのである。

途上国製品が安価粗悪を脱するとき

日本企業が次々に海外進出をして日本ブランドの海外製品の種類が増えつづけてきた。だからといって国内の熟練技術者の技術を越える製品ができて、生活感性の高いわが国の高齢者の暮らしが快適になったわけではなかった。

この間、日本の中小企業の実直な熟練技術者はどうしていたのだろうか。

死活問題といわれながら、実直に赤字を背負って耐えつづけてきたのである。途上国製の百均グッズを見て、大量生産の質の劣化をためいき混じりでこらえてきたにちがいない。ご本人には理由が分かっていても口にしないから聞こえてこない。

自分たちがかつてたどったと同じ道をたどって、アジア途上諸国の人びとが製品をつくり、暮らしが豊かになることを願って、「時代の踊り場」で足踏みをして見守ってきたのである。

「時代の踊り場」で足踏みをして待つというのは、技術力を保持しながら、じっと機会を待っていたということである。

アジア途上国産の製品が「粗悪品から中級品」に達したのを見届けるようにして、海外へ出た企業も次々に戻ってくる。中小企業は自力で少量生産による「やや高」だが「品質が安定」しており、「安心して使う」ことができる優良日用品（高級品ではない）の製造・販売に取りかかることになる。その先例として、今治のタオル（IMABARI）がよく引かれ有名になった。吸水性のいい「使って気持ちが良いタオル」をとことんまで追求してえた技術結集の成果であり、「やや高だが安心して使える優良地産品」のモデルになっている。

＊「足踏み」していた熟練技術者が動く

スーパーで日用品の中に「MADE IN JAPAN」を見つけると、うれしい。

しかも流通の本筋が国内にもどれば、これもまた時期を待っていた国民としてほっとするし、滞らせていた生活感性がもどってくる実感も生まれる。日本製の下着の肌に触れる心地良さは日々の暮らしの張りにつながる。男性なら途上国製の電動髭剃りの傍らで、日本製のチタンコ

ートの手動髭剃りを使ってみるとよい。剃り味抜群であっぱれの心地良さなのである。生活の萎縮（デフレーション）からの脱却は、経済アナリストのご託宣より、こういう生活感性の小さな回復・実感から本格化するのにちがいない。

優れた生活感性をもつわが国の高齢者にとって、使って心地の良いものとなる「国産・地産優良品」は、企業内で窓際族といわれていた高年社員の起死回生のアイデアから生まれる。

そういう優良日用品の回復・再生・新生は、「平和団塊の世代」など若手シニア・ユーザーからの要望によって動きだしている。大手家電はシニアが家電に抱いている不満をよく聞いて開発した新製品を売り出した。紙オムツから車まで、もうすぐ「雨過天青」といった明快さで技術レベルの高い「MADE IN JAPAN」の高齢化新製品が次ぎ次ぎに現われてくる。

がまんして待っていた高齢者の暮らしを豊かに愉快にするだろう。

改めてひとこといっておくが、この高齢者の経済活動による「エイジノミクス」（高齢社会経済）は、現有の若者・女性主導の「アベノミクス」から奪って成立するものではない。

目　頼れる優良国産品が再登場

やや高安心の優良国産品が再登場

実感してきた経緯をたどってとはいえ独り語りが長くなったが、やっと先に光明が見えると

ころまできた。

この一〇年余り、だれもが体験してきたことは、「家庭用品の途上国産化」だった。国も企業も国民もその時流をアジア途上国の発展のためとして受け入れてきたといってよい。

それはまた日本製品の対価としてもたらされた海外各地からの食品が「飽食の時代」といわれるまでにこの国の食卓を豊かにしてきたことでも実感されている。スーパーの食品棚の食品には産地の名が記されているから、日本製品や日本企業がたどりついてそこの住民の暮らしを豊かにしている地先の姿が見えるのである。

そんな中にあって、日本の地産食品はどうだったろう。

ひとしきり市場で苦戦を強いられいた山梨のモモも、青森・長野のリンゴも、山形のサクランボも、みんな産地の努力がうかがえるほどに質の良さが歴然とし、価格がほどほどに収まっていれば、

「やや高だけれど優良な地産食品」

として受け入れられている。それらはわが国のユーザーにしっかりモニターされた新たな「優良な輸出品」候補なのである。一次産品で証明され、他の技術系の商品でも同様である。

生活感性の高い日本の高齢者は、「モノの途上国産化」による「生活水準の途上国化」にがまんしながら、「やや高だけれど優良な国産・地産品」の再登場を待っていたのである。

高齢期の豊かな暮らしが、優良な国産・地産品の再登場とともに始まる。

＊生産現場より流通から対応

都内のデパートは、さすがに変わり身がはやい。

顧客ターゲットを若者・女性層から高齢者層に切り替えて改装をおこなったところもある。「製品」の生産現場より顧客に近い「商品」の流通現場のほうから反応がはじまる。

大震災のあと二〇一一年秋に幕張メッセで催された「エキスポ・スーパー６５＋」の展示会やイオンの「ＧＧ（グランド・ジェネレーション）」戦略などがそれだが、人生を楽しむ「グランジェネ世代」の用品要請が生産現場に届いておらず、それに応える新製品が間に合わない段階であり、時代の烽火として不可欠の先駆的事業活動としては認められるものの、なお収益には結びつかないだろう。

しかし注意すべきは、ここでも「較差」と「格差」の意識が混在して動いていることにある。

デパートの若手担当者が「高齢者の富裕層を対象にして」と口をすべらせたように、「格差」としての商品を求めていることに問題がある。いま求められているのは、少数の選ばれた人びとが用いる高級品ではない。途上国製品との比較において優れている「較差」であって「格差」ではない。

わが国の熟練生産者は、途上国産品の良質化の進み具合を見たうえで、その上をゆく優良品、生活感性の高いわが国の高齢者が心地よく使える優れた国産・地産品を提供しようとしている

のである。流通部門がそこを間違えると企業回復を阻害することになる。

「みんなで豊かになる」という日本企業の基本理念はアジアで生きている。誇らしいことだ。

何度でも繰り返すが、わが国の製造業が追求すべきものは多数のための優れた中級品である。

「成熟＋円熟」商品がＧＤＰを拡大

「アベノミクス」（女性と若者主導の成長力経済）が停滞し沈静化する。それを高齢者の生活感性を納得させる新製品による「エイジノミクス」（高齢者主導の成熟・円熟力経済）が上支えする。今、そういう局面を迎えている。

といっても、目前の時流である途上国主導の「グローバル化」の課題に忙殺されてきた企業にとっては、底流しているとはいえ、同時には双方には反応しづらいにはちがいない。

生活感性の高い三四〇〇万人のハイエイジ層のみなさんが、自分たちの暮らしを快適にするためのモノやサービスを企業側に要請する。

遠慮することもないし、面倒なことでもない。いまの企業はどこも顧客からの声を受ける窓口を広くして待っているのだから。

まずユーザー側が動く。それに技術や知識や経験をもつ企業側の熟年社員が応じて、新しいモノやサービスを作り出す。これが「エイジノミクス」（高齢化経済）の原点である。

企業内のマドギワ高年熟練社員にとっての待望の出番である。

すでにそういう方向に進んでいる業界は、旅行、スポーツ・フィットネス、コンビニ、配食、百貨店、介護ロボット、ヘルスケア、住宅・不動産、自動車、食品・外食、家具、電気製品、ペット、衣料・・など。

高齢者の暮らしのさまざまな場面に快適な「ＭＹ・・」が次々に増えていく。

肌で感じられるほどに「優良な国産・地産品」が身のまわりに安定した存在感を示すとき、成熟力＋円熟力によるモノづくりにおける「日本高齢社会」の成立を示す「エイジノミクス」（高齢化経済）の安定した姿が見えてくる。たしかな内需による持続可能なホンモノの「一億総活躍」の経済活動の展開となる。

遠からず「成熟＋円熟」商品がＧＤＰを拡大することになる。

これでいい。そうしてはじめてアジア地域の発展のために「足踏み」して待っていたわが国の各地各界の中小企業が動き出し、自社製品の新開発に挑む体勢を整えることになる。引退した社友も参画して、成員みんなが愛着をもって新たな自社ブランド製品をつくって世に送り出す局面である。

高齢製品ルネサンスである。

「いい時代に生まれちゃったじゃないか」

高齢者そして高齢期にむかう人びとがそう言いあえる社会の登場である。

その成果を集めて幕張メッセを賑わすような「国際高齢化製品展示会・ＭＡＫＵＨＡＲＩ」

が催されて、外国人バイヤーが集まることになるだろう。これは広州でも上海でも不可能な日本が断然リードする「日本高齢化製品展示会・ＭＡＫＵＨＡＲＩ」であり、世紀を独走する国際イベントとなる。これを支えるのは日本高齢者層の人生への熱情であり、「壮心にして已まず」（曹操の詩から）という日ごろの積極果敢な暮らしである。

新しい高齢化優良製品の製作に成功した企業が増えることで、現有の途上国主導のグローバル化経済圏にさらに「高齢化製品経済圏」を着実に上乗せする「子ガメの上に親ガメ」といった趣きの経済活動「アベノ・エイジノミクス」が展開されることになる。これが六〇〇兆円とまではいわないが、ＧＤＰを拡大する本流の経済政策である。四人にひとりの高齢者の人生への熱望を過小評価するより過大評価したほうが景気に勢いがつく。

今、高齢者に潜在している意欲、知識・技術を活かした経済活動を逃がしてしまえば、もはや巨大な赤字財政を克服してプライマリーバランスを立て直すチャンスはやってこない。

リスク回避型の経営者時代は終わる。

積極的な経営姿勢を押し出して、「成長＋成熟＋円熟」社会に対応する自社新製品の開発に取り組む体制をつくること。

先手必勝の局面である。二〇年の「高齢社会対策」の延滞を取り戻す道は、「今」この路以外にないことを知るべきである。延滞の責任はここでいま責任を感じた者にある。それは歴史家の目にはすでに見えている。

＊アメリカ型「成果主義」の成果は限定的

思い起こせば、一九八〇年代までは「日本型マネジメントは世界一」（ジャパン・アズ・ナンバーワン）とみていた学者や海外投資家に、三〇年後には日本企業の利益率が低いのは「終身雇用のせい」といわれるようになる。

「新商品開発の遅さ、人事異動の不活性、非採算性など、みんな日本企業のもつ特殊性です」という国外の評価をうけて、アメリカ型の個人の能力にインセンティブを期待する「個人主義」や社内競争による「成果主義」を導入した経営者にとっては、それはあたかも回復へのマスターキイでもあるかのように思えたようである。

したがって給与体系も、終身・年功型給与の基本である「年齢給」や「勤続給」を縮小あるいは廃止して、能力優先の「職務給」にシフトする。新しいベンチャー企業ならいざしらず、芯柱になるべき企業までが世界企業化にむけて「ポスト型賃金」を導入したりした。ついに「日本型マネジメント」の根幹に傷をつけるような変革にも着手しているのである。

わが国の企業風土では、成果を個人に還元する「アメリカ型の成果主義」はインセンティブとして効果を生まない、断定を避けるなら長くは生みつづけることはないだろう。戦後のきびしい企業風土の中で、先人が労苦して育てあげてきた「日本型マネジメント」をそうやすやすと放棄するのはいかがなものか。

家庭の、地域の、企業の、国家の根幹に据えてきた「和の絆」、日本企業を支えているのは働く人びと同士の信頼と協働が根っこにある。企業活動を弱らせ、製品の輝きを失わせ、企業の社是を歪ませてしまうような風潮に異議をとなえて、まず立つのは企業の永続を前提とする内需型の「百年企業」と推測される。

アメリカはなお若年・中年が中心の社会であるが、日本社会は「グローバル化」とともに「高齢化」を合わせ迎えている。その変容にどう企業システムを対応させていくかに苦慮している時に、「日本型企業」の全否定にむかう意見が先行するのは困ったことだ。

導入してみてアメリカ型マネジメントのもつ脆弱性に気づけば、日本企業の「終身雇用」と「年功序列」がいかに有効な「日本型マネジメント」の根幹であるかに思い及ぶはずである。

いま加速している「高齢化」を支える生活感性の高い良質な「高齢化製品」を開発すること。そのために熟練高齢社員を活用すること。年齢差別のない「新・終身雇用制」を企業インセンティブとして捉え直すこと。加齢は価値であることに努めてすごす先輩に敬意を表する「新・年功序列」の気風は社内を温かくするだろう。

日本型マネジメントに活路

「終身雇用制と呼ばれてきましたが、実際には六〇歳定年制が長く一般的だったですよね」

といわれれば、その通りである。

たしかに「終身雇用」といっても終身ではなかったものの長期であり、先輩から後輩へとわが社流儀を伝えながら生涯支えあう信頼と平等の絆の表現として「終身雇用」は引き継がれてきた。定年後も終身のつきあいを建て前とする「愛社意識」として保たれてきた「和の絆」の伝統なのである。

それはこの国の温和な四季の風物とよく似あう。満開の桜花の下での飲み食い語り歌う無礼講や豊作を祝って舞い踊る秋祭りの饗宴は、風土のなかで人の和の絆を強靭にし、企業や社会を強固にし、国家に揺るぎない安定感を与えてきたのである。

それが揺らいでいる。

この間に何があり、何がなかったのか。

仔細な議論は学者の方々にまかせるとして、企業現場の実感としては、「終身雇用」制のせいではなく、一人が引退し一人が入社する。三〇年の間に企業内の人的パワーが弱体化したせいなのだ。いまでも七〇％以上のわが国の労働者は「終身雇用」制を支持しているのだし、個人にはわからないものの、社員の持つ想像力、気力、愛社の心が右片下がりで落ちている。創成期と違って、有名企業になり業績も安定した企業の守成期への対応が入社した社員にもたらしているものだ。創業はたいへんだが、守成はそれにも増してむずかしいのである。

社員同士が信頼しあい生産技術を共有し、将来にわたって安心して働ける。「終身雇用」や「年功序列」といった日本企業の基本樹形をつくっている「日本型マネジメント」のどこがいけな

いというのか。企業の業績がいいトヨタやキャノンだから支えられたのではなく、いずれの企業も根・幹として守ることができるはずの慣行なのである。

いまある企業は、いまの社員のためではあっても、いまある社員のものではない。

先人が敗戦の焼け野原の下に温存されていた根っこから、「生き残る」ために敗戦後の状況に適応させ、試行錯誤を繰り返しながら樹形を整え、枝葉を茂らせてきたものである。苦難の中で模索し、選択してきたのが「終身雇用」であり「年功序列」と呼ばれる企業慣行であった。

それも経緯が穏やかであったわけではない。高齢の方なら胸の奥から歌声が聞こえてくる。

大地ばかりか、企業の存続までをゆるがすような社内争議を、「♪起て飢えたる者よ・・」で始まる「インタナショナル」や「♪暴虐の雲光を覆い・・」で始まる「ワルシャワ労働歌」を歌って社屋を包囲する労働者側と、受けて立つ経営者側との間で何度も繰り返したすえに形成されてきたものである。

だからやわな企業樹形ではない。先人が戦禍の跡から苦闘のすえに育てあげてきた基本樹形である「日本型マネジメント」を、新たな国難期を迎えて活かすことなく、まるごと伐採してしまうような改革は避けなければならない。といって頑なに捉えることではないだろう。

＊「新・終身雇用」と「新・年功序列」

時流である「経済のグローバル化」に企業が製品化も含めて若年層を当てて対応してきたの

は選択として正しい。「歪打正着」といっていい。結果オーライである。それが正着になるには、いま潮流として迎えている製品の「高齢化」に、どう対処するかにある。当然のこと、高齢社員と「社友」が協力して、高齢期のだれもが必要とする自社製品を工夫して供給する。それを成功させることが、新たな時代に「日本型マネジメント」を作り直すプロセスとなる。

その成功が先輩を敬愛する「年功序列」の骨組みを再び太くする。

企業の将来と現役社員の幸せを思う旧友・社友の存在が明かされる。

とくに伝統のある「百年企業」にはそのまま根づいて息づいている。ただし、「三世代平等社会」をめざすとなれば、旧友会・社友会には高齢化する社会に対する新たな役割が求められることになる。

健康と長寿を喜び合う親睦会の意味合いはそのままにして、わが社の伝統を活かした「高齢者むけの新商品」を企画する部門を置き、いい製品なら後輩につくれるよう手立てを講じたり、自分たちで起業したりする役割が必要になるだろう。同業他社に先を越されてはならない。

入社したての若手社員は企業の発展を願って先輩社員を敬愛し、企業の骨格を支える中堅社員は会社と製品を育ててくれた社友を敬愛する。

社友は生涯にわたって愛社の心を失うことはない。それが率直に表わされることが「終身雇用」の安心感となり、「年功序列」として先輩への敬意となり、「和の絆」の信頼感となり、企業の安定感となり、しごとへのインセンティブとなる。これがユーザーへ最良の品質を誇る製

品を提供する企業の「社是」であり、それが国の骨格と品格を支えている「国是」ともいうべき「日本型マネジメント」による生産活動ではないか。

「ＳＷＩＴ型会議」で一品三種をコーディネート

スウェット（sweat　汗をかくきつい仕事）ではなく「スウィット」（swit）である。シニア（Senior）社員、女性（Women）社員、ＩＴ（Information　Tecknorogy）社員による新製品開発のための合同会議が「ＳＷＩＴ（スウィット）会議」である。

現有の主要製品のラインを確保しながら、「三世代平等社会」に対応する新企画製品を開発するための拠点のひとつとなる。

「ＩＴ製品開発」部門と「女性製品開発」部門に、さらに「高年化製品開発」部門の三部門によって構成するのが「ＳＷＩＴ（スウィット）会議」である。それぞれが競って新製品開発での成果を期する布陣をかまえた上で、さらに家庭内の暮らしを多彩にあるいはコーディネートする新製品の開発が三者が加わって検討される。

ここにひとつの「新日本型マネジメント」の生き生きした現場が登場する。

それぞれの生活者として異なった立場からの多角的な検討を、新製品開発の場で三者がとことん加えるという社内協議の体制ができた「日本型企業」が、家庭向けにコーディネートされた最強の商品開発力を発揮する。協議の結果として、個人の成果にインセンティブを置くアメ

リカ型の改革に動いた企業に圧倒的に勝利する新製品を登場させることになるだろう。

生産者側のマーケット・リサーチと利己的判断に基づいて製品化するという現在の「グローバル・スタンダード」（国際標準）を超えて、わが社の利とともに、それにも増して消費者・家庭の益を思う「モノづくりの志」が製品として明確に表現される日本製品。「和の絆」がおのずから製品化に発露されるその生産活動が「ヒューマン・スタンダード」（全人標準）に最も近くにあるということを、「ＳＷＩＴ型会議」のプロセスを通じた製品が示すことになる。

＊製品に「和の絆」を組み込む

「ＳＷＩＴ会議」の成果としての製品によって、モノを丁寧に扱いヒトを優しく思う品性としての「和の絆」（愛社意識）を組み込んだ日本型企業の国際的先導性が明らかにされるだろう。高齢者のデジタル・デバイドなども会議でのＩＴ社員との論議が解消に有効に働くことになる。業種にもよるが、日本の風土が潜めている温和さと暮らしの伝承に培われた繊細さを取り込み、若年・女性・高年に受け入れられる「一品多種の新製品」の成果を実感できるまでには容易でないが、生活者としての三者の熱い議論の結実として、家族みんなのための最良のコーディネート製品が生まれてこないわけがない。

比較的に適応性のある業種としては、世代間でライフ・スタイルが異なるとされる分野である。アパレル、化粧品、音響機器、住宅・家具、食品・料理、流通・広告、情報メディア・出

版、スポーツ・レジャー、観光・・などが考えられる。

たとえば「ウエアラブル」（着られるもの）なども、ＩＴを内蔵した「ＩＴ＋女性」によるファッション性が先行しているが、それとともにＩＴ補助機能を内蔵する高年者向けウエアラブルにも市場性があり、シニア（Ｓ）と女性（Ｗ）とＩＴ社員代表による「ＳＷＩＴ会議」での企画テーマとなる。

さらにたとえば、家電企業が「家族化」をテーマとし、家庭内ネットワークを形成する「ホーム・ネット家電」という融合概念をもつ新製品開発を進めるに際して、想像力ゆたかな社員を集めて「ＳＷＩＴ会議」を立ち上げて、「ＩＴ＋女性＋高年者」のアイデアを取り込む家族的会議で製品の検討に入ることになれば、これまでゲームやコンテンツ（映画や音楽などのソフト）事業を中心に若者をターゲットにしてきた企業ばかりか、市場をも刺激することになる。

家族一人ひとりの衣装の趣向、多様化する調味や栄養のバランス、表現の多種多彩化・・それぞれの立場からの「多重標準」のありようを認めたうえで、一つひとつていねいに製品化されることになる。嗜好や指向の違いが際立ちながらもみんなが納得して家庭内用品として楽しんで利用される製品とするには、「ＳＷＩＴ型会議」でのみんなの納得が前提となる。家庭内にコーディネートされた住空間が次第に形づくられる。

新製品開発の場で、さまざまな視点と知識と経験がない交ぜになって展開する「ＳＷＩＴ会議」から最良の家庭用品が生まれる。こうした会議は、日本企業の「新家族主義」への可能性

を蔵している。未知の領域に挑む「ＩＴ製品」と、日本社会を質的に多彩に変える「女性向け製品」と、経験を裏打ちにした完成度の高い「高年化製品」を開発する部門の社員が合議する場は、職場に穏和なふんいきを醸成する核として機能する。開発された新製品は、外国企業から畏れられる存在になるだろう。個人の力を生かしながら個人の成果に片寄らず、日本型企業ならではの企画・製造・販売の検討を経た製品だからである。

企業現場への高年者をふくむ「新・家族主義」の導入。これが「終身雇用」を基本としても つ日本型中小企業の来歴を活かした社内改革として生かされる。

現有の活動を支える中年パワーと合わせて、「ＩＴ青年」「女性」「高年」という三つの社内パワーが製品開発の現場で凝集して発揮される。こういう社員によって企業は守られる。

そうしてはじめて「成熟した日本社会」（三世代同等型社会）の形成に立ち向かう「日本型企業」内でのヒューマン・スタンダード（全人標準）の表現としての姿が見えてくる。そうして生まれた技術力の高い「国産優良品」は、さらに日本の家族の精彩ある生活感性にモニターされて、「MADE IN JAPANの優良品」として輸出されて、苦闘しているグローバル企業の海外進出と合わせて、世紀初頭の「第三の立国開化」は軌道に乗るのである。

難題にはいくつもの先見的解決構想が示される。知られなくとも事実が後追いするものが真の先見性というものである。

Ⅳ　「新地産ブランド品」で全国制覇

「地域特性」が息づくまち

貧しいときは貧しいなりに、豊かになれば豊かさをお互いに分け合う。日ごろ付き合いのある隣近所だけではなく、地域（生活圏）で暮らしに必要なモノや場の「横並びの平等」が、先の大戦の惨禍のあと、生残った人びとによる復興事業の基本となってきた。だから地方のどこにいても安心して地元の事業に精を出すことができた。

この意味では国のしごとに携わってきた有能な官僚の半世紀にわたる事業分配の業績といえる。だから列車の窓から見ても凹凸が際立たないような街並みが実現されてきた。「モノ」の配分における地方議員の熱心な平等主義の表現でもある。

そういう長い期間での経緯を評価しないで、「国が事業を独占している」と批判するのでは、先人が善意で積み重ねてきた「みんなが平等に」という営為を無視することになってしまう。

その証として、小さな町でも隣の大きな市に劣らず、横並びの「基本課題」を共通して持っており、それを担当する課係があり職員がおり、そして各地域に等しく予算と事業を配分することを主なしごととする地元選出の長老議員がいた。

そうして進められてきた「国土の均衡ある発展」がほぼ達成された九割中流のところで、「個性ある地域の発展」という骨太の政策転換が登場した。

ここは変換ではなくその上に重ねての転換である。均衡にした上での特性の展開、これが国土開発政策における「多重構造」である。

当然のこと国が主導する「国土の均衡ある発展」はこれからも基本政策として継続するのだから、自治体は新しいまちづくり事業を展開するからといって、せっかちに従来の課係を解消するような拙速な変更は避けなければならない。そんな改革を急ぐと職員も住民も混乱してしまう。新旧ふたつの課題をうまくつないで対応する新たな課をつくり職員を配置すること。従来の課係をなくすのではなく、重ねて新しい地域課題を担当する部署を構成することになる。

みなさんの自治体はいかがですか。

「個性ある地域の発展」へむかって新しく活動しているのが、「まちづくり推進課」「子育て支援課」「高齢者支援（高齢社会対策）課」「伝統産業育成課」などである。そのほかに二課を合わせた部課、たとえば「健康福祉課」（福祉優先の「福祉健康課」よりも住民の健康への意識が進んでいる）、「産業観光課」（観光と産業とをつなぐ）「スポーツ生涯学習課」（知能と技能を単純に分けない）などが内容を調整しながら活動を推し進めている。

これまで住んでいる地域との関係が薄かった人は、こういう新しい課係の窓口をたずねてみることをおすすめしたい。自治体はそれを待っているのだから、気軽に参加できる地域活動に出合えるにちがいない。

「地域包括支援センター」や「シルバー人材センター」は、これまでも地域住民の介護・医療、生

活の安定、しごとづくりのための支援をする公的機関として機能してきたが、いま多数の高齢者の本格的な参加によって、実が入る時期を迎える。もうひとつ、後の章で詳しく述べるが、まちづくりの人材養成機関として、「生涯学習センター」の高齢人材養成の機能が充実されることになるだろう。

これら「介護・医療」「就業」「生涯学習」の三つのセンターがバランスよく機能している自治体が、高齢者の住みやすい場（エイジング・イン・プレイス）といえるだろう。

＊みんなでつくる「新地域特産品」

「地域特性が息づくまち」をつくり出すには、まずみんなで手分けをして「地域の特性」を掘り起こす作業が求められる。

これまでのように周辺の地域との横並びの「均衡ある発展」を崩すことなく基盤としながら、その上に周辺の地域にない「わが町の特性」を活かした横比べのまちづくりをめざす。

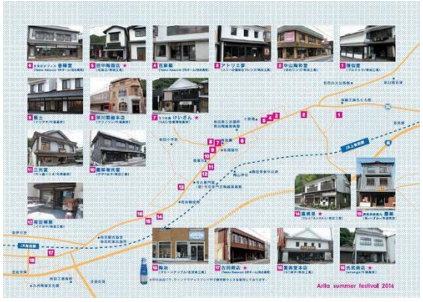
自治体と団体・個人により地道に特性を探し出す活動と活かす活動が積み重ねられる。そういう「わがまちづくり」事業がいま全国の自治体で競われている。

これまで内閣府が進めてきた「中心市街地活性化」の基本計画にも、横比べの「特性のあるまちづくり」が掲げられている。それぞれの地域が練り上げてきた計画を競いあいながら活かして、「特性のあるまち」が遠からず姿を現すに違いない。

ほんの一部だが見てみよう。

城下町では「街なか回遊」（彦根市）・「回廊」（会津若松市）、港町では「みなとみらい２１・ＯＬＤ＆ＮＥＷ」（横浜市）・「港町スクエア」（気仙沼市）・「海ＤＯ戦略」（下関市）、そして「まるごと博物館」（有田町）、「都市型高感度市街地」（宝塚市）・「体感スポット点在のまち」（久留米市）、「ファッション・ジュエリー都市」（甲府市）・「リ・グラスのまち」（水俣市）、「こみせ・まちづくり」（黒石市）・「詩情公園都市」（小諸市）・「市（いち）の復権」（市原市）、「まちんなかづくり」（臼杵市）・「へそのまちのへそづくり」（富良野町）・・・。

どこも街並みの整備、歩きやすい環境づくり、いこいの場の設置、観光資源や歴史資源の活用、イベントなどに特性を活かしたまちづくりが企図されている。



地域再生の場に、地元高齢者の経験と知識を取り入れながら実施する事例に事欠かない。

富山市は、「環境未来都市（平成一九年二月）構想に指定されている「コンパクトシティ」で、先駆的な事例として「まちなかカート」がよく取り上げられるが、またＯＥＣＤの「ケーススタディ都市」にも選定されている。「高齢者参加」での展開が「歩いて暮らせるまちづくり」への成果として一歩進んで具体化されている。

全国版「地産ブランド品」を競い合う

これまでの全国版の「地産ブランド品」は、お中元やお歳暮の贈答商品として、ＪＰ（日本郵便）のリストなどでも紹介されてご存じのとおり。地域で生まれて国を代表する商品になった製品である。地域名のついた伝統製品は、いまでも地域の人びとの並み並みならぬ努力のたまものとして持続している。

みなさんに親しいものの例を少しあげておこう。

アイヌ民芸品、石狩鍋、松前漬、津軽塗、津軽こぎん、南部鉄器、三陸わかめ、鳴子こけし、仙台たんす、曲げわっぱ、秋田八丈、紅花染、米沢織物、会津漆器、相馬焼、喜多方ラーメン、笠間焼、結城つむぎ、益子焼、日光彫、鹿沼土、桐生銘仙、藤岡瓦、川口鋳物、草加煎餅、秩父銘仙、狭山茶、房州うちわ、黄八丈、鎌倉彫、小千谷紬、富山家庭薬、加賀友禅、九谷焼、輪島塗、越前竹人形、越前がに、山梨ワイン、信州そば、野沢菜、岐阜提灯、静岡茶、安倍川餅、瀬戸焼、伊勢海老、松阪牛、彦根仏壇、西陣織、京友禅、丹後ちりめん、清水焼、宇治茶、堺緞通、灘清酒、奈良漬、三輪そうめん、紀州みかん、鳥取梨、出雲石灯籠、備前焼、吉備団子、備後表、広島かき、萩焼、赤間硯、阿波鏡台、讃岐うどん、今治タオル、伊予柑、土佐鰹節、博多人形、久留米がすり、八女茶、有田焼、伊万里焼、長崎カステラ、球磨焼酎、豊後表、宮崎はにわ人形、薩摩揚げ、桜島大根、大島紬、芭蕉布、沖縄泡盛・・。

まだまだあるが、地域特産のブランド保持のためには、常日ごろから地元の職人や企業のた

ゆまぬ努力とともに、なによりそれを支える多くの地元住民の力に負っている。

これまでの全国版「地産ブランド品」もおちおちしていられない。伝統を守りながら新たなアイデアを活かした新製品の制作に挑んでいる。

＊「農業六次化」とご当地グルメ

身近な実例としては、各地の「ご当地」ものがある。「ご当地グルメ」や「ご当地キャラ」がよく話題になる。「ご当地グルメ」は、地域農業の「六次産業化」をすすめながら発展させるもので、競えば競うほど地域特性は磨かれることになる。

「全国ご当地グルメ祭」が開かれていて、いまや全国的な行事になっており、勝ち抜けば新たな全国版の「新・地域ブランド品」となる。

食のほかにも環境に関する「エコ・ライフ」や「スロー・ライフ」による地域特有の活動や居場所づくり。「ホタルの里」や菜の花・レンゲ・コスモスといった「花の里」、「和紙の里」といった各種の地産品の里づくり。そして地元の素材による焼き物・織物の再生。和太鼓・歌舞伎・踊りなどの伝統文化・芸能の復活。民俗・ことばの保存と伝承など「地域特性」を活かした活動の成果が、時折り暗いニュースの多いなかに割って入って、明るいニュースとしてテレビで紹介されている。

その上にいま新たな伝統特産品づくりが全国で展開されている。

どこのどんなものが全国征覇にむけて勝ちあがってくるか。

一人の傑出した技能をもつ職人が案出して、みんなで協力して展開することもあるだろうが、子どもの夢の実現もある。すべての住民が参加して、その中でも地元を愛する高齢者が協力して「地域特性」を掘り起こす地道な試行から、多くの「地域特性の生きる製品」が生まれるだろう。それらはまたシニア世代の暮らしに見合った「地域生活圏＝エイジング・イン・プレイス」を豊かにする道に重なる。

高齢者の持つ知識、技術を活かす現場は地域にいくらでもある。

地域で暮らす高齢者が一生のあいだ便利して使える生活用品を自分たちの力でつくり出す。さまざまな地産品がまちの展示会で知らされ品評会で競われて評判になる。地元の道の駅や周辺地域での人気が際立つようなら、それは「新・地産ブランド品」誕生のチャンスとなる。優れたものは姉妹都市や友好都市を通じて海外の高齢者にも受け入れられることになれば、新たで有力なMADE IN JAPANの輸出品になるに違いない。

三世代の意欲的企画の合流点

ここでの主題は「世代交代」ではなく「世代交流」である。

ご記憶にも新たなことだが、今世紀にはいって政界の「世代交代」はすさまじかった。「世代交流」の大合唱によって「チルドレン」や「ガールズ」が国会に呼集されて若返りはしたもの

の、「世代交流」によって経験の継続が図られたようすはない。それは他の分野にも波及して、自治体での取り組みでも遅速の際立つのが「世代交流」である。

内閣府主催で毎年開かれる「高齢社会フォーラムｉｎ東京」は、これまでは高齢者による高齢者のための「高齢社会フォーラム」の感があったが、平成二六年度（七月二九日）フォーラムからは「多世代からみたシニアの意識改革」とか「シニアと多世代がつながるために（ＩＣＴの活用）」という分科会が設けられて、世代をつなぐことでみんなが協力して形成する「長寿社会」への契機がうまれたといえる。

そこではこんなシニア像が指摘された。

「嫌われシニア」「愛されシニア」「孤独なシニア」「アクティブ・シニア」「プラチナ・シニア」「良いシニア」と「困ったシニア」「悪ガキシニア」・・である。

「嫌われシニア」や「困ったシニア」の特徴は、差別をする、空気が読めない、自分のことばかりいうなど。一方の「愛されシニア」や「良いシニア」は、潔い、自他がわかる、甘えさせてくれる、など。「甘えさせてくれる」には困ってしまうが。

「プラチナ・シニア」は渋く輝いているシルバーで、品格があり、明るい。思いのほか「悪ガキシニア」の評判がいいのは、意識しておいていいかもしれない。

これまで地域の世代間の出会いといえば、ここに記すのも恥ずかしいほどだが、形どおりの地域の「老人クラブ」と「子ども会」の間での地縁的な交流が知られるていど。「全老連」（全国

老人クラブ連合会）がおこなってきた「地域を豊かにする活動」（旅行や将棋など）がそれで、「伝承活動」や「世代交流」は組織あげての活動の柱になっている。余力をもつクラブは、地域文化や芸能・民芸や手工芸、郷土史などを子どもたちに伝承している。クラブの若手会員による独自の活動も見られる。ここでもそれに重ねてだが、地域の元気シニアによる自発的な交流活動が胎動している。

＊「三世代ふれあい館」なんていいね

どこの地域でも子どもたちが当面している問題は、これまでの「老人クラブ」と「子ども会」の間では担いきれないほど山積しており、同じエリアで暮らしている高齢者の「地域生活圏」での活動のひとつとして、次世代育成の事業として「世代交流」の場が求められている。

大都市近郊でのベッドタウンでの事例としては、千葉県柏市での活動があげられる。

柏市と東大高齢社会総合研究機構とＵＲ都市機構との協働で、ここをベッドタウンとしてきた高齢世代が、優れた知識や技術を活かしてさまざなな就労の場をつくり出しを試みている。その中でたとえば海外勤務の多かった商社マンが子どもたちに生きた英語を教えたり、技術者が理科系の知識や技術の伝授に一役かっている。こういう無理のない世代間の課題別の出会いは、あらたな次世代育成の場をつくるとともに高齢者の就労の機会をつくりだしている。こういう柏市型の活動は、大都市近郊ではさまざまな分野で広く可能であろう。

そのためには高齢者活動の団体と個人が物づくり、文化、趣味などテーマをもって参加する「地域シニア会議」の設立が必要になる。さらに世代別の要望をお互いに知って実現するための「三世代会議」や、その先には常設の施設「三世代会館」が、将来はどこの自治体にも設置されて、「まちづくり」の拠点として機能することになるだろう。

すでに「三世代交流館」（大洲市）や「三世代ふれあい館」（土岐市）など「三世代会館」を称する先駆的ネーミングや活動もみられる。三世代の代表者がそれぞれを代表して交流し、合議する場として運営できるようになれば、それぞれの立場をお互いに理解し支援しやすくなる。「世代交代」ではなく「世代交流」による議論が可能になる。合同の集会や文化事業の拠点として有効に機能するだろう。

そこからさらに三世代それぞれが要請する「モノ」や「サービス」や助け合いが明らかになる。持続可能性のある自治体はその成果の上に成り立つことになる。

第四章　三世代四季型まちづくり

1　ひとときを憩う中心街

夜はコンビニの明かりが頼り

スーパーの明かりが消えて、パチンコ屋の営業が終わって、小さな駅に最終電車が着いて駅舎に人が動かなくなったあと、なお明かりがともる二四時間営業の「セブンイレブン」や「ファミリーマート」や「ローソン」といったコンビニは、頼りになる生活支援の拠点になっている。やや親しみに欠ける警察分署や頼りがいのない宿直員だけの役所よりはずっと。

あなたの住む町も同じだろう。いまやどこのまちでも見られる風景になっている。

しかし、わがまちの姿としては途上のものとだれもが思っている。

思い出されるのは、駅に人が溢れ、明日へのあいさつが飛び交い、駅につづく商店街がにぎわっていたころ。なつかしい。何より明日への安心感があった。

それが移動がクルマ中心になるとともに、日用品が国産から安価な途上国製品になるという「マイカー＋グローバル化」がすすんで、町の郊外にいくつものスーパーができた。駐車場があり、途上国産の廉価品を扱うスーパーに客を奪われて、長く住民に親しまれてきた国産・地産の優良品を扱う商店街は求心力を失っていった。

だれかがどこかで意図し成功させた情景である。

中・高年者は生活感性に合わない粗悪品で我慢することになったが、といって日用品に途切れが生じたわけではなかった。ふつうに使えて安ければそれで我慢はできる。なんといっても敗戦後のあの貧しさを知っている高年者は我慢強い。

それがアジアで先行して豊かになったわれわれに、アジアの民衆の暮らしが追いつくプロセスであると思えば、文句はあるが我慢ができるのである。

その前にアメリカでの日本製品たたき（アメリカで日本車が壊されたり燃やされたりした情景はショックだった）があって、貿易不均衡による日米構造協議があって、「大規模小売店舗法」の改正（一九九一年）からはじまった「まちこわし」（商店街での閉店・シャッター通り化）は、その後、アメリカ製品の流入より日本ブランドの途上国製品を売りまくるスーパーの安売り競争で極まっている。

いまや商店街をまるごと取り込んでしまうような大型ショッピングセンターやモールまで登場した。あえぎながらも営業をつづける旧来の商店・商店街・流通網では守るにも攻めるにも手立てはないように見える。だが生産側主導のスーパー商法は、この国ではいずれ生活感性が高く優れた日用品を選んで求める消費者から見放され、行き着く先は見えている。

だから流通の多層化による戻り路はちゃんと残されているのである。

あのマックが赤字になって二四時間営業の旗手を譲り、コンビニが出来たり消えたりし、同

時にからだに感じられる程の微震だが、確実に地産品によって旧商店街が動き出している。

＊商店街は「モノと暮らしの情報源」

小売店のピークは一九八二年だったという。そのころは全国に一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所あったという。

商店街や商店の数もそうだが、街には人をひきつける活気と魅力があった。商品ばかりか人生の先達があちこちにいて、元気も暮らしの知識もそして割引もしてもらえたのである。

歩行型の住民にとって「モノと暮らしの情報源」であった中心街の崩壊が、この二〇～三〇年で住民から何を奪い、何をもたらしたのかはみんなが体験している。

そして二〇～三〇年後に何が必要であり何を回復すべきであるかも。

再生への努力はさまざまに試みられているが、先を見通せなければ後継者は得られない。日本社会の重要な骨組である農業は、さまざまな経緯を乗り越えて可能性を見出している。後継者のことまでを考慮にいれると、なお頑張って営業をつづけている創業百年の老舗といえども猶予はない状態がつづいている。

明らかな「構造の問題」だったから、商店主の努力では太刀打ちできるわけもなかった。

まず細々と商いをしていた小売店で儲けが出なくなり、投資ができなくなり、将来に魅力を失って後継者がいなくなった。それでも原因は商店主の才覚の有無に封じこめられ、商店主は

煤を払った神棚にむかい何代目かとして創業の先人に不明をわびながら店を閉じたのだった。

江戸時代以来の日本社会を支えてきた流通の「動脈硬化」がつづいている。物流は細っていったが、閉ざされたわけではない。

じわりじわりと客が減りつづけ、商店の店じまいの時間が早くなった。それとともに商店街に防犯用シャッターが増えた。シャッターに絵を描いたりしたが、路は暗くなり、街を歩く人びとへの親しさを閉ざしたのは商店街のほうだった。めっきり人通りが減り、店内で話し込むお客の姿も少なくなった。客が減って商品が動かなくなれば、作り手は製品を作れない。

「え、あの店も？」といった話題になりながら、中心街の道筋の中心にどっしりと店を構えていた地元資本の大手商店までが消えていった。お互いには見えない作り手と使い手と見定め得ない自分の店の将来に思いを残しながら、商店主は見切りをつけた。

みなさんのまちもそうだろうが、まことに惜しまれるが、もはや再生が不可能な商店も含まれている。その中には江戸期からの歴史を持ち「地域の顔」を支えていた特産品の老舗が含まれる。和紙・毛筆・べっこう・陶磁器といった工芸品の店や、呉服・家具といった伝統品を商っていた有名老舗までが次々に看板を下ろしていったのである。

地道に地方出版を手がけて、地域文化の拠点だった老舗書店も、大型店舗の駅前出店のあと、しばらくしてひっそり灯りを消していったのだった。

そして地方の流通を支える砦であり、地域住民に馴染みの濃かった地元資本の百貨店、たと

えば宇都宮市の上野百貨店や和歌山市の丸正百貨店といった有名店舗の経営不振が伝えられるのと前後して、M市でも地元資本の百貨店と家具店が同じころに倒産した。市民に商品流通の変貌と優れた国産品、地産品の製造停滞を決定的に納得させることになった。

三〇年でこうも変わるものなのか。ではこれから三〇年でどうすればいいのか。

「歩行生活圏」と「車行生活圏」

全国のまちづくりの中に、「歩くまち」をテーマとしている都市がある。

秩父市、倉敷市、安来市などがそう。

高齢社会への移行を見越して、「買い物空間にとどまらず、心地よく歩いてすごせる時間消費型の生活圏をめざす」として、街を歩行者モール化する都市もある。車で訪ねて歩いて成果を見てこよう。ライド・アンド・ウオークでいい。

「車行」と「歩行」の使い分けは生活スタイルの多重化である。

富山市ではじめた歩行補助車「富山まちなかカート」が評判になっている。高齢者が歩いて出かけるのを支える試みとして進められ、「歩行圏コミュニティ」の実現に一役買っている。地域のまちの中心街は「歩行生活圏」として再生し、「車行生活圏」との使い分けを明解にする必要があるからだ。

「車行生活圏」のほうは見てのとおりで今、とくに言うこともない。

＊中心街に集う高齢者と子ども

「歩行生活圏」の中心街のおもな利用者は、日課として小一時間ほどの散策に出動し、使いなれた生活小物や茶菓を購入し、店主や出会った知人と語り、暮らしの情報源としている高齢者。

そして日用の買い物と街なか会議（むかしは井戸端会議）をする女性たち。

そして同じ「居場所」でゲームや本の立ち読みをし、学用品やおもちゃを買い、遊びを楽しむ子どもたちである。

「街に老人が集まり、子どもの姿や歓声が聞こえないようなら活性化に明日はないですよ」

とM市駅前通り商店会を代表して中心市街地活性化の「基本計画」作成にも参加している上野さんは熱意をこめてそう語る。

「基本計画」のテーマは「街ごと四季ステージ」化である。

空き店舗を利用した四季ステージ「春の店」「夏の店」「秋の店「冬の店」があって、そこは日課としてやってくる元気な高齢期の人びとと子どもたちがいっしょにすごせる「歩行生活圏」での出会いの場となる。「夏の店」がお中元売り出しを担当し、「冬の店」が歳末大売り出しを担当する。「春・秋の店」は学校や役所や市民会館や図書館ほかの公共施設や「病院・医院」や「地域包括支援センター」などとの連絡場所になっている。

まちの中心街（商店街）は、高齢者同士が、そして祖父母と孫が、母と子が、女性同士が、

安心して買い物やおしゃべりや居場所としてすごせる「世代交流のステージ」である。

子どもたちの安全な居場所づくりとしては、遊具を固定せずに子どものアイデアで変身させる児童公園（まっ白い広場づくり）がある。屋内なら「一八歳以上お断り」といった「ブック&ゲーム・センター」。そこで子どもたちは好きな本を読み、絵を描き、ハイテクのメカやソフトに存分に触れながら、友だちと歓声をあげて楽しめる。そんな子どもたちのための安全な居場所づくりは、次世代を育て、まちを活性化する中心街の重要なテーマである。

こども園や小学校を終えて、塾がよいのほかに、週に何日かはこういう街なかの施設で仲間と夢中に過ごすのは、養育・教育の過程でのたいせつな道くさなのではないか。

「三世代四季型中心街」でひとときを憩う

全国のまちづくりの中に「歳時記の感じられるまち」（長岡市）や「歩いて楽しむ街、四季が感じられる街」（盛岡市）をめざすところがある。「わがまち」を論じる際には、そういう一歩進んだ各地の街を訪ねて歩いてみるのもいい。

まちの中心街でもある商店街の催事は、これまでは「中元」（夏）と「歳末」（冬）の二季だけだった。それに春・秋を立てて季節ごとの「四季の催事」として構成し直す。住民が季節ごとに街空間を楽しみにしてくり出し、さらに次の季節への期待を抱けるM市のような「四季のステージ」、季語を先取りする街のステージの演出に商店街の賑わいを取り戻す契機がある。

その演出者はいうまでもなく地元の「街元気リーダー」（経産省の用語）である商店主や高齢住民が担う。もちろん俳人や華道の師匠も加えて、夏・冬二季型から魅力が多い春と秋を加えた四季型ステージへ。

「三世代四季型中心街、生き残りはこれですよ」

といいながらも商店街を元気にする立場にいる上野さんの声に元気がない。

商店会としては理屈としてはわかるが、年二回でさえすぐ次がやってくるというのに「いま年に四度はムリ」だというという。

「ムリして二度ではなく、ムリなく四度ですよ」

地域の隅々をよく知る「＊地識人」が手伝って、「季節ごと四つのステージ」を街空間に取り込んで賑いを呼び戻すのだからといっても、商店会としては首をタテに振れない。

これではM市駅前通りは中心街活性化の先陣を務められそうにない。

四季折り折りの地域の風物を取り込んだ春（三～五月）・夏（六～八月、中元）・秋（九～一一月）・冬（一二月～二月、歳末・新年）を表現する季節ごとの装飾をほどこすのにムリなんかないのに。さまざまな場で失った「季節感」の復興は、商店街のテーマではないか。

「三世代四季型中心街（商店街）」の演出のために、わがまちの歴史・伝統、産物、風物、人物、芸能、技能といった特性ある「地域資源」に目を配り、わが中心街の演出として取り込む。こんなまちづくりをわが人生と重ねる高齢者なら呼びかければいくらでもいるというのに。

＊日課としての「買い物＋遊歩」

日常生活に必要な品々を商う店が並んでいた「商店街」の役割は何だったのか。

地元住民が暮らしで必要とする日用品を頼めば必ず手にはいるユーザー優先の流通拠点であり、商品知識の豊かな店主がいる情報源だった。見知らぬ生産者と消費者を双方向に繋ぐことができる商店がなくて消費者が豊かに暮らせるわけがない。

そういうユーザーの要望を取り入れた新たな流通拠点が、地元生産者と商店会と商店主と住民が協議して運営する「（未）地域流通スクエア」という「みんなのためのおみせ」である。

「（未）地域流通スクエア」は、「モノもカオも見える」流通拠点である。

地元の特産季節ものということで、商品性の高い「地場（季節）商品」を主力商品としながら、スーパーやコンビニでは入手できない「超スーパー・コンビニ商品」を提供し、サービスで地域の人びとの暮らしの要望をサポートする。商品知識の豊かな店員がいて、住民からの注文と配達を一手に引き受けてくれる。

自治体、地域包括支援センターとも対応して介護者への物品の配達などもおこなう。もちろん二四時間フル営業である。

地元住民が必要とする商品情報、公共機関・施設の情報をネットでむすんだ「中心街の中心核」として、「（未）地域流通スクエア」のような施設を成功させることができるかどうか。

そういう「情報源としてのみんなのおみせ」を組み込むことで、「商店街の求心力」をつくりだす。二四時間営業の「超（スーパー）・スーパー」機能をもつ頼りになる流通拠点が登場する。ここで「歩行生活圏」の「三世代四季型中心街（商店街）」のようすを画いてみよう。

町全体が「地域の四季」をたいせつにするようになれば、その中心街には色濃く反映される。地産品をはじめさまざまな季節用品が集まる。街の伝統行事が公開され広報される。そして次の季節の訪れが待たれる予告のステージ、それが「三世代四季型中心街（商店街）」である。そういう姿になれば、地産（季節）商品中心の「わが街の商店街」が「歩行生活圏」として再生され創成され、途上国産品中心のスーパー型「車行生活圏」と共存することになる。

「商店街って、おもしろいじゃん」

と、通りかかった無季節・無機質そだちの若者たちが言うだろう。

「季節の風物」に安らぎながら、ふと出会った知人とひとしきり気軽に街談巷議を楽しみ、ケーキ屋のテラスで一杯のコーヒーと店自慢の自家製ケーキで手造りの味を味わい、あるいは茶を商う老舗で一服のお茶と和菓子で「甘余の味」を味わう。気軽な「和風街着」で訪れて、ひとときお国ことばで語りあい、暮らしの声や音を快く聞き、子どもたちの遊ぶ姿を見、歓声を聞き、街の臭いを胸に収めることができる街。だれもが小一時間ばかりやってきて、みんなでくつろぐ。そんな「三世代四季型中心街」なら、今日にでも行ってみたい。

二　住み慣れた地域で暮らす

現風景に「ふるさと原風景」を重ねる

終戦から七〇年が過ぎて、戦後生まれの人びとが「七十古希」に達する。七〇歳をどこで迎えているか。それ以後をどこでどう過ごすのか。

高度成長期に「ふるさと」を離れた多くの人びと。都会に夢と人生を求めて出て、そのまま職に就いたり、大学で学んで就職をして、都会暮らしをし、結婚をし、次世代を育ててきて、定年を迎えた人びと。それぞれに高齢期人生への岐路に立つ。

その中には定年後もそのまま都市郊外の団地や戸別住宅に住んで、子どもを送り出して、「高齢化する生活圏」（団地など）に居つづけて、最後はひとり住まいになって、「都市浮遊型の人生」で終わる人も多くいるだろう。もう十分に働いたからあとは勝手にさせてくれという「引退余生」型の人生を選択した人びとである。戦後復興と繁栄に貢献した功労者の暮年が穏やかであることを祈って、後の章で別の場でお会いしたい。

ここでは緊急性を増している地域、「ふるさと生活圏の再生・創生」を論じなければならない。ふるさとに回帰して、高齢期から終末期までを過ごす「エイジング（エンディング）・イン・プレイス」での晩年に期待する人びとと高齢期人生について語りたい。

しごとを終えて、あるいは終える前から、暮年・晩年を「ふるさと」にもどってすごそうと

考えている人びとを「Ｕターン」型（族）、あるいはそういう「ふるさと帰巣」指向の人生をもつ人びとを、ここでは「Ｊ・Ｉターン」型（族）と呼んでいる。

どちらの人にも「ふるさとの原風景」があって、ときに静かに「ふるさと」（大正三年・一九一四年）を歌えば、うさぎやこぶなやなつかしい山や川は変わることなく眼の裏に浮かぶ。

「♪いかにいます父母・・」となると、父母はすでになく記憶の中の存在になっている人も多いだろうが、あるいは大正生まれの母上がひとり、ご健在でいるかもしれない。

「ふるさとの現風景」は、この三〇年ほどのあいだに、地元に居た人びとが求めていたものともずいぶん違う姿になってしまっている。

＊Ｕターンする人びとの願い

この三〇年間に「ふるさと」が失ってしまったものの多いことに気づく。

失ったものといえば――安心して歩ける小路と生垣。緑ゆたかな里山や鎮守の森。ヒバリやカエルの声。赤とんぼ。わら屋根の篤農家。商店街の活気。そして屋外で遊ぶ子どもたちの歓声や腰の曲がったお年寄りの笑顔・・もちろんまだまだあるが。

得たものといえば――舗装された真っ直ぐな道路、ブロック塀。メカニックな騒音。コンビニ、スーパー、駐車場。ウサギ小屋どころかハチの巣集合住宅、コンクリート造りの学校、新庁舎。マイカーとプレハブ造りのマイホーム、見知らぬまま付き合いのない隣人・・もちろん

まだあるが。

三〇年での変容。地方を変容させたのは意図しない国の意志であり、国の意図や意志は政治家によって示されるから、将来構想もなく行なわれた「三〇年にわたる失政」である。

三〇年後の二〇四〇年までに八九六自治体がなくなるというショッキングな予測を示して、みずからを含めての「失政」を指摘したのは「日本創成会議」（座長・増田寛也元岩手県知事）である。将来の地域の創成を説き、創生の意図をもって走り出した「まち・ひと・しごと創生」の仲間を後ろから激励することになるのかどうか。

自治体危機の主因は「人口減少」というが、唐突に将来予測で名指しでなくなるといわれた自治体の戸惑いは隠せない。「創生」や「創成」より何より「創政」が真っ先の課題ではないかと横やりがはいるのは当然だろう。

目の先の「人口減少」だけで地方の未来は測れないし、暗い未来も意味しない。

大都市での人生が安泰かどうかはともかくとして、全国各地では帰郷した高齢者も参加して、新しい泉が涌き出すようにして生活空間が造成されているところがいくつもある。

山形県川西町の「きらりよしじま」方式などがモデルとされるが、高齢期人生の活動の舞台「エイジング・イン・プレイス」は、国や自治体からの要請から始まるものではなく、地域に住む個々人がみずからの人生のために始めるものである。

ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、こじゃれた家を建てて暮らす人もいるだろうが、戻

って地元に残っていた仲間とともに「ふるさと再生・創生」事業に加わる人もいる。後者のような気構えを持ってUターン・Jターンする人の発想と意欲に可能性を見出す。

小島さん夫妻は戻って農業をやることを決めている。篤農家だったおじいちゃんには見るに耐えがたかった休耕田の時代も終わる。

「帰りなんいざ」の思いがまだ現役であるふたりの言動に溢れている。

「ニシキ族」より「キキョウ族」

いま、ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、違和感のある邸宅を建てて、地域と融け合わない暮らしをするような人（＊地閉症）は期待されていない。「ふるさと生活圏」をともにつくる気構えで「キキョウ（帰郷）」する人が求められている時節なのだから。

五〇代初めの小島さん夫妻は小・中学時代からいっしょの同郷である。子どものときに小島さんのおじいちゃんから「粒粒辛苦」して農作物をつくるしごとの大切さを教わった。

「ふるさと」に終の棲家をつくるつもりで、それも高齢者専用ではなく、都会暮らしをしている子や孫がもどって来て暮らせるような、あるいは孫を呼び寄せて育てられるような二世帯用住宅にするつもり。

そして将来は都会暮らしをした孫たちが、かつて祖父母や父母が「エイジング・イン・プレイス」として暮らした地を「ふるさと」として戻ってくるような。

国土交通省住宅局（安心居住推進課）と厚労省が共管事業として都市内ですすめる「都市型高齢者住宅」への構想や税制上の優遇は、むしろ「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」としてこそ活かしてほしいところである。

「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」は、とくに五〇歳代後半の高齢準備期のみなさん、小島さんのような地域指向の人生選択をするUターン型の人びとへの支援として「地方創生」の柱になる。

「地域医療・介護推進法」が二〇一四年六月に成立して、「新地域支援構想」としての内容が二〇一五年四月から地方自治体と地域高齢者の協働で実施に移されている。三年の間に、介護支援のほかに、子育て、認知症、障害者、生活保護、ニート対策などの実務が自治体に移されることになる。政府一体をいうのなら、「地域創生」事業と「新地域支援構想」との連携を図るべきではないか。政策が二本立てのタテ割りで地域の現場におりてくる。「まちづくり」の活動主体が「国から地方へ」と移譲されていることは理解できるのだが、その関係を自治体も地元の高齢者もよく理解しえていない。

活動の中心が全国的な均衡のための国主導の事業ではなく、地域特性・地域資源を活かすことに移っていることから、活動主体が「国ではなく住民と地方自治体にある」として国が認めざるをえない動向があることはたしかであるが。

＊孫と暮らせる「ふるさと創生住宅」

市町村合併のあと、どれほどの地域がどれほど元気であるかを知るためにおこなわれた調査だった。「地域再生に関する特別世論調査」（内閣府・二〇〇五年六月）がそれで、少し間をおいたデータだが、以後の状況はこの方向に進展しているプロセスにある。ここをしっかり理解しておかないと、地域は新しい方向に動かない。人ごとではないのである。

平成の市町村合併協議は、ご記憶のように、「生活圏の広域化」や「少子高齢化」などを課題として全国展開されたが、ひと段落したところで内閣府が調べたところ、自分が住む地域に「元気がない」と感じる人（四四％）が、「元気がある」と感じる人（三八％）を上回っていた。「元気がない」と答えた人は、その主な理由として「子供や若者の減少」（五九％）、「中心街のにぎわいの薄れ」（五一％）、そして「地域産業の衰退」（三九％）などをあげている。いまのみなさんの実感ともそう遠くはないだろう。

そして何にも増して問題だったのは、活動の中心となるのが国（一八％）ではなく、住民（四八％）と地方自治体（三八％）であることがはっきりしたことだった。国の一八％というのは、活動の中心が「もはや国ではなく住民のみなさんと地方自治体です」と国がいわざるをえないほど低率だったのである。これを地域で暮らすみなさんが実感としているかどうか。

たとえば増えつづける「支えられる高齢者」のための「地域包括支援センター」の充実は、同時に地域に増えつづける「支える側の高齢者」（いずれは支えられる側に）がその気で参加し

なくては成果がおぼつかないのである。すでに自治体の側は準備を整えている。

ＰＰＫ（ピンピンコロリ）でないかぎり、高齢者はだれでも健常期のあと、介護期、医療期、入院期、終末期のプロセスを踏んで一生を終わる。ところが、これまでのように治療を病院の外来で受け、重篤になったら入院して病院で死を迎えるという時代ではなくなる。施設完結（病院）型から地域（自宅）完結型に替わらざるをえないからだ。

「支える側」にいるうちに自主的に地域活動にも参加する。

これから「キキョウ型」住民としてふるさと回帰をする人にとって参加しやすい環境が整うことになる。それとともに「子ども・子育て」もまた両親ふたりと施設型から、地域が助け合って次世代を育てようという「地域育成型」への転機を迎えている。

Ｕターンして「ふるさと」で暮らしながら、可愛い孫を預かって育てる。都市に残った若いふたりは、もう一人産むチャンスを得ることになる。あっていい少子化対策であり、かつてのような戦時ではなく平和時のいなか暮らしは子どもたちにとって一生の資産になる。

先の世論調査にみる地域の「子供や若者の減少」には「少子化」があり、「中心街のにぎわいの薄れ」には商品流通の変化がある。そして「地域産業の衰退」には大資本による系列化、グローバル化による生産拠点の海外移転といった外部の事情がかかわっている。

そこで自治体と住民は協力して、小ぶりでも特性を活かした地域産業を支援し振興し、中心街を活性化し、「子育て」を地域の施策ＮＯ・１にして、みんなで次世代が安心して育つ「しく

み」をこしらえる。子どもたちの歓声がまちのあっちこっちからあがる。こんなまちなら人口は増えるだろう。

同じ「ふるさと」の同じ居場所が、高齢者と子どもたちにとっての「エイジング・イン・プレイス」である。旧住民としても「キキョウ族」としても、孫たちとすごせる場所をしつらえて、情報源になる中心街をつくり、地域産業の育成に貢献できる原動力になる。都会から地域へむかう「ふるさと回帰」の人の動きが、新たな地域を創生する原動力になれればいい。地域問題は人口減少ではない。地域に暮らすみなさんの実人生にかかわる選択の問題なのである。

高齢者の参加が成果を左右する。なんといっても国民の四人にひとりは高齢者なのである。

横並びの均衡、横比べの特性

新幹線の座席でうとうとした後で、身を起こして窓から外を見る。

「ん？　いま、どこさ走ってるん？」

流れ去ってゆく風景からでは、どこを走っているのかがわからない。

外国での話ならともかく、わが国の国内での話。新幹線を利用した人ならだれもが経験していることなのである。次々に展開する畑も野山も家並みも、どこも同じような風景なのだ。

「ここはR町　△△が特産」といった程度の看板くらいは車窓から見える風景の中にあってもよさそうだが、地方特性（特産）が立ち上がっていない。「地方の時代」といわれてずいぶん経

つというのに、とまずはそう思う。
しかし風景を眺めているうちの、待て待て、となる。
これは見方の違いによるのであって、いずれの地も凸もさせず凹もさせずに、「冨を等しく分かち合いながら、ともに豊かになる」という、先の大戦後にわが国の先人が選んで目標としてきた「日本的よき均等性」の成果なのではないか。
「豊かになれる者からなれ」とはせず、個人差や地域差をなくして、等しく成果を分かち合おうと務めてきた善意の人びとによる積年の成果なのだ。
その意味でなら、これまでも「地方の時代」だったといえる。
東京一極集中の風潮の中で、地域の優れた人材を数多く都市に提供しながら、地元に残った人びとは、「モノと場の平等な豊かさ」のためにたゆまず努力をしてきたのである。
みんなが等しく貧しかった時代、地方から若者たちは都市へと向かった。地元に残って貧しさや不便さにも耐えながら辛苦した人びとがいた。いまはその姿は遠くなって定かでないが、地元のために尽くした先人の努力を無視・軽視しては、現状の公平な豊かさに対する理解の公平さを欠くことになってしまう。
だれもがいい顔をして、合併前の旧市町村長室には歴代の首長の写真がかかっていて、居並ぶ先人に見下ろされて現役首長はしごとに励んだのだった。

＊「国土均衡」に「地方特性」を上載せ

新幹線を利用しながらこう語るのはたいへん失礼になるが、

「善く行くものは轍迹なし」（『老子』から）

という先哲のことばに耳を傾けたい。耳からだと、「よく」が善であり「てっせき」がわだちの跡であることは説明がいるだろう。自然体で、すべての業績を周囲の人に振り分けて、みずからは轍の跡を残さず去っていった善意の人びとの姿を忘れ去るわけにはいかない。

等しく冨を享受するために先人が選んで始まった「国土の均衡ある発展」という政策が、時を経て貧しさを克服したところで「横並びの安心感」によって、後人の自立意識の欠如となり、推進力を失っている。

気づかない横並びの地域の基盤があぶない。

そこで、その危機感の表現として政府が掲げたのが、「国土の均衡ある発展」から「地域の特性ある発展」へという「骨太の方針」だった。

ここで注意すべきことは、「〜から〜へ」ということばの理解にある。「〜を転換して」ではなく、「〜に多重化して」あるいは「〜に上乗せして」と理解することである。

「特性ある発展」だからといって、「均衡」を一八〇度転換するのではなく、これまで国がリードしてきた「横並びの均衡」によって得た現況に、さらに地元の発想で「特性の多重化」をおこなって、地域の活力を呼び起こそうということである。

国家が支える基盤としての「均衡ある発展」はなおつづくが、その上に地域が掘り起こした「特性」を重ねる。そう理解して進めなければ、先人が善意で積み重ねてきた「みんなが平等に」という営為をまるごとひっくり返すことになってしまう。

「地域に根ざした暮らしの知恵がどこの地方にもあるはずだから」

と納得しながら、新幹線の客は、どこかわからないまま車窓から目を戻す。前方の出入り口の上の小さな空間をニュースが流れ、「あと三分でN・・」というお知らせが流れた。

わがまち独自の「地域助け合い」

高齢期を地域で暮らしている人びとには、経歴に三つの特徴がある。

地元の新制中学校を終えて、仲間が次々に町外へ出て行ったあとも、生まれ育ったふるさとに残って、地域の物産や伝統行事を守り、次世代を育ててきた人びと。次に述べる新住民とのかかわりで旧住民（Q字型）と呼ばれる。寡黙な多数派の人びとである。

次がふるさとを離れて都会に出てさまざまな活動をしたあと、高齢期（エイジング）から終末期（エンディング）までを、ふるさとに戻って過ごすUターン住民（U字型）。

そして魅力のある町には、これまでに関係を持たなかった人びとが都会から高齢期を過ごすためにやってくる。これを新住民（J字型・I字型）と呼ぶ。

こういうそれぞれに異なった経歴と能力と生活感性を持つ人びとが、国の骨太の方針が「均

衡ある国土の発展」から「特性ある地域の発展」に変わろうとする時期に、各地でいっしょに暮らしている。旧住民を除けば、同じ生活圏であまり関係をもたずに孤立している。

これまではＪ＋Ｉ字型の高齢者は、地域ではお互いにそれほど関心を持たず持たれずに、時代の功労者として、それぞれに蓄積してきた知識や技術や人脈や資産などは有効に活かす場もなく、そうする必要もなく高齢期を迎えて、静かに過ごしていればよかったのである。

とくに「団塊の世代」のみなさんは、見定めえない長い老後のために自治体が負う負担について考えないわけにはいかない。いわゆる後期高齢者になる「二〇二五年問題」である。

それまではお互いに静かに質素に余生をおくればいいと思ってきたのである。それでも四〇歳から支払いはじめて六五歳になって自治体から「要介護認定」を受けて利用する「介護保険料」の年々の増加は、定年後の家計には負担になる。

その「団塊の世代」のみなさんが地域で高齢者に加わったここ数年、政府の「特性ある地域の発展」の政策に合わせて「地方創生」が動き出し、「一億総活躍」がいわれ、財源不足の先を見越して「消費税」一〇％がいわれ、さらに自治体は「介護」の助け合いの担い手として元気な高齢者の社会参加を求めることになった。「地域包括ケア」の現場では、増えつづける高齢者同士の「支え合い」が必要とされているのである。

周辺の自治体同士の横比べで「特性あるまちづくり」競争が始まっている。介護保険料の額と伸び率は、行政の良し悪しのひとつとして比較の対象になる。

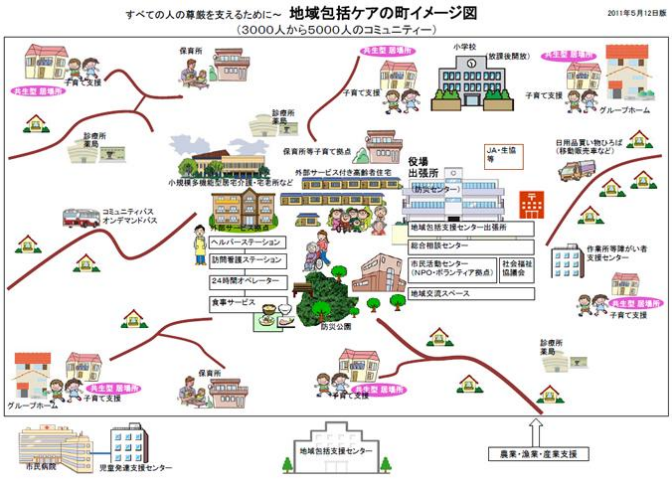
さまざまな「人的地域資源」「物的地域資源」を活かして、みんなが住みやすいまちにする。そのために高齢者が培ってきて保持する潜在能力を提供しあう。これが地域特性を活かした「高齢社会」づくりの核になっていく。

Ｊ＋Ｉ字型高齢者がそれぞれに保持している知識、技術、資産が地域の「人的資源」として注目されているのである。地域の「人的資源」を活かして住民が住みやすい「しくみ」を形成すること。それが自治体の自治力の差を生むことになるからだ。

＊「地域協議体」が活動の中心拠点に

二〇一五年四月から三年の間に各自治体にひとり、「生活支援コーディネーター」（地域助け合い推進員、有償）が置かれる。自治体は「地域医療・介護推進法」の実施にあたって「生活支援コーディネーター」を認定して、官民協働の「助け合い」活動を進めることにしているからだ。すでに動き出している自治体も見受けられる。

その後、「地域包括支援センター」ごと（ここまで有償）に設置され、さらにその後は地域の



要望に応じて認定する（ここは無償）ことになる。

この「生活支援コーディネーター」と協力して活動を支える組織が「地域協議体」で、この「しくみ」の形成の巧拙・遅速によって、自治体間に差が生じることになる。そこで横比べの設置競争が始まる。地域の高齢者のもつ潜在力をどこまで集約して活用できるかによって、活動の広がりに差が生じるからだ。特性のあるわがまちの発展は、新設の「生活支援コーディネーター」がもつ裁量と「地域協議体」の結束力にかかってくる。

これからは高齢者への敬愛も尊厳も、地域への積極的参加なくしては生まれない。

どこも安定的に充実させるのはこれからであるが、先駆的な自治体には、「生涯学習センター」や「地域生涯大学校」があって、高齢期の暮らしやまちづくりに必要な知識・技能を習得するとともに生涯の友人を得ることができる。就労のための「シルバー人材センター」ではその知識・技能を活かしてしごとを提供するようになるだろう。「地域包括支援センター」では住民が適切な介護・医療を受けて、最後は施設完結型（病院など）ではなく、地域や自宅で穏やかに終末のときを迎えることができるよう配慮する。学習・就労・健康維持の三つの地域センターの充実によって、安心して高齢期をおくれる「エイジング・イン・プレイス」が成立する。横比べ競争を通じて形成される住んで優しいまちは、優しい高齢住民がつくることになる。その活動の中核になるのが、「地域協議体」である。

自治体は新設の「生活支援コーディネーター」や「地域協議体」とともに、他の自治体と横

比べをしながら、「特性のあるわがまち」の発展をめざしている。元気なうちは住民として地域活動に参加して、できるかぎりの支援をする。それはいずれの日にか自分にもどってくる「共生支援」であることに間違いない。

目　友人＋生きがい＋まちづくり

明治・昭和「大合併」では人材養成

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、それぞれに新しい自治体が地域発展のための人材養成（教育）を重要な目標の一つとしたことに改めて注目したい。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボルとされた。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成した。その夢はいつしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていったが。三〇〇～五〇〇戸の規模で教育（小学校一校）、戸籍、徴税、土木、救済などが課題だった。七万一三一四町村が三九市一万五八二〇町村に合併された。期間は明治二一＝一八八八年～明治二二＝一八八九年。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが町の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされた。子どもたちは町立中学校を卒業すると、都会へ出ていって高度成長の担い手となった。

八〇〇〇人規模で、新制中学一校、消防、保健衛生などが共通した課題だった。昭和二八＝一九五三年～昭和三一＝一九五六年。九八六八市町村が三九七五市町村になった。

そして二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」（一〇〇〇基礎自治体、一二万人が目標）では、新しい自治体は将来の地域を担う人材を育成するために、何をシンボルとしただろうか。

国（文科省）は、「少子・高齢化」への対応として、これまでの生涯学習のほかには明確な指針を示さなかったのである。

平成一一＝一九九九年三月にあった三二三二の六七〇市一九九四町五六八村は、平成一八＝二〇〇六年三月には一八二一の七七七市八四六町一九八村に合併された。

素朴に冷静に考えてみて、明治の村立尋常小学校、昭和の町立新制中学校、そして平成の市立生涯大学校である。合併の課題の一つが「高齢化」だったのだから、対象は高齢者が想定された。自治体（新市）設立の大学校が考慮されて当然のところだった。

＊「村立尋常小学校」と「町立新制中学校」

明治の「村立尋常小学校」、昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、今回の合併では、「市立の大学校」であり、それは合併協議の「少子・高齢化」に見合う対策である意味からいって、六〇歳から三〇年の長寿をえた高齢者が対象とされる教育機関となるべきものであった。

このあたりのことは、高齢者には必要性の実感があるのだが、現役の官僚にはわからなかったのだろう。「市立生涯大学校」といった趣意と態様のものが想定された。優れた構想力と想像力を兼ね備えている文部官僚が気づかなかったとは考えづらい。

すでに各県・各市には六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高齢者大学校・シニアカレッジなど名称は多様）が開設されていて、高齢人材教育の成果をあげており、本来なら合併協議の場で、国（文科省）は地域自治体の主導において地域発展のために設置を検討するよう指示すべきだったからである。

この欠落は教育史的に問われなければならない。

のち懸案だった「少子化」のほうの、幼保一体化（文科省管轄の幼稚園と厚労省管轄の保育園）による「認定こども園」が実現したように、優れた構想力と想像力を兼ね備えている両省官僚の出番だったのである。

ここでの使い分けからすると、生涯学習は年齢にかかわりがない「長寿社会」のための「生涯学習センター」があり、「市立生涯大学校」は高齢化時代の「地域高齢社会」のための高齢者養成機関（対象は六〇歳代が中心）として並立されてよかったのだった。

まことに残念だったのは、平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことである。そして文科省にそういう高齢人材養成を推進する部署や機関を新設するまでの強い意向がなかったことである。なかったというのは言い過ぎであろう。あったけれ

ども、省としての意向にならなかったと言うべきであろう。

高齢者教育は健康福祉にかかわる厚労省に任されたままだったとすれば、タテ割り行政の弊をまた指摘されることになる。

歴史は過酷である。増えつづける高齢者に高齢者意識を醸成し、自らの長い高齢期人生を切り開く知識と能力を養成する「しくみ」創出の議論を、合併議論の課題としなかった結果の露呈は目前に迫っている。

二〇年前に、新世紀のこの国の姿として、

「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成」（「高齢社会対策基本法」前文）を掲げ、

「二一世紀初頭の本格的な高齢社会を目前に控え，国民の一人一人が長生きして良かったと実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を早急に築き上げていくためには、経済社会のシステムがこれにふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図る必要がある」（「高齢社会対策大綱」の策定の目的）

を目標とする政策を掲げた。

構想力のある優れた官僚と学者と政治家をもっていたのである。

「市立（公立）生涯大学校」の新設

平成の市町村合併の時に各自治体が検討すべきだった人材養成について成果をみなかったことはここに記しておきたい。

もちろんこれからでも遅いということはないが。

明治と昭和の合併で成果のあった課題のひとつに人材養成があった。新しい自治体を活性化するための人材の養成に当たって、平成の合併では市立（公立）生涯大学校が想定された。

その対象者は若者ではない。

六〇歳以上の高齢者で、これから三〇年に及ぶ高齢期を地域で安心して過ごすための知識や技術を学ぶとともに、住みやすいまちづくりに知識と技術を提供し、生涯をともにする友人を得るための機会とする高齢人材養成機関である。

地域で健康に高齢期をすごし、その能力をみずからの人生の充実と地域の発展のために活用する高齢人材が求められているからである。

地域にはすでに医療・介護・福祉を担う「地域包括支援センター」があり、就労のための支援をする「地域シルバー人材センター」がある。それとともに、「地域生活圏」を支える人材を養成し蓄積する「地域生涯学習センター」が設けられて、その中核になるのが高齢人材養成機関としての「市立（公立）生涯大学校」という位置づけが想定される。

「地域生涯大学校」は中学校区の規模で五〇～八〇人ほどの定員を設けて二～三年の修学を目標にして、自治体か官民協働で運営するのが基準型だろう。なにより大切なのは、就学者の同学意識で、終了後お互いに生涯の課題を共有できることを優先すべきだからである。

＊地域が求める高齢人材を養成

幼保一貫型の「認定こども園」による「少子化」教育とともに、新たな「長寿社会」に対応する高齢人材養成の「高齢化」教育が、厚労省と文科省の共管によって検討され、各自治体の主導によって、特徴のある内容をもつ「地域生涯大学校」の新設が、中学校区単位で進められねばならない時期にある。

「生涯学習センター」というのは、自治体で暮らす人びとが暮らしの途中で必要とする知識・技術の学習機関で、いっぱんてきには社会教育と呼ばれて、年齢には制限がない。

ここでの「市立（公立）生涯大学校」は、人生の第三ステージである高齢期を前にして、個人的には高齢期の知識・技術を学び、自治体としては地域の特性を活かす人材養成機関として、設置されるものである。したがって原則的には六〇歳からを対象とする。

文科省は合併時には省内に高齢人材の養成を担当する部局をつくらずに過ぎたが、これは厚労省と合議して「日本高齢社会」形成へむけた高齢人材を養成・管理する機関として共管とすべき課題であり、とくに文科省の緊急かつ必須の事業としていまもある課題なのである。

ここでもまた政治リーダーは、二〇年の延滞を認めた上で、わが国の「人生九〇年社会」の課題として、政府一体での検討と取り組みが必要だろう。

「人生六五年」から「人生九〇年」時代への意識変革を促し、高齢者に社会参加を訴え、社会の「しくみ」の改革を要請しているのは、ほかならぬ「高齢社会対策大綱」（二〇一二年九月改定・野田内閣）である。

高齢者が、六五歳からの長い「成熟＋円熟期の人生」を送るに当たって、健康づくり、就業、社会参加、生活環境、世代交流といった分野の活動のための知識や技術を得るとともに、生涯にわたる友人を得て、お互いの人生を豊かに過ごすことは、地域を活性化する必須の条件なのである。「市立」（公立）生涯大学校」の設置が急がれるゆえんである。

合併の結果、往年の特性や精気を失っている地域にとって、「市立（公立）生涯大学校」（中学校区）の修学生と卒業生が力を合わせて継続する取り組みが地域社会の活性化に与える影響は測りしれないものがある。

生涯の友と学ぶ地域カリキュラム

多くの県が「教育立県」を宣言しているのは、何よりも地元で暮らして地元を豊かにする人材の養成に力を入れているからであろう。

すでに全国各地で成果をあげている「地域生涯大学校」（高齢者大学校、シニア・カレッジほ

か名称はさまざま）は、個人の生きがいとなる知識や技能の習得とともに、地域活性化を担う高齢人材を養成するために、それぞれに地域性を加味したカリキュラムを構成している。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者。これまでの経験に重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の同学を得る。熱中できるテーマがあり、その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるために「地域カリキュラム」は重要な要素である。

ここでは実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を見てみよう。

全国に先駆けて一九六九年に開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格である。週一回の講義で、学科は園芸、健康づくり、文化、陶芸の四つ。クラブ活動には高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどがある。

より専門性をもつリーダー養成の大学院も設置。注目すべきは、一九九九年の「国際高齢者年」に「いなみ野宣言」を出していることである。学科の設定でもクラブ活動でも、まず高齢者が個人的に夢中になれる教科であることが重要な要素になっている。

＊まちづくりに知識・技術を活かす

全国の「地域生涯大学校」は名称もいろいろ。

沖縄県は「かりゆし長寿大学校」（一年制）、島根県は「シマネスクくにびき学園」（二年制）、橿原市は「まほろば大学校」（二年制）といった地域性に特徴がある。

全国各地で多様な構想で実施されており、東京の世田谷区生涯大学シニア・カレッジ（二年制）、江戸川区総合人生大学（二年制）、成田市生涯大学院（三年制）などではそれぞれに独自に学科とカリキュラムで模索を重ねながら、個人的な能力の開発、地域社会が必要とする多様な能力の養成などの目標を掲げて活動している。

ほかにも栃木県シルバー大学校（二年制）、千葉県生涯大学校（二年制）、鳥取県ことぶき学園（一年制）、長崎県すこやか長寿大学校（二年制）、明石市あかねが丘学園（三年制）、明石市好古学園大学校（四年制）など、それぞれの特徴を活かして開校している。

自治体主導で官民協働で特徴のある「市立（公立）生涯大学校」の全国展開が、地域創成のために急がれる時期にある。中学校区単位が有効なのは、修学後の生涯にわたる同学意識が大切だからで、市単位では具体的課題が拡散してしまうからである。

市立生涯大学校が、村立尋常小学校や町立新制中学校と異なるところは、大人が学ぶ学校であり、占有の校舎がないこと。高齢化が先行する日本社会に固有の施設であり、世界に類例を見ないものである。

第五章　九割中流から「失われた二〇年」

1　「失われた二〇年」

高齢社会対策の「基本法」「大綱」から二〇年

本誌のつくりつけとしては、ここから始めることもできた。

しかし時間が切迫するのを感じるとき、じっくり現状の分析をするのはむずかしい。いま急ぎなすべきことを優先し、そのあと共に歩みながら語り合うのがいいと判断して「終章」に近いここに置くことにした。

目次をみて、筆者の心中を推量して、「終章」に近いここからまず読みはじめてくれた優れた読み手のみなさんには感謝しつつ、急ぎ足で「失われた二〇年」を顧みようと思う。

今から「二〇年」前を文字通りに遡れば一九九六年である。

その前年の一九九五年には阪神淡路大震災とサリン事件という「天災人禍」に襲われた。阪神淡路大震災はそののち毎年、慰霊の催しをつづけているから、そこからおよその時間距離がわかる。あの年から起算してここまでだから、「失われた」となれば相当の量が想定されるだろう。

失われてしまった「今」というのはどういうことになっているのか。

それをこれまでるる述べてきたが、ひと足先に二〇一〇年に「失われた二〇年」がいわれた

のをご記憶の方もあるだろう。

それは一九九一年に始まった日本経済の低迷がなおつづいており、いまやアベノミクス効果も薄らいで、「失われた三〇年」すら語りはじめられている。

そんなことから、ここから読んでいただいた人のなかには、経済動向の分析にかかわっている人もいるにちがいない。そこでそのあたりのことにひとこと触れて先にいきたい。

成長のない「ゼロ成長」。

先進諸国がともに長く陥っている「ゼロ成長」の状態からの脱出を、経済における「失われた二〇年」はテーマにしている。そのなかでも日本が際立っており、その要因を西欧諸国と比較しながら一〇年、二〇年と仔細に論じてきているのだが、脱出口がみえてこない。

日本が欧米諸国より先行しているものは何か、あるいは特徴としているものは何か。

経済の側面からそれを明らかにする必要があり、その中でたとえば「少子高齢化」「労働力減少」「需要不足」「中小企業」「生産性低迷」「過剰貯蓄」「団塊の世代」・・・については論じられている。しかし最もたいせつなことは、他との比較がしづらいあるいはできない特徴を、歴史や社会動向を通じて抽出して、別途に仔細に検証することである。

それが何かとなれば、なによりもここで本稿が課題としている史上初の「高齢化問題」つまり「長寿社会＝三世代平等社会」の形成過程なのである。

「高齢化問題」と経済の相関関係についてもさまざまに論じられてきたが、「高齢化問題」に

は「高齢者対策（ケア）」と「高齢社会対策（参加）」とがあり、「高齢者対策（ケア）」のほうは「医療」「介護」「福祉」「年金」などで、財政上の負担増に対処しながらどの国も独自の成果を示してきた。とくにわが国は、医療の面ではノーベル賞の医学・生理学賞を受賞する人が何人も出るほどの貢献を残していることで知られる。

一方の「高齢社会対策（参加）」はどうか。

これは各国の伝統や暮らし方といった個別の国内事情によるものなので、数値の比較はしづらい。それゆえに重要である。

高齢者意識の醸成、就労による高齢者にふさわしいモノやサービスづくり、居場所や通い場所の設置、生涯学習のしくみ、「世代交代」ではなく「世代交流」、暮らしや介護やエンディングを含む地域での「助け合い」、住居や移動の問題そのほかがある。

ひとつ「労働力減少」の問題を取り上げてみても、単純に「高齢化率」（六五歳以上の人口比率）の高まりとともに「労働力減少」が指摘されているが、本稿の「三世代（青少年・中年・高年）平等型」の長寿社会の形成過程に即していえば、高年世代によるすべての世代のための社会づくりであり、鍛えられ磨き上げられた生活感性と積み上げられた知識と培われた技術とが活かされて、新しいモノ・サービスが造出され、新しいしくみが創出されることになる。だからいわれるように社会の総体としての「労働力減少」にはならないし、新たな経済効果が見込まれているのである。

「失なわれなかった二〇年」、これまでになかった右のような課題での新たな価値の創出が各分野、各所でおこなわれていれば、新世紀の今ころは、三四〇〇万人に達した高齢者のみなさんは、新しい居場所に集い、生活感性に見合った優良な国産品に取り巻かれて過ごし、後人に敬愛されて、生き生きと活動を展開しているはずであった。それがあれば経済が上向かないはずがない。

＊二〇年の「迷路」からの脱出口

新世紀にむけて「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」（前文）をめざすとして、「高齢社会対策基本法」（村山富市内閣）が制定されたのが一九九五年一一月であった。次年の一九九六年七月には、中期目標としてなすべき事業を掲げた「高齢社会対策大綱」（橋本龍太郎内閣）が閣議決定されて、高齢化先進国のフロント・ランナーとして、国際的にもいいスタートを切ったのだった。

「大綱」はそののち五年ごとに見直され、「小泉純一郎内閣」（二〇〇一年）と「野田内閣」（二〇一二年）では改定されている。にもかかわらず、国のなすべき事業として取り上げられてきた高齢社会対策は進んでこなかったのである。それが本稿のいう「失われた二〇年」であり、高齢者三四〇〇万人の経済社会への不参加によるさまざまな影響がすで

に露呈しているのである。なすべき対策が分かっていてなされてこなかったゆえに、「社会保障」財政は雪だるまのようにふくらんで国家財政の赤字を拡大しつづけてきた。赤い色の雪だるまなんて世に「ありえないもの」である。

一人ひとりの高齢者は、長年にわたってみずから努めて培ってきた「健康」「知識」「技術」「経験」「人脈」を保持して暮らしている。みずから努めてきて得たものだから、その総体はご本人にしか分からない。外からでは見えず、ご本人にしか知れないそうした「熟練技術」や「専門知識」や独自の「構想」などが、多くは退職して「余生」を過ごすあいだに社会的に活かされずに失われているのである。

大事なので繰り返すが、一九九五年一一月に、村山富市内閣が「高齢社会対策基本法」を制定し、翌年の一九九六年七月に、橋本龍太郎内閣が具体的な中期指針である「高齢社会対策大綱」を閣議決定した。実務を遂行したのは時代感覚に優れた官僚と若手学者とであった。一九九九年の「国際高齢者年」のフォーカルポイント（窓口機関）として全国展開したのも当時の総務庁高齢社会対策室であった。

ここで見落としていけないことは、それらの事業に底流しているのは、時代をつくってきた先人への感謝であり、慰労し敬意をもって功労者を遇しようとする官僚や学者のおのずからなる「善意」であったということである。

しかしその間、高齢化率では一九九四年に「高齢社会」（一四％）に達したあと、ヨーロッ

パ諸国にも例がない世界最速で高齢化が進んでいたにもかかわらず、政治の側はすべての国民に「高齢社会」への意識を醸成する「高齢社会（長寿社会）グランドデザイン」を掲げることもなく、「大綱」にある事業も延滞してきたのである。

この間、「高齢者対策（ケア）」は、二〇〇〇年の「介護保険」の導入など、要支援まで含めた手厚い介護が実施されるなど成果をみたが、高齢者の参加を求めつつ遂行されねばならない「高齢社会対策（参加）」は延滞してきたのである。

この活動の成果こそ、ヨーロッパ各国をはじめ高齢化先行国は、世界最初に高齢化率二一％（二〇〇七年）に達するわが国に期待していたものであった。

その政策不在が年々増えつづける高齢者の将来への不安を醸成し、その経緯が裏返って家計資産を一四〇〇兆円にまで積み上げてきたのである。将来にむけて参加すべき事業が明解であれば、国民とくに元気な高齢者は積極的に参加し、保持する「健康・知識・技術・経験・人脈・貯蓄」を活かして、社会の活性化に貢献できていたはずなのである。

したがって延滞の原因も責任も政治の側にある。

二〇一二年末の組閣以来、「女性と若者の成長力」に期待し優先してきた安倍晋三首相は、二〇一五年九月に「一億総活躍」を呼びかけたものの、高齢者層に対しては際立った参加要請をしていない。「迷路」にはまってしまった政界からは、もはやこの国の総体の姿が見通せなくなっているとしかいいようがない。

底流している「日本社会」の姿をしっかりと見据えて、金融・財政政策で支えるとともに、高度成長を成し遂げたあとも元気な高齢者層を含めて「三世代平等社会」の形成に努めることができていれば、今ごろ「一億総活躍」をいい出しながら三四〇〇万人の高齢者の潜在力を無視するような恥ずべき政策はとらなかったはずである。ありうべき社会に向かっていれば当然に、ノーベル「医学・生理学賞」ほかの業績とともに、「経済学賞」でもノミネートされる経済学者が出ていたはずである。

しかし要因は何事もなく二〇年をすごしてきた国民の側にある。そしてその延滞により露呈してくるすべてのツケを受けるのは高齢者である。

高齢者はすべて「社会の被扶養者」か

今世紀の国際的な潮流が「高齢化」であることを知り、とくに注目される先行国として、新しい社会のしくみづくりをどこまで議論して実施してきたか。

とくに政治リーダーは、高齢の有識者とともに議論して、高齢者意識の醸成、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野ごとに、なすべき活動を仔細に検討し、国民に提案してきたか。国会議員が衆議してえた「高齢社会グランドデザイン」を、増えつづける高齢者に呼びかけながら実現に務めてきたか。

この歴史的にも国際的にも重要な世紀の変わり目の時期に、当時の首相は「所信表明演説」（二〇〇一・五・七）で高齢者にむかって何といったか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」と言い切ったのである。このときに「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成」（「高齢社会対策基本法」前文）へむかうはずであった活動のすべてが萎えたといっていい。この責任は重い。

発言が間違っているといっているわけではなく、発言の対策が「高齢者対策（ケア）」であり、「高齢社会対策（参加）」でなかったことに問題がある。予算折衝に当たっての焦眉の急が、高齢弱者の人びとへの善意の「福祉・介護・医療」それに「年金」だったことは確かではあったが、それとともに、

「元気な高齢者のみなさんはいつまでも社会の支え手であってほしい」

とひとこと訴えて、将来の財政難を説きつつ、増えつづける元気な高齢者層に「自助・自立・参加」意識を醸成するとともに、高齢者みずからが暮らしやすい社会の創出を官民協働で進めるよう訴えるのが政治リーダーの構想力だったのではなかったか。構想力のあった首相だっただけに、「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した官僚や学者や高齢社会活動家やジャーナリストや高齢者がいたはずである。

このままだと、これは記したくないのだが、

「年老いて負担だけがかさむと考える心優しい老齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

ということにならざるをえないのではないかと思われた。

新世紀のはじめに、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相である。

そして一二月には橋本内閣以来の「大綱」の改定を閣議決定している。さらに「世代交代」の大合唱のなかで、大物高齢政治家を年齢で区切って舞台から追い払ったのもこの人である。

いま「原発の全面禁止」を訴えておられるが、「高齢社会対策」の延滞をもたらした政治リーダーを代表して、将来展望を掲げて国民に参加を求めえなかった過ちを認めて、ここはみごとな「君子豹変」ぶりをみせてほしいものである。

＊みんなで渡った「霞が関の赤信号」

今世紀のはじめに、政界の「世代交代」（世代交流ではなかった）の突風にあおられながら、小泉チルドレンを誘導して「霞が関の赤信号」を渡ったのは、かつて優れた厚生大臣と評された小泉首相だった。その後の内閣は、七年にわたった「一年一相」時代を含めて、迷路のなかをさ迷いつづけている。

アベノミクス（女性と若者優先の経済）は、もはや推進力を失ったところまできているのである。この間、高齢者は何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、高齢者が、

「この国の将来の姿はもう見たくない。孫、子に少しでも遺産を残せるうちに死にたい」

とつぶやき、エンディング・ノートを書くような姿をだれが望んだだろう。

今世紀に入っても政治リーダーは、「高齢者は社会の被扶養者である」と位置づけて、予算措置には努めたものの、一〇年後、二〇年後の「高齢社会」が構想できなかったのである。

「医療・介護・福祉・年金」といった施策では国際的水準で評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界トップの成果を示している。これら「高齢者対策」（ケア）については率直に世界に誇っていいことである。

しかし先の小渕内閣で五％の「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするよう当時の宮澤（喜一）蔵相を説いて認めさせた藤井（裕久）さんは、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」

ともらしてくれた。

政治家にはなくとも、官僚と学者にはそういう認識があったから「高齢社会対策大綱」の改定はできたはずである。二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」の改定を閣議決定しているのである。その記述の中に、なすべき対策は埋めこまれている。政界が若手からの「世代交代」の要請の中にあったとはいえ、官僚と学者が時代を底流している「高齢化」の状況に想像力が働かなかったわけではない。想像力が働かなかったのは政治リーダーの側であった。そういわれて弁解の余地はないだろう。

九割中流からの急転直下

「失われた二〇年」の今を隠しおおせずに実例として見せてしまったのが、「老後破産」と「下流老人」の存在である。「高齢社会」の現状に対して高齢者からではなく、現役世代の将来不安を契機にした報告が話題になった。

本のタイトルが『老後破産』であり、サブタイトルが「長寿という悪夢」である。

二〇年前にめざした「基本法」の理念を逆なでするようなこのキャッチコピーが、本が売れない時代にウリを立てるために、「長寿者」のうち限られた条件のものであることを百も承知で付けたとしても、制作者としての「貧性」を問いたいが、圧倒的反響に包まれている間は言っても遠吠えにしか聞こえない。

いま、ひとり暮らしの高齢者に何かが起きている。その経緯はわからないが現場からしか議論は始まらないと決めて、ＮＨＫスペシャル取材班は現場にはいった。

議論の切り口は「経済的困窮」である。タイトルにしているキーワード「老後破産」とはどういう境遇の高齢者をいうのかというと、

――ひとり暮らしの高齢者で、収入が生活保護水準（月約一三万円）を下回っていても生活保護を受けていない（受けられない、受けようとしない）人で、預貯金の蓄えがないか乏しく、年金（国民年金六万五〇〇〇円＋）だけでギリギリの生活をつづけている人。だから病気にな

ったり介護が必要になったりすると、とたんに生活が破綻してしまう――

こういう境遇の高齢者を対象にし、番組（ＮＨＫスペシャル）のプロデューサーが「老後破産」と呼ぶことにしたという。ざっと二〇〇万人余がおり、増えつづけているという。「長寿という悪夢」のサブタイトルには、生きつづけることで追い詰められていく（「預金ゼロ」へのカウントダウンも）現実の苦しさ、厳しさ、虚しさが込められている。これでは長寿の日々が楽しいはずがないという現実。それが取材の前提である。

「失われた二〇年」は、九割中流をなしとげて高齢者になった功労者を「下流老人」と呼ばれる境遇にするには十分の長さであった。

ＮＨＫ取材班は、さまざまな問題をかかえて「老後破産」寸前にいる高齢者を対象に選んで、個人の喜怒哀楽の声を聞いていく。

――必死で働いてきたのに報われない老後――

だれもが口にするこのつぶやきは、二〇〇万人にとどまるものではないだろう。

ひとりの例として、都営団地に住む八〇代の菊池幸子（仮名）さんが登場する。

菊池さんは八年前にまだ独身だった四〇代のひとり息子を失った。そして三年前には夫をガンで失って、ひとり暮らしになった。夫の生前はふたりで一三万円ほどの年金で暮らしていたが、その後は毎月八万円（国民年金六万五〇〇〇円＋）に。

専業主婦だったから厚生年金はない。経費は家賃（一万円）、介護サービス（三万円、要介護

二)、生活費(公共料金を含む、七万円)で、毎月必ず出る三万円ほどの赤字を預金(残り四〇万円になった)を取り崩して充てており、「老後破産」へのカウントダウンがつづいている。

菊池さんにしてもそうだが、「多くの高齢者はその権利(生活保護)を行使しようとしない」と取材者は感じ取っている。

――「贅沢は敵」とばかりに、出費を切り詰め、耐え忍んでいる。「生活保護」を受けることは、「国の御世話になること」でもあり、罪悪感を伴うと訴える声も多い――

と実情を報告する。

取材の対象は八〇代が多いが、この年齢層の大正から昭和初年生まれの高齢者は、戦中・戦後のきびしい暮らしを自立してしのぎ、その後も自分のために貯蓄などせず、みんなが等しく豊かになるために努めてきた。そういう人びとの善意が歴史にまれな「九割中流社会」をつくったのではなかったか。

菊池さんの夫は工務店の主人として、働く人たちが豊かになることに配慮し、自らの老後のために預金を積むことなど考えていなかっただろう。そういう「みんなが等しく豊かに」を貫いてきた人びとの人生を、最後まで保てるような「高齢社会対策」を講じないでいて、「生活保護を」という配慮の浅い「社会保障」で対応するオカミは信用されていないのである。

戦争と戦禍を経験し、一日でも長く生きることの命の尊さを知る人びと。その願いを閉ざして、「もう生きたくない」と吐露せざるをえないような環境に置かれている。

――一生懸命に働き、一生懸命に生きてきた普通の人たちが報われない、それが今の日本の老後の現実なのだ――

というところに取材者の結論は行き着かざるをえない。

こういう社会を呼び寄せてしまった責任はだれにあるのか。その責任は重い。

＊「老後破産」と「下流老人」

一方、『下流老人』というタイトルは、筆者の造語だという。

筆者は、さいたま市で一二年間、生活困窮者の支援をしてきた三〇代のＮＰＯの運営者（ソーシャルワーカー）であり、年間三〇〇人ほどの生活困窮者からの相談を受けている。そのなかで多くの高齢者の困窮した惨状をみてきた。

「下流老人」というのは、「生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」と定義しているが、実感の裏打ちがある巧みな造語である。いいかえれば、国が定める「健康で文化的な最低限度の生活を送ることが困難な高齢者」である。

そして三つの「ない」が指標とされる。

収入が著しく少ない。十分な貯蓄がない。頼れる人間がいない。

つまりあらゆるセーフティネットを失った状態をいう。

上記の『老後破産』と同様の趣意で同じころに発刊されたが、両書ともベストセラーになっ

ている。上記書と違うところは、親世代だけの問題ではなく、「介護離職」などで子ども世代が共倒れすることや、少子化を加速させる（子どもがいなければ十数年間は下流にならずにすむ）といった次の世代への影響を指摘しているところにある。

「自分がこんな状態になるなんて思いもしなかった」

とつぶやくのを、筆者は相談にきた高齢者から異口同音に聞く。

老後の貧困は想定外の事態であり、立ち至った事由はもともと貯蓄がなかったり、思いのほか年金が少なかったり、親の介護で職を辞めたり、同居の子どもが病気（うつ病）だったり、自分が大病をしたり、といろいろ。事由は個人的にみえるが、社会のしくみの問題であり、全世代にかかわると問題を提起している。

「下流老人」は、姿を見せないようにして隠れているという。そしてとくに一定の年代より上の人は「オカミの世話になりたくない」という意識が根強くあると指摘する。筆者はそのような考えに到ってしまった過程に目を向け、生活保護を受けやすくすることが必要と訴える。

たしかに大正期から昭和戦前の生まれの人は「オカミの世話」を信用していない。戦争を起こし、自由を奪い、若者の命を奪い、戦禍の苦しみをもたらした。戦後もとくに「オカミの世話」を受けずにみんなして働いて豊かになった。その成果を、「一定の年代より下の人」は不安な将来の老後のために貯蓄することで守ろうとする。格差を認め、安心を専有しようとする人生を選んだ。

筆者は、現実の声を聞き、さまざまなケースを統計類を駆使して一般化し社会化することで、読者の納得をえることに苦心している。「一億総中流」社会がこのまま放置したままだと、いずれ「一億総下流」の時代がやってくると、危機感をもって受け止めている。

いずれにしても率直にいえば、こういう本は現役世代によって出されてはいけない本であり、売れてはいけない本である。いくら売れ、いくつ出されても、解決策は見えてこない。

二　高齢社会対策担当大臣に責任

意識やしくみを変える対策が延滞

「高齢社会対策」に関する事業の延滞で、「基本法」を制定した村山（富市）さんを責めるわけにいかない。いまも現役で元気に過ごしておられる高齢者の星、村山さんには、制定時の志を思い出していただければそれでいい。

橋本龍太郎内閣によってその実現への指針として「高齢社会対策大綱」が閣議決定されている。橋本さんにはその後も実現への志を見たのだったが、残念ながら早く世を去ってしまった。

それ以後の政治リーダーに責任はある。

二一世紀の「日本高齢社会」は、いうまでもなく、二〇世紀のアジアの奇跡といわれた平和で平等な経済大国「日本」をつくりあげた人びとが、一休みして、みずからの高齢期のための

新たなしくみを創出し、成熟・円熟期の人生を充足させることになる。
「基本法」も「大綱」も、双方とも当時の優れた構想力のある官僚と学者によって起草されたものであり、策定した人たちは新世紀のはじめにみずからが高齢者として「喜びの中で安心して暮らす」姿を想定していたに違いない。
が、さにあらず。
しかもその達成にむかっていないことも感じているはずである。
政治の側の責務として、国際的にみてもわが国の「高齢社会対策」はいいスタートをきったのだったが、いまや周回遅れか途中棄権といってもいいすぎではない状況にあるといえよう。
「高齢社会対策大綱」の策定の目的にはこうある。
「二一世紀初頭の本格的な高齢社会を目前に控え，国民の一人一人が長生きして良かったと実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を早急に築き上げていくためには、経済社会のシステムがこれにふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図る必要がある」
とある。さすが策定者である官僚は、このワンセンテンスの中にそのエキスを詰め込んでいる。しかし推進者は国民から選ばれてその役割を付託されている政治家であり、なかでも政治

リーダーである。

どの顔を思い浮かべても、この「大綱」の文章を読んで、「官僚の文章はごちゃごちゃしていてよくわからん」といって投げ出してしまったような気がするが。

読みもしなかったのかもしれないが。いずれにせよ、経済大国を成し遂げて、成熟・円熟期にある人びとに、「高齢社会」達成への要請をした政治リーダーを知らない。

＊事業延滞の責任者さがし

もう少し事業延滞の責任者さがしをつづけよう。

安倍首相は唐突に「基本法」から制定二〇年目にあたる二〇一五年九月に「一億総活躍」をいい出した。そしてご存じのように、一〇月の内閣改造で「加藤勝信・一億総活躍担当大臣」を登場させた。オールジャパンをいうのだから、当然のこと、知識も技術も資産も持っている高齢者層への参加を呼びかけるものと発言を待ったが、そういう趣旨の発言はしなかった。

延滞責任の末端か先端かにいる政治リーダーであることをご本人は意識していない。

任命を受けた加藤勝信担当大臣は、大急ぎで各省の担当官僚を集めて、霞が関からの視野にいる人材によって「国民会議」を発足させた。その手法にぬかりはないが、ただし国民の四人にひとりに達した高齢者（六五歳以上、約三四〇〇万人）が持つ潜在力の活用を要請するために、広い視野で高齢有識者を探した形跡が「一億総活躍国民会議メンバー」に見えない。

そのメンバーに、本誌にも登場していただいた何人かの方が代表として参加していないのがその証である。高齢世代の人の声が反映されなくては、オールジャパン・オールエイジズの議論にはならないのではないか。

歴史での裁断はまぬかれえない。

新世紀の一五年、高齢者が四人にひとりになる時期までの対策の延滞は、「九割中流」社会を達成した功労者である国民を、高齢期になって「下流老人」にするには十分であった。

「基本法」の趣意にそって、国会で衆議して「高齢社会グランドデザイン」を掲げて、国民の「高齢社会」意識を醸成しながら今世紀のはじめから着々と対策を講じていれば、「下流老人」現象は露呈しなくて済んだプロセスなのである。そうできなかったのは他の道を選んだということであり、それは政治リーダーである歴代総理の責任であり、直接的には歴代の「高齢社会対策担当大臣」の責任であることに疑いの余地はない。

もうひとり、都知事になったばかりだった石原慎太郎氏を加えたい。一九九九年一〇月一日の「国際高齢者の日」の東京での記念行事に出て、将来の高齢社会へ期待する「あいさつ」をしているのである。ご自身の人生に今もっとも関係する「高齢社会」形成への政治家としての責務も見直してほしいものだ。七四歳の小泉さんと八四歳に達した石原さんの「君子豹変」ぶりは見て聞きたいものである。

一九九六年以後、毎年の『高齢社会白書』の公刊を持ちまわり閣議ですませてきた担当大臣

はもちろんみな同罪である。

そしてその責任は今、誰にあるのか。

いうまでもなく「一億総活躍担当大臣」であり「高齢社会対策担当大臣」でもある加藤勝信担当大臣にある。

といわれて、加藤大臣ご本人すら実感がないだろうし、納得がいかないだろう。二〇年の延滞で、政界における責任感はそこまで希薄になっているのである。

消費税論議の最中であった二〇一二年九月に一一年ぶりに「高齢社会対策大綱」が、閣議決定（野田内閣）して改定された。高齢社会にかかわる財源である「消費税」とともにその実態にかかわる「大綱」の改定内容に気がついた政治家がどれほどいたのだろう。

「改定大綱」の重要な改定は「人生六五年」を二五年延伸させて「人生九〇年」への意識の醸成を国民に求めていること。と同時に、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野への「支え手の高齢者」としての参加を呼びかけていることにある。

何をどこまで参加したらいいのかは課題ごとにそれぞれだが、すべての高齢者に理解しておいてほしいことがある。

「人生九〇年」を前提にした上で、青少年（成長期）、中年（成長＋成熟期）、高年（成熟＋円熟期）の「三世代平等」の意識を醸成しつつ、具体的課題でオールジャパン、オールエイジズ

社会をめざすこと。

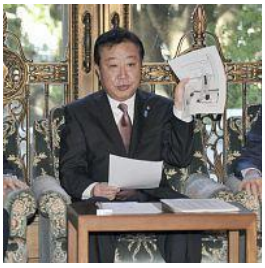
初代ゆえに二〇年を準備期として、高齢者が四人にひとりになった段階からの「日本高齢社会」形成にむかう道は閉ざされてはいない。成功事例としての「日本高齢社会」の創出は今ならまだ間に合うのである。本稿はここに、新世紀一五年の経緯をつぶさに見てきた立場からの一つの救済策を示そうとしているのである。

二〇一二年に「大綱」を改定

「基本法」の目的にむかって「大綱」の取り上げる諸事業を国民に周知し、実現しなかったのは政治家であるが、果たせなかったのは国民である。

国の対策の指針となる「高齢社会対策大綱」は五年刻みに見直され、その改定が二〇一二年九月におこなわれたが、自分の人生にかかわる重要な改定の内容なのに、高齢者のみなさんはおそらく知らないだろう。

一九九九年に「国際高齢者年」があった。二一世紀にはもはや世界規模での戦争が不可能になり平和のうちに世界規模での「高齢化」がすすむとして、国連が二〇世紀末に設定したものである。際立って急速に「高齢化」がすすむわが国では、ここを機会にして、新世紀にトップランナーとして迎える「高齢社会」の構想、国際的な視野での「高齢社会グランドデザイ



ン」を衆議して国際的に掲げるチャンスだったのである。

国としてはそれがなかった。高連協（高齢社会ＮＧＯ連携協議会）が独自に「高齢者憲章」を起草しているのが知られる程度。

二〇〇一年末に「対策大綱」は関係官僚と学者とによって見直しをしているが、その後も見直したはずの事業はいっこうに進まなかったのである。一方で世代交代をすすめて高齢政治家を排除し、チルドレンを呼招した小泉総理の責任は免れえない。

二〇一二年改定の「大綱」（野田内閣）にはなすべき事業として、「人生九〇年意識」の醸成や、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった分野ごとに具体的課題が記されている。有識者の検討会（清家篤座長）が提言をし、関係省庁が見直し、内閣官僚がまとめた「新大綱」を閣議決定した野田総理の責任も明らかだ。

「高齢者意識」に「人生六五年」から「人生九〇年」へと一足飛び二五年の延伸を生じていることから知れるように、歴代内閣が事業の継続性を軽視し、新世紀一五年の「高齢社会対策」の延滞（強くいえば政治不在）がつづいてきているのである。

安倍内閣は際立ってそう。

みなさんもお気づきのように、安倍総理は女性と若者の「成長力」とくに女性に期待して、ことあるごとに参加を呼びかけているが、「成熟力＋円熟力」を持つ高齢者には言及がない。新世紀歴代の政治リーダーは、「高齢者」は「支えが必要な人」という固定観念を持っており、

「社会参加」に意欲と能力のある人びとに「支え手」に回ってくれるよう意識改革を図ることもなく、「大綱」が列挙している分野での対策を講じることもなかったのである。

高齢者への敬愛の思いが薄れていくと感じている高齢者が多いのは、こういった社会対策の延滞によるところが大きいのである。

＊知らされない高齢者

高齢者のみなさんは知らなすぎる。

正確にいえば知らされなさすぎるのだ。

あの大震災があった二〇一一年の一〇月に、民主党政権の蓮舫担当大臣（蓮舫議員が「少子化」と併任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていただろうか）のもとで、有識者検討会（座長清家篤慶応義塾大学長）を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇一二年九月七日（このときは中川正春担当大臣）に閣議決定をした。内閣はもちろん民主党の野田（佳彦）内閣である。二〇〇一年の小泉（純一郎）内閣以来の一一年ぶりの「対策大綱」再見直しであった。

残念なことだが、多くの国会議員が高齢社会対策の担当大臣がだれかを知らず、内閣府に専任官僚がいない（併任ばかり）というのが現状。「対策大綱」を練り上げ、改定した有識者と内閣官僚には重要性を増していく課題と分かっていても、肝心の政治リーダーにその認識がなか

ったことの証をここにも見るのである。

今回も一一年ぶりに内閣府で「対策大綱」の改定を検討しているというのに、衆参両院議員は何をしていたか。日々、まことに熱心に「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会の具体的なありようについては、ないといっていいほど関心が薄かったのである。

だからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎりで、内容については多くの国民の知るところとならなかった。無理もないことだが、若い厚労省クラブの現役記者は、「高齢社会対策」については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していないからだ。

歴代の「対策担当大臣」への要請

準備期であったこの二〇年の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度版は小渕優子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣、二四年版は小宮山洋子大臣、二五年版・二六年版は森まさこ大臣、二七年が有村治子大臣が閣議決定時での担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせて担当する人選であり兼任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られる。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいた。いくら兼任とはいえ、そのことを議員どころ

か閣僚どころか本人すら知らなかったのではないか、と思われるほどなのである。

参考までだが、九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員である。中川議員が「高齢社会対策大綱」改定時の担当大臣であった。

時節がらその重要性を知っていれば、少時とはいえ内閣改造時に兼任で担当となった岡田副総理（当時）は、おそらくそれ相応の対策をとったことだろう。

これは記すのをためらうが、改定した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田（佳彦）総理でさえ、高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れているが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かう力になることには触れていない。五五歳の若き総理には高齢者の実人生には理解が及ばなかったようである。それは六〇歳の安倍総理にもいえることだが。

これはいったいどうしたことか。どうしたらいいのか。

過ぎ去ったことを責めているのではない。今でも現役の国会議員のみなさんなのだから、わが身を顧みて、「一億総活躍担当大臣」のもとで、超党派で衆議して「日本高齢社会」形成への「グランドデザイン」づくりをすすめてほしいものである。

これなら今からでも遅くない。

＊内閣府に専任の担当大臣を置く

担当大臣としてしごとも少なく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が出ない。「日本高齢社会」の形成は国際的・歴史的大事業なのに、今世紀にはいってからの歴代リーダーはその重要性を認知しないままできている。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当している。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいるが、兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い導線が内閣府内に整っているとはいえない。要するに内閣府内の主要な職務として扱われなくなって久しいのである。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになる。

遅れを取り戻すには、まず内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い導線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならない。「スポーツ庁」よりは「高齢社会庁」の設置が先なのである。世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を重視すべきときなのにもかかわらず、国会議員はなおその重要性に気づこうとしない。

全国津々浦々から三四〇〇万人の高齢者は、「衆口一詞」の声を合わせて、

「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

「日本長寿社会グランドデザインを掲げよう！」
と叫ぶ必要がある。
世界の高齢者が期待する先行高齢化国ニッポンの長寿社会形成への烽火を掲げるべき時である。時は切迫しているのである。

目　広がった亀裂・格差をどうする

犍陀多（カンダタ）の話

「カンダタって知ってるよね」と若い人に聞いたら、きっと「ドラゴンクエストの悪役キャラでしょ」と応じるだろう。
「その元ネタになった芥川龍之介の犍陀多（カンダタ）のほうなんだが」
といい添えれば、かつて教科書で読んだ『蜘蛛の糸』の主人公を思い出してくれるだろう。
大正七年（一九一八年）というからもう一〇〇年ほど前になるが、芥川龍之介が子ども向けの雑誌『赤い鳥』創刊号に書いた童話の主人公。お釈迦さまが出てくる話だから一〇〇年なんか昨日みたいなものだが、芥川はお釈迦さまがおいでになる極楽とその対極である地獄との間で、一筋の蜘蛛の糸にすがっている犍陀多を主人公にする童話を書いた。もちろん天上が極楽だから、蜘蛛の糸は極楽から地獄へと垂れてきたものだ。

本人は覚えていないのだが、悪党だった犍陀多がかつて一匹の蜘蛛を踏みつぶさずに助けてやったことがあって、そのことからお釈迦さまは仏界から一本の蜘蛛の糸を下ろして、地獄であえいでいた犍陀多を救ってやろうとなされたのである。上へいけば極楽へたどりつき、落ちればまた地獄という中間で犍陀多が下をみると、蜘蛛の糸にすがって蟻のように後から後から罪びとたちが昇ってくる。

極楽へつながるのは一筋の蜘蛛の糸である。

そんなにたくさんの人の重さに耐えられずに糸は切れてしまう。「自分だけはなんとか」と考えた犍陀多は、「下りろ、下りろ」とわめいた。と、そのときに糸は切れて、犍陀多は地獄へ落ちていった。悪党だった犍陀多なのだから、とっさに自分の下で糸を切ることくらい思いついたとしても不思議ではないのだが、そんなことをさせるいとまを与えずに、作家は犍陀多の上で糸を切ったのである。

じつは芥川の「蜘蛛の糸」の話には元ネタがあって、鈴木大拙が訳したポール・ケーラス著『カルマ（因果の小車）』から得ている。やはり仏陀に「この糸を便りて昇り来たれ」といわれて、犍陀多は極楽へむかう。が、後から後から糸にすがって昇ってくる人びとに気づいて「去れ去れ、この糸はわがものなり」と絶叫するところで糸が切れて地獄へ落ちていく。

地獄へ落ちていく犍陀多を見る鈴木大拙と芥川龍之介とが感じていたところは同じではないだろう。それを論じることもできるのだが、ここでは芥川のほうのモチーフに限って追ってみ

たい。それは芥川が原典にはない極楽の蓮の池の傍らを歩いているお釈迦さまを登場させ、そのようすを書いていることにも見えている。大拙はそんなことをしないし、できない。大拙が関心を持つのは犍陀多の心の動きだ。

芥川が極楽と地獄という対極を明確に示したのは、おそらくは当時、作家の眼の前で広がりつつあった「格差」を表現したかったからにちがいない。

そんなことに気づくこともなく、当時もその後も「蜘蛛の糸」を読んだ子どもたちは、率直に単純に「自分だけはなんとか」と考えてはいけないんだと思うことで作品のモチーフに納得してきた。が、複雑な人生を歩んでいるおとなたちの中には、これを読んでそうは思わなかった人もいただろう。

芥川の表現する極楽は日々を過ごすにはつまらなそうに思えたからだ。

極楽にいっても自分を理解してくれるような仲間はいないだろう。

それならたどる途中に他に何か別世界があるはずで、そこで下からくる連中に糸をくれてやって塗中下車してもいいと思っただろう。

そう思える人は常に少数であり、おおかたの二者択一の俗世の凡夫としては、「自分だけは」という芥川の犍陀多を素直に納得して、自分もまた地獄に落ちてもしかたがないと思ったかもしれない。ご葬儀での長いお経のあとの説法で、仏弟子の目犍連（もくけんれん）が餓鬼界にいる母親を助けにいった話など聞かされていたからだ。

＊また大震災に見舞われて

その後の大正一二（一九二三）年に起こった関東大震災は「天災」による地獄だった。さらにその後の日中戦争・太平洋戦争は「人禍」による地獄をもたらした。「天災」に遭遇した芥川はその後「唯ぼんやりした不安」に襲われて昭和二（一九二七）年に自死することになった。その後に起こった「人禍」がどこまで予見されていたかは知れないが、将来の生きづらい時代と人生を予見していたことは確かである。

「天災人禍」である関東大震災とそのあとの日中・太平洋戦争・・。

いま「３・１１」東日本大震災のあと、世に「格差」が広がるなかで、「唯ぼんやりした不安」に襲われている国民の存在。一〇〇年をすごしてそれがまた、わたしたちの眼前に再現しつつある現実である。

繰り返す歴史。

仮想敵国をつくって国民を誘導する。滅私応援はすでにプロ野球やサッカーやライブで培っている。おりしも平和を七〇年祈りつづけた明仁天皇が生前退位の希望を述べられる。それとともに終わる戦後の鎮魂の時代。

「自分だけはなんとか」と思って、極楽へゆくことのできない現代の犍陀多は、遠からずして地獄に落ちていくのを察知している。でもそれまでに間があるはず。

願っていた姿に向かわない世を、敬愛されることもなく、豊かでもなく、ひとり取り残される高齢女性。女性ではほぼ半分が（男性は四人にひとり）九〇歳までの長寿を、そんな時代の風潮のなかを生きる過酷な時代。

やれやれやっとという「六五歳」から先を、明日をも知れない日々を送りながら、「自分だけはなんとか」という思いで暮らすことになる定年退職者にとって罪な時代。

酷でもなく罪でもない穏当な人生を、だれもが送れるはずではなかったか。

「非を飾る」若者たち

若者たちと高齢者の間の亀裂を見てみよう。

七七歳の「喜寿」を迎えようとしている上田さんは近ごろ喜べない。

喜べない理由はふたつ。

世相として世の中が高齢者に関心を持たなくなったこと、そしてとくに若者たちがオモシロクナイ大人の話には耳を傾けなくなったこと。

上田さんは、若者の言動はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあるという。

「？　非を飾る」とはどういうものをいうのですか。

間を置きながら、とくに気になったものといって四つの若者のことばを並べた。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だってしてみたい」

「戦争の現場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」
「善意なんて何も生まない。悪意が行動のエネルギー源なんだ」
「毎日遊んでいるくせして、うるさいじいさんばあさんはいらない。遺産を残して早く死ね」
一回きりの人生だから不幸な体験もしてみたいという若者に幸せであることを願うことはできない。戦争を避けて平和を望むことも、善意から話すことも、そして先人として存在することすらできない。
いつの世も若者の「知」は時代を先回りして待つ。
そして自分の耳に逆らうような「諌をふせぐ」ために知性は使われる。
人間だれもが隠し持つ本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして、時代は転移するものなのか。
上田さんはそう考えて楽しめない。

＊「時代に関わらない」という高齢者

少年の日に自分が蒙った戦争中の惨禍や戦後の混乱。それを繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えること。それが無力であり無益であるとさえ思うようになった。
日ごろはるかにシビアな経験をしている子どもたちに、年寄りのことばはまどろっこしいのである。

「金輪際、わたしは関わりませんけれど」
と、間を置いてことばを継いだ。
上田さん。ちょっと待ってください。
たしかに上田さんがいうように、このところ高齢者は軽視・無視さらには蔑視までされていて、実人生でも「アベノミクス成果」とやらからなんの恩恵も受けていない。しかし四人にひとりにまで増えた高齢者が保持している知識・技術・資産など膨大な潜在力が残されています。これを発揮してつくる「成熟＋円熟社会」は、新次元の事業にはなりませんか？
「・・わたしにはもう一〇年は遅いような気がします」
まっ白くなり、薄くなった髪を撫であげながら、上田さんはそういって黙り込む。
つい先ごろ「安保法制」反対では国会前までゆき、安保世代として社会参加をしてきた上田さんのような人を呼び戻す方策を、本稿の中で練り上げられるかどうか。

ＩＴ化と「デジタル・デバイド」

時流と潮流。世相の動きをよくみると、たしかにこのふたつの大きなうねりが重なって新世紀の時代相をつくて流れている。
ひとつはアジア唯一の経済先進国として迎えている「グローバル化」の時流であり、もうひとつは先行国としての対応を求められている「高齢化」という潮流である。この時流と潮流の

ふたつの課題を持ち越して世紀をまたいだ日本だったが、この一〇年余りの際立った変容といえば、時流対応の「若年化」と「女性化」と「ＩＴ化」のほうだった。

「デジタル・デバイド」（情報格差）がいわれる。

ＩＴ機器のイノベーション（技術革新）に高齢者が追いつかないために生じる情報の差で、個人差はあっても若い世代の対応力を主とする新製品化によって生じている。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い孫娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて何もできない祖父を脇役とみるようになった。

すぐれた生活者であり高齢者である上田さんのような人でさえも、家庭内では孫娘から軽くあしらわれているのである。

激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。

それは身近なところでは、家庭内の日用品の「途上国産化」と、企業内の「非正規社員の増加」によって実感されている。わが国よりひと足もふた足も遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と付き合うためのいたしかたない「日本途上国化」なのである。

わが国の高齢者はこれはいつか来た道として理解して、アジアの民衆が同じような豊かさを共有するまでの時流として納得して対応している。

＊スマホ娘はＩＴオンチ親父を蔑視

「グローバリゼーション」（地球規模化）といわれれば、地球レベルには違いないが、前世紀末にはじまった超大国アメリカと途上諸国が中心の経済の「グローバル化」である。ソビエト崩壊後の東西ドイツ統合をはじめとする地域内の混乱の収拾に手間どった欧州諸国と異なって、わが国は静かに世紀末を経過した。しかしすでに途上国対応の経済はきしみながら新世紀へと舞台は回っていた。そして「ＢＲＩＣＳ」（ブラジル・ロシア・インド・中国、南アフリカ）をはじめとする途上諸国の台頭という時流にさらされることとなった。

それに覆われてしまったから、もう一方の国際的潮流である「高齢化」は波がしらさえ見えなくなってしまっている。見えないけれども新世紀の国際的課題として底流しており、日本の対応は先行国として各国に注目されているのである。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが、「途上国型の若年化社会」に出くわしたのだから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになった。

ここまでるる述べてきたように、政府の「高齢社会対策」の遅延が二〇年つづいており、対策を講じないうちに、さまざまな難題を引き受けざるをえなくなっているのである。

ほんとうは若年者・女性とともに、高齢者もまた日本社会で、シルバーのように渋く、プラチナのように不変に輝いている時期を迎えているはずであるが、そうなっていない。シルバーやプラチナどころか、スマホ娘には、粗大ごみほどの扱いさえ受けているのである。とくにＩ

Ｔ産業が発展段階で引き起こす情報格差は、個人間や世代間ばかりでなく、地域間や貧富間でも生じており、ここで論じるには問題の根は深い。

現役中年にはにぶい賃金上昇

現役中年と引退高年者の間で。

国家の「中堅官僚」は、国を安定して支えているのは国家財政と国家事業をあずかる「国家公務員」のわれわれであると当人が思い、そのつもりでしごとをしているからわかりやすい。

しかしもう一方で国を支えているのは、国の骨組みをつくって安定した経営をしている企業であり、その企業を支えて事業をこなしながら安定した家計を営んでいる「中堅社員」である。一人ひとりにその自覚があるかはともかく、業界の実態としても国民の総体としても「中堅」である人たちなのだ。

いま各企業内の「中堅社員」が、将来をめざして「よしやろう」とし、「ＩＴ青年」がそれに応じ、「女性」が新たに加わり、そして「高齢者」が知識と技能とで支えいるようでないとオールジャパンの骨組みとして安定した姿とはいえない。

金融緩和という「前払い政策」で、企業は潤ったが、「中堅社員」がしっかりとその恩恵を受けたかどうかが問題だが、そういう声を聞かない。

それでは「よしやろう」という意欲が湧くわけがない。金融緩和の後も「中堅社員」の側か

ら「よしやろう」ではなく、「もう我慢ができない」という不満に近い声すら挙がっている。こんなことで経済が上向くはずがないではないか。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員が減り、アルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じしごとをする。しごと増なのに実質賃金の目減りがつづく。企業の生き残りを託されて、先輩から引き継いだ職責を黙々と担ってきた中堅層の人びとの胸の奥に、将来への不安がつのる。経営者の自己保身の発言からは展望が見えない。高齢社員の萎える気分もわかる。同僚との間でも同業者との間でも親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなる。新入社員に帰属意識がうかがえない。

安定した気分を保とうとするのだが、それとは裏腹にいらだちに近い感情が自分にも社内にも強くなっていくのを感じる。企業の生き残りのために身を挺するのは「中堅社員」だが、しごとへの覇気が薄れる。退職社友には理解できないほどに職場環境は悪化しているのである。

先輩には申し訳ないが、社友への企業年金より現役の暮らしを優先せよという声すら挙がることになる。

異次元の「金融緩和」という前払い政策によって、企業や株主は潤ったが、新事業を企画して景気回復のために働くのは「中堅社員」である。

にもかかわらず「よしやろう」ではなく「もう我慢ができない」とは何としたことか。

こんなことでは設備投資に資金が動くはずがない。

どこかにしごとをしないで得をしている「事半功倍」の人がいて、しごとをしてもプラスにならない「事倍功半」の自分たちがいる。この不公平感が先に立つ。

それが身近にいる定年後の高齢者と重なる。不安定なしごとでも最低賃金でも働かねばならないのに、生活保護や年金で安定した暮らしをしている。

「ナマ保（生活保護）で家族二〇万だってさ」なんていう話まで耳にする。

「高齢者」は元気なのに毎日が日曜日でいったい何をしているんだという批判が聞こえてくる。

現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、ウオーキングをし、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

何より不公平なのは、個人資産として留保して手つかずという約一四〇〇兆円という「家計黒字」である。バブル以来、シコシコとため込んだ平均で約二二〇〇万円という貯蓄についてである。それをそっとしておいて「いまや年金暮らしです」という気楽さについてである。

自分の親を見ればそんな資産はないことを知ってはいるが、どこかに平均以上の貯蓄を「塩漬け」にしながら引きこもりの余生を送っている高齢者がいると思うだけで「中堅社員」の心は冷え込んで不満は溶けていかない。

時代の推移と連動しながら人も動くし株式や事業出資金にまわってネも動く欧米と異なって、日本では現金・預金のままで動いていない。いわゆる「たんす預金」による　安心感である。

先輩たちに対する功労者としての敬意とない混ぜになって「中堅社員」の胸の内を右往左往していたいらだちは、「高齢者資産」についてふたつの意見に集約されることになる。

まずは同じ「将来不安」をかかえながらの「資産」の差である。

同じ将来への不安をかかえているが、高齢者は「資産」を持ちながら年金で余生をおくる。一方、企業を支えて働いている「中堅社員」は、貯蓄する余裕もなく不安のまま日々を過ごす。

高齢者側の言い分は、この先どこまでか分からない長い老後生活の不安を解消するためには、底まで知れている資産を「塩づけ」といわれても抱えこんでおくしかない。

一人ひとりは小額でも、増えつづける高齢者とともに増えつづけて、それが総体として経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足を縛っているのではないかというのが、「中堅社員」側からの「高齢者資産塩づけ」批判である。

＊世代間に亀裂が広がる

国の財政をあずかる「現役官僚」の理解は少し違う。

冷ややかというか冷静である。

一四〇〇兆円といわれる「家計資産」は、超一〇〇〇兆円に達した財政赤字を補てんする意味での安定した黒字財源としては動かないほうがいい。やたらに動いて減少してしまっては困るからである。

やがてあと二〇年もすれば一過性のものとして、相続税とともに解消されることになる。ここはだれも声には出さないが、それは自分たち世代の高齢期の安定財源となっている。同世代の企業内の「中堅社員」にもそこはわかってほしいというのが、国を支える「中堅官僚」の戦略としての理解である。

この二〇年、安心して暮らせる高齢社会に対する国の構想「高齢社会グランドデザイン」が掲げられていて、具体的な事業として納得できれば、高齢者になる途上で出資・出費すべきものだったのだが、構想がないゆえに老後不安の支えとして積み重なってきたものである。

「使うべき時に使うべき所に使えなかった資産」として、「貯蓄過剰」といわれても高齢者なら実感として理解がいくことなのである。

高齢者側の言い分は、定年前のころは「グローバル化」対応とかいって若手にしごとを集中させ脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でなんとかやりぬいてくれないと困るではないか、となる。

企業を支えている「中堅社員」の側からはもうひとつ、年金財源の支払者として、「高齢者資産移譲」の要請が力を増すことになる。使わない高齢者から使い手へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかというもの。これは新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちが共有する持論でもある。

いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要因が、高齢者層の支援の欠如にあると

いうもの。使わないし使えないのなら、必要としている若手の実業に資金を回すべきだというものである。この要請は想定外の金融緩和があって、勢いはややおさまっているが。

先ごろ個人レベルでだが、「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非課税措置が決まった。そのときには「愛情口座」とかいわれて、若い母親たちの関心を呼んだ。高齢者がため込んだ貯蓄を孫のために動かそうという官僚の側からの「高齢者資産」ヒッペガシ政策である。

孫のために、なけなしの一枚の福沢諭吉幣を工面している立場からは、一五〇〇万円という高額は実感がないし、不愉快である。そんなことでは「高齢者資産」は逆に動かなくなる。

ところで「引きこもり」は、引退高齢者だけのものではない。この傾向は正社員にも広がっていて、即戦力を期待されて入社したものの、適性と将来に不安をつのらせた「新入社員ニート化」が少なからずあるという。先の藤谷さんの息子もその一人か。

そんな不安定状況に包囲されている「中堅社員」は、気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥ってしまう。これ以上すすむと企業の骨格が崩れてしまいかねないほどだ。

「高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲などできるものではない」

と、後輩の苦しい立場に同情しながらも、高齢者になって年金支給にありついたばかりの「団塊の世代」の人びとからは、後輩の甘えへの不快感を隠さない批判があがる。

世代間に亀裂が広がる。

これ以上に亀裂が広がらないために、中年世代に安心感を与えるためには、高齢者が資産や

知識や技術を活用して、次世代が高齢者になったときにも憩える場所やしくみをつくること。これは「高齢者資産」を減らすのではなく増やすことになる。

「自分がその木蔭で憩うことのない木を植える」（W・リップマン）

という後人を思う姿勢を高齢者みんなで示すことだ。

「中堅社員」のみなさんは、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいいと思う。得られる経済的な波及効果は将来にわたって大きいし、その成果はいずれ次世代のあなた方の資産となるのだから。

Ⅳ　高齢者間にみる較差

かつて功いまは罪の「急流勇退」

先ごろアニメ映画の総帥であったスタジオジブリの宮崎駿監督が引退表明をしたが、ああいう引退のしかたを「急流勇退」という。まだしごとができる現役のうちに惜しまれて引退する。プロ野球の松井秀樹にもそういうところがみられたが、なかなかできないことなのである。

かつては敬愛する先輩のそういう「いさぎよい進退」が、後輩に感動とともに活動の場を与え、将来への安心と励ましを与えてきた。企業や組織の「高齢者リストラ」が始まったころには、少々の優遇を受けながら、優れた経験そして人格をそなえた人びとが、会社や後輩のために定年を持たずに潔く職場を去っていった。後輩としてはだれもがそういう君子然として身を引いて「引きこ

もり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができるだろう。

＊「隠退」で知識・技術を持ち去る

進退に関して、

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」（『宋名臣言行録「司馬光」』から）

という評価がある。

志の高い人は出世を急がず潔く進退するが、志の小さい人はこれとは逆に動く。凡人はそうはいかないから、さしたるしごとがなくとも定年まで務める。そのうえありがたいことに、年金が始まる六五歳まで定年がゴムひものように延びてつながってくれたのである。企業の業績によるのではなく福祉対策としてである。

一方で「中堅社員」はといえば、しごとが増えているのに減収を余儀なくされている。

そこで、アフター５の街談巷議の場では、われわれが負担している年金を受け取りながら、高齢者の多くは「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしているのではないか、という不満が、ビールを呑みつつ吐き出される。定年待ちの高年社員のしごとなしの高給と退職金にも不満が及ぶ。

しかしこれも個人のせいというよりは時代の経緯のせいである。

引退後の「余生」があまりにも長すぎる。先輩を功労者として敬愛はしたいが、それは「余

生」が短く、高齢者が少なく、熟練期の仕事があったころのこと。いまや高給社員はしごとなしのまま過ごして退職金とともに消えていく。

それでは困るのである。早期退社して退職金と年金で何もしないで長生きするのは美談でもなんでもない。会社で培った能力を活かして延びた定年までの間に企業年金分くらいは稼いでから去ってほしいのである。しごとまみれの若手としては、しごとなしで四半世紀を「余生」として過ごす高齢者がうらやましいより忌々しい。そこから敬意なんか湧くわけがない。

ここでは典型的な引退事例として、六五歳をすごし終えた高齢者の三様の暮らしぶりを見てみよう。だれもが安泰どころか、それぞれに高齢期の課題をかかえているのである。

まずは「急流引退」をしたあと、「われ関わり知らず」をよしとして「引きこもり」の人生を送っている大島さんの暮らしぶりから。

「隠退ウーピーズ」として

大島さんは、名前に似合わず背が低いし、君子然としてあたりを払うような風采ではないが、聡明さだけは疑えない広い額に細い目で、とくに笑った顔が安心感を与える温和な人である。

超一流とはいえないがだれもが知っている並一流の企業を当時の六〇歳定年まであと二年を残して早期勇退してのち、「家庭人」（と大島さんはいう）に徹して一〇年余を静かに暮らしてきた。思えば一〇年は早かった。

「古希」を迎えて急に体力の衰えを実感してからは、これからは「老齢期」と率直に認めることにした。新聞社の調べでは七〇歳からを「お年寄り」と思う人が半数以上という。自分でもそう思う。男性の平均寿命である八〇歳までは一〇年あるが、あと一〇年とは思いたくない。一〇年はやや短い。平均だからとあいまいにせず、そこからの余命を加えて八五歳までとして、あれこれ楽しんで過ごせればという人生計算を立てている。そろそろからだのどこかにもとに戻らない症状（フレイル期）が残って健康寿命が終わる。そこから約一〇年が介護をうけながらの「余生」となる。

会社人間だったから地域に知り人はいないが、学友や同僚があちこちにいるし、それにつかず離れずに暮らす妻と娘の家族がいる。そして額に汗して旬の食材を得る「自営菜園」が日課になっている。住宅ローンがなく菜園ができる土地を残してくれた岳父に感謝している。典型的な「君子的引きこもり」の人である。

肝心の生活費はどうか。

細目までは知れないが、公的・私的（企業）年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕（これが思いのほか費用がかかる）、そしてふたりのささやかな葬儀費用まで含めて、「生涯準備金」（預金と国債・株式が半々）はいままでのところ崩していない。それでも小遣いは月八万円以上。この以上というところに余裕がある。ありえたかもしれない他の暮らし方と比較して、い

まの「家庭人」としての暮らしに不服も不安もない。

ありがたいことにデフレで目減りしつづけていた資産が、金融緩和の株高で、老後の安定した豊かな暮らしを支える安全圏という四〇〇〇万円（高齢者の一六％という）に補充をえた。

正直にいえば、健康に不安はなくはないが、二〇一四年六月、一一六歳で亡くなった世界一の長寿男性であった木村次郎右衛門さんが、郵便局員をつとめて退職した後は九〇歳まで農業をして長寿だったことから、「農作業ができる間は」と専念することにしている。

平均余命は、七〇歳の男性なら一五・一なので八五歳、同年齢の妻は一九・五なので八九歳。お互いに健康に留意しているから、さらに男性の自分は八五歳での余命五・九を加えて九一歳、妻は五・八を加えて九五歳まで行ければと思っている。

「自分はムリかもしれないが、同い年の妻の方はクリアできる」

と予感している。だからいっしょに終末という希望は持っていない。申し訳ないが、五、六年ほどの期間は妻の介護に期待している。

＊「一陽来福」型の高齢者層

岳父（妻の父）同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはない。囲碁、釣り、ゴルフなどの趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事会でも、学友や同僚から声がかかれば可能なかぎり積極的に参加もし、浪費もする。

同窓会の友人たちの名簿を見ると、死去がちらほら、半数近くに有訴の記載がある。だれそれの認知症や医療・介護の話を耳にすると、ドック検査による健康状態も良好な自分が、めぐまれたひとりに思える。

国の経済や社会に関しては、下降へむかう時期にあると感じているが、大島さんは「われ関わり知らず」と固く決めている。だから職場のことで後輩が知恵を借りにやってくるのにも、

「いまさら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」

と、冗談としてではなくいって態度を崩さない。

後輩からしごとに関する声がかからなくなり、七〇歳を過ぎて、みずからも体力の衰えを実感する日はさみしい。知人の思わぬ死に接すると、テレビも見ず、新聞も読まず、終日、気分の晴れないこともある。惜しいと思う知名人の訃報にもよく出会う。

独居を愉しむ「君子的引きこもり」の境地にはなお遠いことは自覚しているが、大島さんは自分では幸せな「隠退ウーピーズ」（豊かな高齢者層）だと思っている。

「ウーピーズ」などと勝手に自得したところで、父祖伝来の土地の一部を切り売りして、億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」とは違う。たかが「一園農家」にすぎないから、経済のデフレからの脱却によって頼みの資産が少しでも確保されるのは個人的には歓迎である。

大島さんは明日もまたいい日であるようにと一日をていねいに迎えて過ごす「一陽来復」型

の高齢者。だから御用学者と財務官僚がさまざまな手法で高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めたのが気にくわない。官僚のそんなやり口には、

「後人としてあるまじき行為！」

と不満顔が似合わない大島さんも不満を隠さない。といって、「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはないから、思いのほか早々とやってきた「高齢期じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めている。ひそかに自分は安全圏にいると信じている。

せめて大島さんくらいは生涯を安穏に過ごしてほしいのだが、このままの状況で推移するとすれば、自分は安全圏と考えている人が生涯を安穏に過ごしきれるかどうか。ましてや「現役六五年」をすごし終えて、平均的平凡をよしとして過ごしてきた高齢者の七〇％までが、将来もこのまま平安平凡に過ごしきれると感じているが、とてもそうとは言い切れない。

「ほどほどの赤字人生」が男の美学

鮎川さんは、このままだとかなりきびしい高齢期を送らざるをえないことになる。

父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」である。二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばで二代目経営者となった。だから「定年」という区切りはない。が、会社のほうに破産という結末がある。

父親が元気だった高度成長・繁栄期といわれた時期もやたら忙しかっただけ。とりわけ家が

豊かになったわけではなかった。周囲の人びとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのをみてきた。家族にも贅沢も禁じたから、社員の子をうらやましく思ったこともしばしばある。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の負い目と感じていたから、

「おまえは大学を出にゃいかん」

と口癖にいって、家業の手伝いを強いず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけた。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していたほどの人生を歩んでいないことを知ることとなったが。

「MADE IN JAPAN」の質の良い日本製品を底辺でささえる会社に誇りをもっていた父親と労苦をともにする実直な社員に囲まれて育ち、いま二代目として跡目を継いでいる鮎川さん。見回せば、わが国の戦後の復興期からいわゆる高度成長期（一九五五～七三年）のころに設立された中小企業では、鮎川さんのような跡継ぎ二世は決して少なくないはずである。

同じような経緯をもつ機械製造の子会社（親会社ではない。海外進出をして元気）から下請け品を求められれば、資金繰りをしては設備投資を重ねて製品を納めてきた。だから見方によっては重ねてきた設備投資の借入金を返済するために働いてきたともいえる。もちろん借入金も父から引き継いでいる。

そして迎えた世紀末の「列島総不況」。鮎川さんのような小さな事業所も見落とすことなく襲

った総不況の行く末を心配しながら、父親は前世紀の末に世を去った。
その後、一〇年余り。人を減らしながら景気回復を待ちつづけてきたが、下請け（孫請け）に徹して生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどの経緯からみて、もはや自力再生の手立てはないところにきた。かつてはそれほどの重さに思えなかった一〇〇〇万円ほどの借入金を返済する余力が出ない。負担が年々重くなる。

＊「先憂後楽」型の高齢者層

「生涯現役の跡継ぎ二世」の鮎川さんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チーム「Ｉ」も、若者が減って紅白戦が成り立たなくなった。
「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするもんだ」
というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだ鮎川さんの負け惜しみ半分の人生哲学である。周辺の人より先に豊かになるなというのが父親の「先憂後楽」の考え方である。親父は先憂ばかり多くて後楽の少ない人生を愉しんで、日又一日を働きづめで亡くなった。
製造ノウハウを持つ親会社は、生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトした。その後、製品化までとなって、子会社はともかく孫請けは回復どころではなくなった。「ほどほどの赤字人生」ともいっていられない。朝起きるたびに

借金の重みが増し、倒産の日が刻一刻と近づいてくるのを感じている。
独自でのしごとにメドがたたず、下がりつづけた担保資産との見合いの末に、遠からず不良債権の処理対象として銀行から見放されるだろうが、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。金融緩和で潤った銀行は、いまは二の足を踏んでいるが、それほど長い猶予期間があるとも思えない。分かってはいるが、独自の道が開けない。
さしたるぜいたくもせずに、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、同じ境遇の「二世の星」（父の口ぐせ）たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしく地獄へでもどこへでもゆくつもり。父の時代にゼロから始まって自分の時代にゼロに終わる会社人生を、鮎川さんは納得している。それはそれで昭和時代の一隅を小さく輝いて生きた「二代企業」の終始のつけ方としてである。
惜しいかな、鮎川さん。
あなたは「先憂後楽」に徹してきたゆえに、「高齢社会」を多彩にし、豊かにする「高齢化用品」のメーカーでありながらユーザーであるという点でもまた後楽の人、つまり自力での新製品発想がゼロの人なのではないですか。
「鮎川さんの会社が蓄積した技術力は、この国の高齢者が必要とするような新製品には活かせないのですか」
「孫請けだったわが社ではむずかしいですね」

返答は明快である。

感性の高い高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために技術を活かして、自力製品で活路を開くことができないものか。そういう成功事例をあちこちで聞くのだが。

鮎川さんが父親以来の下請けの現場で、良質な製品の製造に努めて獲得した製品化の完璧主義を崩すことなく、なんとかして仲間と知恵を出し合って、中小企業の道を切り開いてほしいのだが。平成の三代目に「先憂後楽」の心意気を引き継げるような。

中小企業の熟練技術を駆使した「高齢化優良日用品」MADE IN JAPAN の再登場の時期がそこまできているように推察されるのである。

実直な高齢熟練技術者の技術と経験と意欲が「高齢化新製品」の製造に活かされる。

新たなスグレモノによって高齢者層の生活感性が満たされる。

同時多発で湧き上がるように内需がによる経済活力が生まれる。

「貯蓄ゼロ」へのカウントダウン

給与所得者は、二〇一三年四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行により、定年が六五歳まで延びた。そして金融緩和により内部留保に余裕ができた。とはいえ経営トップは新規起業に積極的には動かない。リスクを負わないこと、内部留保を確実にすることがいまの経営トップの心得であるためだ。だから退職を前にした高齢社員は、新たな事業を考えたり実行す

る場を与えられることなく、業務替えになったり収入減を余儀なくされながら、「定年待ちの日々」を送ることになる。

多くのサラリーマンは、なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、家族とどう暮らすかに思い悩むことになる。

横田さんはそのうちのひとり。

技術畠ひとすじに四〇年を会社勤めですごして、改正安定法にかからずに定年退職した。途中で転職など考えたこともなかったし、退職後も前職をいかして仕事があればと願ってきたが、この高齢者リストラ時代。「ハローワーク」（公共職業安定所）にいって登録はしてきたが、該当するしごとは見つからない。再就職をあきらめて失業率には計算されない潜在的求職者を思えば、失業率五％以下など信じられない。

横田さんは、少ない退職金から住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまった。ほとんど病気らしい病気はせず健康だったから、給料天引きの健康保険料の負担は感じなかったが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。

先行きの不安はすでに身辺に渦を巻いている。

横田さんは多数派である「戦々兢々」型の高齢者のひとりである。

「退職したあと、いや前から選択的支出の削減に努めています」

と横田さんはいう。旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らしてそれでも一度下がった生活用品の値上げや日常経費、医療費（薬代）や税負担とくに際立つ健康保険料など「基礎的支出」が確実に増えることから、将来の家計の先行きはとめどなくきびしい。だから技術は活かせなくとも赤字を埋める程度のしごとをしたい。五万円から八万円でいい。

「私企業でしたし、さして優れたことはしてこなかったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもりの自分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」

と横田さんは国の施策を楽観的に理解している。

＊「戦々兢々」型の高齢者像

長生きをすればいつかまたわが家に「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうと横田さんはまだ楽観的に思っている。

まずは財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。実施された「消費税増税」。長年つれそってきた妻の持病とそれにちなむボランティア活動への出費。いつわが身に降りかかるかしれない「医療費」の自己負担。今回は金融緩和で回避されたが、企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもたちへの支援出費・・。

はじめから「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だ

から、長生きなどしなくとも必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。
「貯蓄ゼロの日」へのカウントダウンは、すでに始まっている。「薄氷を履む」ような日々がこれから長くどこまでも続くことになる。
通信機器の優れた技術者であり、つい最近まで会社の主力製品のひとつになっていた機器の共同発案者。といって横田さんは、社員が発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思ってきた。青色発光ダイオード（ＬＥＤ）で企業から三億円を得、ノーベル物理学賞を得た中村修二さんは天才で特別な人だからいいが。自分がかつて会社から受け取った企画賞が三万円であったことに不服はない。それも次の日には歓送迎会用の部会費になったことを当然と思っている。
「将来への希望はしごと現場の活力にある」
と技術者であった経験から横田さんは確信している。
自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったが、ＮＨＫの人気シリーズだった「プロジェクトＸ・挑戦者たち」で、仲間と工夫を重ねて事業に貢献した人びと、ヘルメット姿が似合う人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみだった。だれもが成果を自分のものとせず、みんなの協力の結果だという技術者たちがこの国の骨格を支えているという信念に今も変わりはない。
番組が終了してずいぶん経つ。というのに、横田さんの胸の奥に刻まれたように、気がつくといまも、中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節、
「♪つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」

が体の中を繰り返し流れている。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじっとこらえていた技術者たちの顔・顔・顔はいまも忘れられない。

▼　大正生まれの人びとへのオマージュ（賛辞）

かあさんは許さない

青木志げさんは、関東大震災があった大正一二年（一九二三年）一二月の生まれ。

「卒寿九〇歳」をむかえた年の終戦の日に選ばれて、長女に連れ添ってもらい、地下鉄に乗り、九段下から坂を登って、しっかり歩いて日本武道館での「全国戦没者追悼式」に参加した。

先の戦争で次兄と夫を失った青木さんには、毎年聞いてきた天皇陛下のおことば、「ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い・・」には心に沁みる実感があったという。

次兄と夫のふたりは英霊として靖国神社に祀られているが、しかしＡ級戦犯を同時に祀っている靖国神社へは青木さんは参詣しない。昭和天皇と同じ立場に納得がいくからだ。

あの戦争は軍人政治家のだれかが責任をとらねばと思っている。生命を生み育てる側からの告発としても。

国際的にはそれが当然の責務であり、すべてが英霊という日本的理解は外国では通用しない。

父が次兄の戦死を男性の論理として許容したとき、

「かあさんは許さない」

と、母は志げさんに聞こえて父には聞こえない声ではっきりといった。声の震えをおぼえている。

長兄は関東大震災の日に小学校へいったまま行方知れずになった。二人の子を「天災人禍」によって失うことになった両親が晩年に保っていたとよく似た感情にいま自分が立ち合っているのではないかと青木さんは感じている。

戦後は恒久平和ではなく「戦前のはじまり」として注意深く見守っていた。遠い先で別の母から子の生命を奪い取るシーンが見えているかのように。

進み出したら決して引き戻せない「戦争という惨禍へのプロセス」を、この国の男たちはまたたどることになる気配。いつの日にか唐突に起きる戦争へとむかう重い振り子。

「歴史は学ばない者によって繰り返し、学んだ者によって繰り返す」

高校の歴史教師だった父から何度も繰り返し聞いたことばである。青木さんは父のあとを追うようにして、高校の歴史教師になった。父の死後である。

今とよく似た世相があった。というより「今」が似せられるようとしている世相があった。

昭和のはじめのころのことである。多くは後で教師になってから知ったことだが、子どものころの記憶とも重なってよみがえる。

大震災からの復興（震災後の年数が青木さんの年齢）がつづくなかで、世界恐慌のあおりを

受けてそのあと不況に。失業が東京の街を覆い、閉塞感が街の隅々にわだかまる。
政党政治への失望が口々にいわれ、国家改造（昭和維新）へと青年たちが動く。中国大陸では関東軍が独断で「満州事変」を起こし、巷には熱狂型の世論が湧き議論がささくれ立つなかで、挙国一致の軍国化がすすみ、国際的孤立が拍手で迎えられる。
今と似たリフレ金融緩和（当時は財閥の救済）。情報の統制、売れるが勝ちのマスコミ、そしてエロ・グロ・ナンセンス。そういう父母たちの時代。そこに向かって折り返す「今」。
青木さんはそんな時期に生まれた四人の子どもの末っ子の長女として育った。両親は明るい将来を約束できなかっただろうが、暗い家庭ではなかったと記憶している。小さいころは「童謡」だったが、そのうち兄たちといっしょに「軍歌」を歌い、戦争ごっこに混じって遊んだりした。
子どもたち（小国民）の意識と暮らしの小さな振り子が、家庭（童謡）から国家（軍歌）へと振れていく時代。雪の二・二六事件。そして国家総動員へ。
空襲、疎開、竹やり訓練そして敗戦・・。
先の戦争の「敗戦と惨禍」のかけがえのない代償として得た「平和」の時期を一日又一日、一年又一年、必死にすごしてきて七〇年、今、次の戦争への予兆を感じるという青木さん。
現役である六五歳以下の国民は、戦火を知らない。平和を当然の情景としてきたから感じていないという。いつかと同じ道をたどるように思える。

＊「亜流歴史劇」再演プロローグ

衣装を替えた登場人物たちによって「歴史悲劇」の再演ということになるのではないか。

いままさに日本発の恐慌すらありうる経済不安。マイナス金利。下流一〇〇〇万家計への三万円ずつのお恵み。不況と閉塞感、財政難、デフレ脱却のための想定外の金融緩和による格差の拡大。軍国化と国防軍礼賛。

「尖閣」「竹島」「北方四島」の隣国三国との領土問題と国際的紛争の気配。そして発言のレベルから「歴史から学ぶ」想像力が感じられない政治リーダー。拙速の「特定秘密保護法」の成立や「集団的自衛権」の閣議決定。ペーパーからデジタルへのマスコミ情報の混乱、軍国化に抗する言論への圧迫。絶叫型の世論、大衆受けする映像（テレビ番組）、エロ・・ナンセンス。

両親が直面していたとよく似たシーンに立ち合っているのではないか。

一つひとつのことよりも世相としてのありようの類似性。

いずれはだれも回避する力を持ちえなくなって、不幸な結末を負うことになるのは、いままだいない、何も知らない将来の子どもたち。

青木さんが父親から学んだ「歴史から正しく学ぶ」というのは、国際的に孤立（とくに近隣諸国）しないこと、国防を国防軍に頼らない意識の醸成、冷静な世論をつくること、そして何よりも国民の中に格差をつくらないことだという。

現在の世相の方向はそのどれにも反していて、歴史から正しく学んでいないという。それで

も安倍総理は内閣支持率をせり上げている。野党は崩壊し、翼賛型の一党政治になっている。

青木さんは、右のようなことを友人の佐藤さんと長女と熱心に話して、

「でも、かあさんは許さない」

遠い日に母から聞いたことばを傍らの長女に言い聞かせるようにいって、間をおいた。

友人の佐藤さんは、

「人生に二度も放り出されたのよ、わたし」

という話をした。日本政府の政策不在によって、一度は子どものころ、大陸の荒野で「みずから生きよ」として放り出され、二度目は介護も受けずにつづく一人暮らし。「みずから生きよ」として放り出されている。

「でもいいのよ、わたしも青木さんも慰めてくれる大好きな歌がたくさんある」

青木さんと佐藤さんを慰め支えているのは、将来が安心できる国の政策ではなく、小学校のころの優しい「如座春風」というべき先生から教わった童謡なのである。

自治体がエンディング・ノートを配布したり、親の家の片づけのノウハウを週刊誌の若手記者が記事にしたりするのは、高齢者の実人生を損なうことだと佐藤さんはいう。

青木さんが「有征無戦」（征有れども戦うことなし）についていう。

戦場へ兵を送っても双方に犠牲者が出ないように作戦をおこなうことが大義によって立つ討伐であり、戦闘をおこなわなくとも制圧して勝利を得ることができるというのが派兵の前提に

ある。中国の皇帝は「有征無戦」を旨として、臣下からの上書を受けて正義の兵を送るのである。戦わずして勝つには、兵士もまた和平を願う「有志之士」でなければならない。

天皇の平和主義のお立場では、兵を送る場合には常に「有征無戦」を前提にして裁下されたのだ、と青木さんはいう。だから天皇に責任はないという。青木さんは、「人を殺せと教えしや」と晶子の詩の一節を口ずさむ。

平和主義の「憲法」を持つ国からの軍隊として送られ、イラクの“戦場”で一兵も損うことなく任務を遂行した「日本国の自衛隊」。その優れて稀有な国際的イメージを変容させる「集団的自衛権」についての「閣議決定」がなされた。

お互いの国の若い命への救済と平和への手段を語らず、戦場での協力による抑止力ばかりをいう内閣答弁。「集団的自衛権」の行使で、いずれは武器使用を当然とする戦場への派兵がなし崩しにすすむことになる。

そんなことを佐藤さんと長女に話してから、

「でも、かあさんは許さない」

今度は自分に言い聞かせるように青木さんはきっぱりといった。

「良妻賢母」に育てられて

日本では「良妻賢母」がふつうだが、中国では「賢妻良母」という。

これは語順の違いというばかりでなく、両国の女性観や近代の女性の果たした役割の違いがこめられている四字熟語なのである。日本の場合は、明治維新のあと、西洋留学から帰った啓蒙家が女子教育の指針とした。「富国強兵」で働く男子を支えて内助に努めて「良妻」となり、子女を薫育して「賢母」となるという目標が定着した。初代の文部大臣森有礼は、「良妻賢母教育」こそ国是とすべきとまでいっている。

中国の場合は日本に留学した康有為や梁啓超が「賢母良妻」教育として移入したのだが定着しなかった。生涯名を変えず、男女がともに家を出て働き、ともに子育てをし、平等の社会的役割を果たした革命中国では、毛主席が「女性は天の半分を支える」（婦女能頂半辺天）といって女性の活躍をうながしたように、自立意識を持つ「賢妻」でありのちに「良母」となることが志向された。

語順は違っても両国ともに近代化のために「賢良な妻と母」を必要としたことは確かである。

＊大正生まれの母たちの人生

日本の男性は「忠君愛国」で育てられ、女性は「良妻賢母」に育てられ、男性は外地の戦場に赴き、女性は銃後を守った。

青木さんは次兄を失い、夫を失い、家を失った末に与えられた「平和」の中で、新たな希望を託して子育てをし、戦争をしない国を支えてきた。

育ててくれた亡き父母の恩を思う「哀哀父母」（哀哀たる父母、『詩経「小雅」』）ということ

ばが言い継がれてきた。みずからが労苦を知るころには父母はすでにいなかったからである。

ところがいま史上にまれな長寿時代。一人暮らしの女性の多くは、戦後の「平和」と「家族」を守ってくれた大正生まれの母たちである。生きているうちに親孝行が可能となった。

そこで「哀哀父母」ではなく「愛愛父母」ということになる。

生きているうちに恩返ししようという明快さが「愛愛」にある。哀哀から愛愛への展開もよく、語感もよく、何より世相をとらえてユニークである。日本発の現代四字熟語として用いたい。(『日経新聞「日経プラスワン」』二〇一四年一月)。

青木さんの長女は、「哀愛父母」の実行者である。

大正生まれの人びとへのオマージュ(賛辞)

大正生まれの人は今、平成二八年=二〇一六年には九一〜一〇五歳である。

先の大戦後ゼロから始まった人生だからゼロに帰ること、「孤独死」だっていとわない人びと。

大正(明治四五年=大正元年=一九一二年七月三〇日から大正一五年=昭和元年=一九二六年一二月二五日)生まれの人びとは、だれもがたいへんだった。男性も女性も。

男たちは「富国強兵」の下で育てられて、大陸や太平洋の戦場で戦い、終戦の昭和二〇年=一九四五年には二〇〜三四歳。生き残った男たちはこんどは「企業戦士」となって、死んだ者、傷ついた者の分まで働いた。

女性たちは「良妻賢母」に育てられて、銃後をまもり、戦後は子どもを育て、戦禍を胸深く閉ざして、身をもって平和を伝えてきた。かつて大陸で「自ら生きよ」と放り出され、いままた一人暮らしで「自ら生きよ」と二度も放り出された人もいる。力をつくして高度経済成長を成し遂げた昭和五〇年＝一九七五年には五〇～六四歳だった。

＊働きづめに働いた人の本音

そのころこんな歌が歌われた。

＊「大正生まれ」　小林朗　作詞　大野正雄　作曲

1番

♪大正生まれの俺達は　明治の親父に育てられ
忠君愛国そのままに　お国の為に働いて
みんなの為に死んでゆきゃ　日本男子の本懐と
覚悟は決めていた　なぁお前

2番

♪大正生まれの青春は　すべて戦争（いくさ）のただ中で
戦い毎の尖兵は　みな大正の俺達だ
終戦迎えたその時は　西に東に駆けまわり

苦しかったぞ　なぁ前

3番

♪大正生まれの俺達にゃ　再建日本の大仕事
政治、経済、教育と　ただがむしゃらに三十年
泣きも笑いも出つくして　やっと振り向きゃ乱れ足
まだまだやらなきゃ　なぁ前

4番

♪大正生まれの俺達は　五十、六十のよい男
子供もいまではパパになり　可愛いい孫も育ってる
それでもまだまだ若造だ　やらねばならぬことがある
休んじゃならぬぞ　なぁお前
しっかりやろうぜ　なぁお前

＊**「大正生れの歌（女性編）」**小林朗　作詞　大野正雄　作曲

1番

♪大正生れのわたし達　明治の母に育てられ
勤労奉仕はあたりまえ　国防婦人のたすきがけ

みんなの為にとがんばった
これぞ大和撫子と
覚悟を決めていた　ねぇあなた

2番

♪大正生れのわたし達　すべて戦争（いくさ）の青春で
恋も自由もないままに　銃後の守りまかされた
終戦迎えたその時は
たのみの伴侶は帰らずに
淋しかったわ　ねぇあなた

3番

♪大正生れのわたし達　再建日本の女房役
姑に仕え子育てと　ただがむしゃらに三十年
泣きも笑いも出つくして
やっと振り向きゃ白い髪
それでもやらなきゃ　ねぇあなた

4番

♪大正生れのわたし達　五十、六十のいい女

子供もよいパパママになり　可愛い孫のお守り役
いまでは嫁も強くなり
それでも引かれぬことがある
休んじゃならない　ねぇあなた
しっかりやりましょ　ねぇあなた

作詞者の小林朗（こばやし・あきら）さんは大正一四年の生まれ。二〇〇九年二月二日に亡くなった。「大正生れ」の歌は一九七六年に、「大正生れ（女性編）」は一九七九年にテイチクからレコードが出されている。

大正人の優れた業績を垣間見るために、少しだけ知名人をみてみよう。二ページほど紙幅をいただいて。赤色は平成二四年以降に他界した方、青色は現存の方である。

一九一二／元年　一／太田薫　二／双葉山定次、三／都留重人　四／新藤兼人　五／林伊佐緒　六／大友柳太朗　八／田島直人、福田恆存　九／成田知巳、松下正治　一二／木下恵介
一九一三／二年　一／荒正人、田中英光　二／中原淳一　三／尾上松緑（二代）、金田一春彦、三・二八篠田桃紅　五／森繁久弥　六／杉浦民平　九／家永三郎、丹下建三、豊田英二、吉田秀和　一〇／織田作之助
一九一四／三年　一／深沢七郎　三／丸山真男　五／前畑秀子　六／呉清源、霧島昇　七／木

下順二、笠置シヅ子、八／後藤田正晴、平岩外四　九／宇野重吉　一一／田村魚菜
一九一五／四年　一／むのたけじ　二／二葉あき子、水の江滝子、野間宏、小島信夫　三／濱谷浩　四／飛鳥田一雄　六／和歌森太郎　九／高川格　一一／春日野八千代　一二／三笠宮崇仁
一九一六／五年　一／福武哲彦、岡晴夫　三／有島一郎、五味川純平、斉藤茂太、岩谷時子　四／木下忠司　七／坂田道太、鶴岡一人　八／藤村富美男、五島昇　一〇／渡久地政信
一九一七／六年　一・一一日高六郎　一・一二秋山ちえ子、中村歌右衛門　二／沢村栄治、山田五十鈴、横山泰三　三／柴田錬三郎　四／島尾敏雄　七／浜口庫之助　一〇／角川源義
一九一八／七年　一／小暮実千代　二／池部良　三／中村真一郎、福永武彦、升田幸三　五／田中角栄、五・二七中曽根康弘　七／堀田善衛、近江俊郎　九／高橋圭三　一二／高峰三枝子
一九一九／八年　一／田端義夫　一・二三園田天光光　二やなせたかし　三／水上勉　六／岩波雄二郎　七／長洲一二　八／大野晋　九／加藤周一、九・二三／金子兜太　一一／佐治敬三
一九二〇／九年　一／長谷川町子　二／山口淑子　三／川上哲治　四／三船敏郎　五／森光子　五／安岡章太郎　六／秋山庄太郎、梅棹忠夫　七／竹内均　一二・二四阿川弘之
一九二一／一〇年　一／谷桃子、吉田正、盛田昭夫　二／庄野潤三、大松博文　三／貝谷八百子　四／犬養道子　七／藤原弘達　一〇・一三塩川正十郎　一二／山本七平、五味康祐
一九二二／一一年　一／橋川文三、二／三根山隆司、安川加寿子　三／山下清、和田寿郎　四／岩井章、三浦綾子　五・一五瀬戸内寂聴　六・一八D・キーン、六／鶴見俊輔　七／丹波哲

郎　八／石井好子　九／塚本邦雄、九・一二内海桂子　一〇／別所毅彦　一二／大下弘
一九二三／一二年　一／池波正太郎，三國連太郎　三／大山康晴、田村隆一、遠藤周作　四／
四・一九千宗室　五／五・二四鈴木清順　八／司馬遼太郎　一一／白井義男、一一・五佐藤愛子
一九二四／一三年　一／佐藤亮一　一・一六京極純一　二／石本美由紀、岡本喜八　二・一八
陳舜臣、越路吹雪、淡島千景　三／安部公房、三・三村山富市、三・二五京マチ子、高峰秀子、
高田好胤　四／團伊玖磨、吉行淳之介　六／芦野宏、六・二五丹阿彌谷津子　一〇／石橋政嗣
一一／山崎豊子、青田昇、一一・一四鈴木登紀子、吉本隆明　一二／鶴田浩二
一九二五／一四年　一／三島由紀夫　二／栃錦清隆、二・二七豊田章一郎　三・一二江崎玲於
奈、三・二〇梅原猛　五・一〇橋田寿賀子　六／藤沢秀行、加藤芳郎、六・二八大関早苗　七
／芥川也寸志、藤沢嵐子、七・二三色川大吉、八・二一篠原一、丸谷才一　九／杉下茂、辻邦
生　一〇／中村雄二郎、一〇・二〇野中広務、一一・六桂米朝
一九二六／一五年（～一二月二五日）一／一・八森英恵、いいだもも、一・一二三浦朱門　二
／榊莫山、松谷みよ子　三／萩原延寿、犬丸一郎、三・一五辻久子、三・二〇安野光雅、加古
里子　四／宮尾登美子　七／奥野健男　八／古田武彦　九・一／石井ふく子、星新一、今村昌
平、九・一九小柴昌俊　一一／根本陸夫、一一・三〇中根千枝

第六章　ニッポン発二一世紀オリジナル

1　「日本長寿社会」の達成へ

「長寿社会グランドデザイン」を掲げる

わが国は「高齢化先行国」グループでも際立つトップランナーだから、意識するとしないとにかかわらず、わが国の高齢者はいま、国際的な注目を受けながら、「高齢社会」の国際モデルを成し遂げるべくそのプロセスを体現している。

とはいうものの、意識しない人が圧倒的に多数であるのが現実。

人材もおり、活動もあるのだが、いかんせん風がない。

「順風満帆」とはいかず、いまなお「逆風行舟」といった感すらある。

逆風？　どこから吹いてくる？

むろん、永田町・霞が関あたりから巻いて吹いてくる。

巻いて吹くとは？

あのあたりでは、医療・介護・福祉・年金など、年々の予算配分に関係する「支えられる高齢者」だけが見えていて、予算に関係がなく自立して暮らしている元気な高齢者は「どうか、ご随意に」とばかりに放置されてきた。温存されてきたという善意の説もあるが。

だから元気な高齢者は病気になるまでは国とのかかわりがない。なのに高い健康保険料も介護保険料も、ほとんど視ていないのにＮＨＫ受信料だって払っている。

逆風というのは、何やかやと税が増え、年金が減る方向にあるからだ。

元気な高齢者が期待され、敬愛されていないのである。

だから急に国から元気な高齢者は「地域参加」をと要請されても、腰が重くなる。なんとか保持している知識・技術・人脈を活用するつもりになっても、どうしていいかが分からない。

これまで質素に暮らしてきて何もすることがなかったから（奇妙に聞こえるかもしれないが）貯金が増えるのだけを楽しみにしてきた。たまった貯蓄のうち、三分の一は子どものため、三分の一は自分のために残して、あとの三分の一なら地域生活圏（エイジング・イン・プレイス）の充実に出資（寄付ではない）してもいいと考えている殊勝な高齢者が多くはないがいる。

とにもかくにも元気で静かに暮らしているぶんには、公的施設や行事はなくても不自由しない。そこがコンビニやスーパーと大いに異なるところである。

いろいろと異なった知識や技術や経験をもつ高齢者が気ままに集って語り合える「居場所・通い場所」（地域文化圏）づくりも聞くほどには進まない。小公園やベンチのほかにそういう公的な場所があれば、立ち寄って話もできるし、ときには新しいモノ・サービスの提供や、ときには起業の相談だってありうるのだが、急になくとも特にそれで困ることもない

みんなの健康・介護の「地域包括ケアセンター」の名はよく聞く。就労の「シルバー人材セン

ター」のあっていい。知識・技能・スポーツの「生涯学習センター」（これはないところもある）があるのは知っていても、どこも自分に身近な存在にならないから近づかない。

大多数の高齢者がなぜそうなのか。

先方に「大綱」が列挙する国としての「高齢化対策」の到達目標が国民に見えていないからだ。すでに述べてきたことだか、まず衆参両院の国会で議論し、満場一致で決議した「長寿社会グランドデザイン」として掲げられていないのである。「大綱」の検討は官僚と学者に丸投げされているのである。

「長寿」はだれにとっても価値なのだから、「左右逢源」、どんなに議論が分かれても意見はまとまる。何もやらないから何もない。

それは少数の官僚と学者にゆだねることなく、政・官・学・産・民の衆知をあつめて構想し公開し実現せねばならないことだ。わかっているのだが、それを推進する役割の政治の側が動かない。

いまは兼任で、いるかいないかほどに存在感が乏しい「高齢社会対策担当大臣」を専任にし、骨太の部局を構成し、頼りがいのある専任の高齢社会（対策）担当大臣が内閣府にどっしりと座しているようでなければ始まらない。

なぜそうできないのか。

一九九八年に小渕内閣が「消費税」五％を導入したときに、「社会保障」のための完全目的

税にするために、宮澤大蔵大臣に談判し努力してくれた藤井（裕久、当時自由党）さんは、

「そういう構想は当時、政治リーダーにはなかった」

と率直に述懐しておられる。

ここでいう「高齢化政策」は、「高齢者対策（ケア）」のほうではなく、「高齢社会対策（参加）」であり、それゆえに政治リーダーの強いリーダーシップが求められるのである。

繰り返すが、そのリーダーシップによって衆参両院の国会で議論し、満場一致で議決した「長寿社会グランドデザイン」を掲げること。

国会は「高齢者対策」である「社会保障」の財源を確保するために毎年、労苦しているが、肝心の「高齢社会対策」の内容を衆議して構想を掲げることには関心を示さないのである。

＊各界の構想力を集めて

わが国は「高齢化先行国」ではあるのだが、「高齢化先進国」と言い切れないところがある。それは高齢者なら実感としてわかっていることだが、どうていねいに説明しても若手の政治家には高齢者の実人生が理解できないことから生じている。

改定「大綱」を閣議決定した野田首相（当時五五歳）でさえも、検討に入るに際してそう漏らしている。六〇歳に達した安倍首相にいたっては、経済を押し上げる力は、女性と若者の「成長力」だけと信じているから、高齢者の「成熟力」や「円熟力」が経済を押し上げる潜在力と

は思ってさえいない。「一億総活躍」といいながら、高齢者層に呼びかけないのは実態が見えていない証なのである。

これをどうしたらいいのか。

まずはそのことも含めて現状を正確に把握することである。

現状を「超高齢社会」などと認識しているかぎり新たな発想は出てこない。

これは政治家にも官僚にもＴＶ解説者にも見受ける。この手の人たちは、次には「社会保障」の負担増をいう。

すでに論じたことだが、もう一度整理すると、「高齢化率」で七％から一四％のころを「高齢化社会」と呼んでいる。現役の人びとからみて、増えてきた高齢者の存在を意識する時期であり、一四％から二一％までを「高齢社会」と呼ぶのは、この期間に高齢者が高齢者をお互いに意識して、高齢者のために必要なしくみを形成する時期にあたる。わが国では短かったが、一九九四年から二〇〇七年の一三年がこの時期にあたった。だから新世紀初頭には「高齢社会」対策を際立って進める時期だったのである。

そのあと二一％に達してからは「超高齢社会」ではなく、「本格的な高齢社会＝長寿社会」と理解すべきなのである。

二五％・四人にひとりを超えてボリュームを得た高齢者層は「高齢世代」として登場し、高齢者の問題ばかりではなく、子どもも若者も中年も高年者も加わって「世代交流」の輪を広げ

ながら、「三世代平等型」の社会の形成を指向することになる。三世代の代表が参加して、それぞれの人生についての考え方、情報を提供しあって、共有する「日本長寿社会」を構想することになる。

具体的なありようとしては、まず国会で衆議し、三世代の意見を聞いて決議して公開し、各地各界の意見を広く聴取した上で、だれもが理解し納得できる「長寿社会グランドデザイン」を掲げることになる。その達成にむけて国民みんなが努める。そのプロセスを国際発信することで、高齢途上国の参考になるような。

そういう重要な時期にあるのだが、現状をみるにそういう姿になっていないし、そういう方向へ向かおうともしていない。

「社会保障制度改革国民会議」（座長・清家篤慶応義塾大学塾長）が二〇一二年一一月から二〇一三年八月まで検討したのは、「医療・介護・福祉・年金・少子化」までであり、そのうち年金は結論を出していない。つまり本格的な「高齢社会構想」の議論には踏み込んでいないままなのである。

清家篤座長は、かけがえのないキーマンである。

若き学者として「高齢社会対策大綱」の制定に携わり、五年ごとの改定時には有識者会議の検討委員として参加しており、二〇一二年改定では有識者会議の座長をつとめており、経緯を熟知しておられる方である。

にもかかわらず、上記の「国民会議」では座長でもあり、多数意見を尊重する立場上からか、「高齢化問題」のうち「高齢社会対策」については特段の発言はされていない。

うしろから座長を支える高齢者層の力が弱いからでもあったろうが、課題は清家座長にとっても残されているのである。

一九九五年の制定以来、二〇年、制定時の「基本法」の目標には何の曇りもない。

四人に一人に達した高齢者がお互いに呼びかけ、清家さんを肩車に乗せて押し出せば、活動はそのままで動き出す。

福沢諭吉塾長は二〇世紀の日本を見通して語られた。清家塾長は二一世紀の世界を見通して立たねばならないところにおられる。

政治の側は急ぎ専任の担当大臣を立てて、国際的関心に応える「ニッポン長寿社会グランドデザイン」を新たな構想とすべく準備にはいらねばならない。「日本長寿社会」は「ニッポン発二一世紀オリジナル」の輝きに満ちた第一の宝石だからである。

今、ここでいくら力んで叫んでみても、声はむなしく澄んだ秋空に吸い込まれていくばかり。

「平和団塊」が長寿社会を体現

やや失礼とは知りながら、敗戦後の一九四七年～一九四九年に生まれた人びとを本稿でも「団塊の世代」と呼んでいる。

ご当人も含めてみんなが納得して用いることで流行語になったのだが、一九七六年に作家の堺屋太一さんが『団塊の世代』を書いて、そのボリュームゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名であり、ずいぶんと長命な流行語である。カタカナの「戦後ベビーブーマー」では実感においてとてもかなわない。いまでも約六五〇万人というボリュームを保持している。

しかし本稿が用いているのは「平和団塊の世代」としてである。

少数とはいえ「戦後の平和」を語るときには決して存在を無視してはいけない終戦翌年である一九四六年生まれの一四〇万人の人びとを含んでいる。さらに同じく二〇〇万人を越えて生まれた一九五〇年を合わせて、戦後の五年間で二一世紀を迎えたとき一〇〇〇万人（二〇〇〇年一〇月、一〇三七万人）だった。いまも九七〇万人（二〇一五年一〇月）を数える戦後ッ子の人びとを指している。

この七〇歳にかかろうとしているアクティブ・シニア「平和団塊」の人びとが、平和の証として「人生九〇年」をめざして創出する史上初の長寿社会が、「日本発二一世紀オリジナル」の「三世代平等社会」の核になる。

戦禍の残る社会にうまれて、両親の苦労をみて育ち、競って学び、高度成長を支え、住宅・車・家電企業を大きくし、国論を二分する騒動に戸惑い、精いっぱいに生きてきて、「戴白の老も干戈を睹（み）ず」（髪が白くなった長寿者になるまで戦争に出会わなかった）という平和・平等社会の体現者となった。史上にまれな幸運者集団なのである。

戦後七〇年、戦争の現場を知らずに「戴白の老」となった「平和団塊の世代」の人びとは、これからも当然のこととして「干戈を睹ず」の暮らしを保持していくだろう。想定されはじめた次の戦争との間の休止符の時期に生きているという観点には否定的でありつづけるであろう。それあるゆえの「平和団塊の世代」への世紀の期待である。

おそらく政治の側、政治リーダーに平和から戦争へという振り子意識が働くのは、歴史に学んでの選択にちがいない。歴史として経験したそれがいま勝利者として自説の側に国民を動かすことができる道筋だと信じられるからだ。

そういう歴史から生じた危険な芽を未萌のうちに摘んでしまうためには、「平和団塊」のみなさんが、「平和憲法」を護持して国際的目標として「制定一〇〇年」をめざすしかないのである。広い視野から検討をし、子子孫孫、誇りある民族として輝きつづけるための最良の路としてここに記すことになった。

ここは「平和団塊」に人びとばかりでなく、子育て中の母親も、未来に夢をもつ青年にも多くの賛同者をえて先にゆきたい。

＊「平和団塊」のみなさんの横顔

ひとりの人生にとっての「長寿」は人類にとっての普遍的な価値である。

したがって「高齢社会対策基本法」（一九九五年）前文の「長寿をすべての国民が喜びの中

で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」の形成は、個人にとっても地域にとっても国にとっても人類にとっても、納得のいく最良の文言である。

わが国は国際社会に向かって、ふたつの明かりを灯しつづけることになる。

ひとつは、「憲法九条」は戦争に対峙して平和を掲げる。

ひとつは、「高齢社会対策基本法」は命への平等を希求して社会改革を訴える。

ともに先人からの「心火」として後人へと繋いで灯しつづけるべき世紀の明かりである。

戦後の「平和」のもとで生まれて、ともに貧しい時期に育って、競って学んで、勤めて高度成長を支えて、新世紀には元気で健康なまま高齢者となった「平和団塊の世代」の人びとには、上記のふたつの目標が託されているのである。

国際的な要請を受けて、「人生九〇年時代」の日本にライトがあたっている。ライトを浴びて立つのは日本高齢者ニューフェース「平和団塊」のみなさんである。

その動向に本稿は注目し、敬意をもってその歴史的ステージを見守っている。

ここで「ニッポン発二一世紀オリジナル」の主役をつとめる「平和団塊」のみなさんの横顔を、ちょっとだが紹介しておきたい。勝手に選ばせていただいたが、どうかお恕しを願いたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一九四六（昭和二一）年生まれ・七〇歳に。

仙谷由人（政治家）　鳳蘭（俳優）　松本健一（作家）　宇崎竜童（歌手）　美川憲一（歌手）

北山修（歌手）　新藤宗幸（政治学）　柏木博（デザイン）　岡林信康（歌手）　堺正章（TVタレント）　坂東真理子（官僚）　田淵幸一（プロ野球）　菅直人（政治家）　秋山仁（数学教育）　藤森照信（建築史）　倍賞美津子（俳優）・・

一九四七（昭和二二）年生まれ・六九歳に。

橋本大二郎（政治家）　衣笠祥雄（野球評論）　ビートたけし（TVタレント）　星野仙一（プロ野球）　尾崎将司（プロゴルフ）　西郷輝彦（歌手）　鳩山由起夫（政治家）　津島佑子（作家）　千昌夫（歌手）　上原まり（琵琶奏者）　荒俣宏（作家）　中原誠（将棋棋士）　小田和正（歌手）　北方謙三（作家）　金井美恵子（作家）　西田敏行（俳優）　森進一（歌手）　池田理代子（漫画家）　布施明（歌手）・・

一九四八（昭和二三）年生まれ・六八歳に。

高橋三千綱（作家）　輪島大士（大相撲）　毛利衛（宇宙飛行士）　里中満智子（漫画家）　赤川次郎（作家）　五木ひろし（歌手）　赤松広隆（政治家）　江夏豊（プロ野球）　都倉俊一（作曲家）　沢田研二（歌手）　上野千鶴子（女性学）　井上陽水（歌手）　橋爪大三郎（社会学）　糸井重里（コピーライター）　由起さおり（歌手）　舛添要一（都知事）　谷村新司（歌手）　内田光子（ピアニスト）・・

一九四九（昭和二四）年生まれ・六七歳に。

村上春樹（作家）　鴨下一郎（政治家）　林望（国文学）　海江田万里（政治家）　高橋真梨

子（歌手）　平野博文（政治家）　武田鉄矢（歌手）　高橋伴明（映画監督）　萩尾望都（漫画家）　ガッツ石松（ボクシング）　矢沢栄吉（歌手）　佐藤陽子（バイオリニスト）　堀内孝雄（歌手）　松崎しげる（歌手）　森田健作（政治家）　テリー伊藤（演出家）・・

一九五〇（昭和二五）年生まれ・六六歳に。

残間里江子（プロデューサー）　舘ひろし（俳優）　和田アキ子（歌手）　坂東玉三郎（歌舞伎俳優）　東尾修（プロ野球）　中沢新一（宗教学者）　池上彰（ジャーナリスト）　姜尚中（政治学者）　八代亜紀（歌手）　辺見マリ（俳優）　塩崎恭久（政治家）　梅沢富士男（俳優）　岩合光昭（写真家）　綾小路きみまろ（漫談家）　神田正輝（俳優）・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

みんな等しく貧しかった戦後に育った子どものころの記憶を共有している。そこからそれぞれに個性的な人生をつくりあげ、熟成期をすごしている。

改めて記すが、この約九七〇万人の一人ひとりを、敗戦後のきびしい生活環境の中で育てたご両親の「平和へ思い」を想い起こして、本稿は新世紀の国際平和を体現する「平和団塊の世代」と呼んで注目してきた。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれも不満かもしれないが、あわせて「平和団塊の世代」のみなさんと呼ぶのをお許しねがいたい。

先進諸国の同世代の人びとととともに、「平和団塊の世代」（日本の戦後ッ子）が、この地で穏

やかに安心して後半生をすごせる社会を形成し、長寿を全うすること。それが前世紀の世界戦争の惨禍の記憶を胸の奥に秘めて、両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証にちがいないからである。それはまた次の世代へ持続可能な形で伝えねばならないだろう。

「平和団塊の世代」のみなさんが安心して後半生を過ごす社会がそのまま「ニッポン発二一世紀オリジナル」の象徴的な存在となる。

その前後にあって、それぞれにわが国の高齢者の一人ひとりが世紀をまたいで長寿を体現しつづける。こんな役回りはわき役であっても、願って求めても得られるものではない。

そして二一世紀半ばの二〇四七年、世界平和のシンボルでありつづけた「日本国憲法」は制定一〇〇年を迎える。その間、日本が持ちきたった誇るべき「世界平和の証」となる。一年又一年保持しつづけて「百寿」で迎える平和憲法は、国際社会からのスタンディング・オベイションを受けて大歓迎されることになるだろう。

「日本国憲法制定一〇〇周年」は日本主催の二一世紀の記念祝典である。

この世紀のドラマまで、あと三〇年余り。

「平和団塊」のみなさんは、亡き先輩たちの願いを胸に刻み、同輩とともに激励しあい、後輩の希いを引き連れて、世紀の証人として参加するために、「人生一〇〇年」をめざして歩むことになる。

世界トップで「三世代平等社会」を達成へ

「高齢化先行国」（まだ先進国とはいえない）として「日本長寿社会＝三世代平等社会」を形成する事業は、一九九五年に「高齢社会対策基本法」を制定してまずまずのスタートを切った。

それから二〇年、増えつづけた高齢者に対する対策は国際的にも評価されるレベルにある。これからは四人にひとりに達し、「平和団塊」の人びとが加わって、「高齢世代」が成立したところから、史上初の「長寿社会＝三世代平等社会」を創出するプロセスにはいることになる。

この事業は、高齢者みずからとともに、青少年・中年世代との交流を形成しながらの新しい社会のしくみづくりが重要になる。

したがって高齢者は、意識改革とともに社会参加が求められることになる。腰が重い人は前かがみになってこう考え直してはどうだろうか。

「日本高齢社会」形成の事業は、世界で初めての事業ゆえに、二〇年の準備期間を要した。「高齢化率」二一％をすぎて、四人にひとりの二五％のボリュームによる「高齢世代」の成立を待って、ここから「四人にひとり型高齢社会」を国家事業として本格的な実現にはいった。実際にそうだからだ。

戦後生まれの「平和団塊の世代」の約九七〇万人のアクティブ・シニアの加入を待って、という特別な事情もある。

今からならまだ国際的な成功事例をつくることは可能である。何もしないでこのまますごせ

ば、遠からず国際的な失敗事例となるだろう。そんなことがあってはならない。そんな不幸な事態の被害を受けるのは、この国でこれから高齢者になるみなさんなのだから。

行く先に、みなさんには奈落へ落ちる滝の音が聞こえないだろうか。あるいは渦潮の中心にむかって流れが早まるのがわからないろうか。失敗事例への例証はあれこれ露呈しはじめているのである。

この国で暮らす一人ひとりによる意識的自発的な活動によって成立する「日本長寿社会」の総体的な姿を推察するのは個人にはむずかしいが、「ニッポン長寿社会グランドデザイン」を掲げて達成にむかう過程の姿としては、いくつかの明白な目標の達成をもたらすだろう。

それが何かを見てみよう。

それは行く先明るい展望でなければ意味がない。

＊すべての世代が等しく参加

二〇二〇年（東京オリンピックの開催年）までの内輪な推測としてだが、三世代による意識的自発的な生産活動・消費活動・社会活動によって、次のようなことのうちのいくつかが達成にむかっているだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・「アベノミクス」効果が停滞する日本経済を「エイジノミクス」によって支えるであろう。

・「超一〇〇〇兆円」の財政赤字は長寿社会の推進により大幅な縮小ができるであろう。
・「超一四〇〇兆円」といわれる家計黒字は長寿社会の形成のための出資にむかうであろう。
・「アジアの先進国」として途上国が範とする日本でありつづけるであろう。
・「少子化」に歯止めをかけ、子育てで繁忙な女性の就業支援ができるであろう。
・「好事門を出でず、悪事千里を行く」という世相の悪化を防止できるであろう。
・「社会的弱者」の不安を払拭してだれもが安心して暮らせる社会をもたらすであろう。
・世界がモデル事例とする持続可能な「日本長寿社会」が姿をみせているであろう。
・数多くの国際機関を招請し、常態として各種の国際会議・イベントが行なわれるだろう。
・世界の人びとが「一生に一度は訪れたい国」としてやってくるだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

のちの歴史書は、誇らかにこう記すであろう。

「二一世紀初頭の日本は、先行国としてアジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献し、世界大戦ののちに平和の証として灯した『平和憲法』の明かりを一〇〇年護持して平和裏の長寿（高齢）社会を世界に先駆けて実現した。自助、互助、共助、公助のしくみを持つ地域社会のありようは、後進諸国にとってのモデル事例を提供し、宗教にも民族にも男女にも貧富にも、そして年齢にも差別をしない地域民主主義を達成した。二一世紀の日本は世界史に宝石のように輝く『一生に一度は訪れたい国』となった。」

国際的にも注目され納得されるような、「長寿社会＝三世代平等社会」の形成は、高齢者とすべての世代の参加によって達成され、後を追って高齢化を迎える途上国や後人にとって、「日本型モデル」となるべきものである。

二　あたたかな「地域生活圏」の形成

地域の歴史をつくる劇的な実感

ここに独創的な地図帳がある。

画家の中川恵司氏による『江戸東京重ね地図』（朝日新聞社刊）である。江戸時代の山手、下町の地図が切絵図ではなくしっかりとした実測地図に整えられていて、その古層の上に現代の東京が重なって見えるように印刷された地図帳である。地図出版の武揚堂の現場の苦労がしのばれる力作である。

その中の何枚かは江戸時代の海の上に、現代の東京がまるごと浮かんでいる。

この部分はまるごと近代の人びとがその地域で活動して新たに創った都市空間なのである。当たり前といえばそれまでだが、一つひとつの小さな事業活動や暮らしの集積が新しい歴史をつくることの劇的な実感がある。

現代の日本で暮らす約三四〇〇万人の高齢者（六五歳以上）は、これまでの歴史にまるごと

なかった存在である。史上に新たな成果として得た「人生九〇年」時代を体現している一人ひとりの高齢者が、これまでになかったモノ・居場所・しくみをこしらえながら暮らすことで達成されるのは、新しい歴史空間である。

行く先に「人生九〇年」の到達点を想定しながら、一人ひとりの高齢者が目前の日又一日を迎えて「地域生活圏」でていねいに過ごす。この「現役長生」型の高齢者が形成する成熟＋円熟した社会は、これまでの「人生六五年＝引退余生」型の高齢者による社会とは大いに異なった姿になるはずだ。

わが国はいまや「超高齢社会」にあるといわれるが、この呼称は適当でない。高齢化率二一％を超えたところからは、「本格的な高齢社会」あるいは「長寿社会」というべきであろう。本稿では高齢者が存在感を示すとともに、青少年＝成長期、中年＝成長＋成熟期そして高年＝成熟＋円熟期のすべての人が等しく意識してかかわることで成立する「三世代平等社会」であり、素直に「日本長寿社会」と呼んでいる。

＊高齢化率二一％からは「長寿社会」

すでに論じてきたが、繰り返しは高齢者の常道である。みなさんにはご自分の来し方・行く末と重ねて、次の「長寿社会」への国際基準のプロセスをしっかり確認しておいてほしい。

ご存じのように、「高齢化率」（国際基準で六五歳以上の人口比率）が高齢化の進み具合を

示し、その数値による国際比較が可能になっている。

「高齢化率」が七％から一四％までの段階を「高齢化社会」と呼ぶ。

高齢者の存在が目立ちはじめたとはいえ、まだちらほらの段階で、余生も長くはなく、後人は「時代をつくった功労者」として先人を敬愛し、介護・医療・福祉・年金などで慰労し支えることができた。わが国では一九七〇年から一九九四年までの二四年がその期間に当たった。一〇〇年を越えるフランスをはじめヨーロッパ諸国に比べるとはるかに短かったが、戦後にご苦労された先人は働きづめだった人生に納得して亡くなることができた時期である。

その後の「高齢化率」が一四％から二一％の間を「高齢社会」と呼ぶ。

この間は高齢者意識をもつ者同士による高齢期のための「しくみ」や「居場所」や「モノ・サービス」づくりを展開する段階で、将来に後人の手を煩わせないためにも、みずからの手で「高齢社会」の形成をすすめることになる。わが国では一九九四年から二〇〇七年までの一三年がこれに当たった。

すでに何度か指摘してきたように、わが国では一九九五年一一月に「高齢社会対策基本法」を制定し、「高齢社会」の形成をめざしたが、しかし世紀をまたいだこの期間になされるべきであった「高齢社会」形成にむけた対策、とくに国際的にも「高齢社会」を迎えているにもかかわらず、高齢者意識の醸成や社会参加や世代間交流、そして高齢者の要望を充足する「モノ・サービス」の創出などで成果をあげたとはいえなかったのである。すでに指摘したように、政

界の混乱期とかさなり、世代交代のあおりを受けて、「高齢社会対策」は延滞することになってしまっている。

そのあと高齢化率二一％を越えたところからを「超高齢社会」と呼んでいるが、「高齢化社会」「高齢社会」のあとは、本格的な高齢社会を迎えて新たな出発点として「長寿社会」と呼ぶべきである。国民みんなが参加して形成するオールエイジズの「長寿社会」にむかって、わが国が独自に保有している経済、文化、伝統のもとで独自のプロセスを案出しながら達成をめざすのは「長寿社会」であり、いまやその時期を迎えているのである。

「高齢者四人にひとり」（二五％）の段階をすぎて、世界最速で「高齢化率」二七・三％（二〇一六年九月一八日）となり、わが国の高齢者は三四六〇万人に達している。

ここからはとくに「三世代交流」が新たな課題となる。それは世界のどこにも先行例はなく、われわれの一歩が新たな時代を切り開いていくことになる。

さまざまな高齢社会構想

ここには国による、あるいは官民協働による、さらには民間による「地域長寿社会」形成のプロジェクトを紹介しよう。それぞれが現地のすべての世代の参加による「地域づくり」であり、高齢者による高齢者のための地域づくりの活動はその中心に据えて進められている。

＊「環境未来都市」「環境モデル都市」（内閣府）

世界的に進む都市化を見据え、持続可能な経済社会システムを実現する都市・地域づくりをめざす「環境未来都市」構想を内閣府が進めている。

「環境モデル都市」は、持続可能な低炭素社会の実現にむけ高い目標を掲げて先駆的な取組みにチャレンジする都市で、めざすべき低炭素社会の姿を具体的に示し、「環境未来都市」構想の基盤を支えている。

「環境未来都市」は、環境や高齢化など人類共通の課題に対応し、環境、社会、経済の三つの価値を創造することで「誰もが暮らしたいまち」「誰もが活力あるまち」の実現をめざす、先導的プロジェクトに取り組んでいる都市・地域である。

これらの「環境モデル都市」と「環境未来都市」を一体的に推進することで、「未来都市構想」の理想とする都市・地域の早期実現をめざしている。

「未来都市構想」は「環境未来都市」一一都市と「環境モデル都市」二三都市がセット。

「環境モデル都市」が二〇〇八年、「環境未来都市」が二〇一一年にスタートした。

「環境未来都市」には一一都市のうち六都市が被災地から、五都市が被災地以外から選ばれている。

「未来都市構想」のビジョンには柱が三つある。

第一が高齢化社会対応、二つ目が景観環境問題、三つ目がグリーン・イノベーション。みな

都市単位で進められている。内閣府地方創生推進室が担当している。

「環境未来都市」一一都市

・**北海道下川町**　集住化モデル　森林バイオマスとともに新たな地域モデルを構築

・**柏市**　トータルヘルスケア・ステーション　人とまちがともに成熟する未来へ

・**横浜市多摩プラーザ**　若い人と高齢者が交わって住む　一歩先を行く環境の中で市民が安心して暮らすために

・**富山市**　中心市街地活性化で高齢者優遇　公共交通で暮らせるコンパクトな街に

・**北九州市**　健康づくり生きがいづくり　公害を乗り越えた市民力が、アジアでの可能性をひらく

・**気仙広域被災地（大船渡市・陸前高田市・住田町）**　医療・介護・福祉の連携先進モデル　歴史的つながりを軸に二市一町で復興へ向かう

・**釜石市被災地**　被災地

・**宮城県岩沼市**　被災地　住民の思いを新しいまちの土台に

・**宮城県東松山市**　被災地　創造的な未来へ向かう東松島

・**福島県南相馬市**　被災地　希望の光輝く未来の故郷を創る

・**福島県新地町**　被災地

「環境モデル都市」二三都市

・**下川町**　人が輝く森林未来都市しもかわ
・**帯広市**　田園環境モデル都市・おびひろ
・**つくば市**　つくば環境スタイル“SMILE”～みんなの知恵とテクノロジーで笑顔になるまち
・**千代田区**　かけがえのない地球環境をみんなで守るまち　千代田
・**横浜市**　環境未来都市・横浜～ひと・もの・ことがつながり、うごき、時代に先駆ける価値を生み出す「みなと」～
・**新潟市**　「田園型環境都市にいがた」～地域が育む豊かな価値が循環するまち～
・**富山市**　コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築～ソーシャルキャピタルあふれる持続可能な付加価値創造都市をめざして～
・**飯田市**　市民参加による自然エネルギー導入、低炭素街づくり
・**御嵩町**　活力ある環境にやさしいまち「みたけ」～地域資源を活かした低炭素コミュニティの実現を目指して～
・**豊田市**　「ミライのフツー」を目指す、環境先進都市とよた
・**京都市**　DO YOU KYOTO？（環境にいいことしていますか？）を合言葉に、京都から世界へエコ活動を広げていきましょう！

・**堺市**　「快適な暮らし」と「まちの賑わい」が持続する低炭素都市「クールシティ・堺」の実現
・**尼崎市**　「ＥＣＯ未来都市あまがさき」へのチャレンジ
・**神戸市**　人に、自然に、地球に、未来に貢献する「環境貢献都市ＫＯＢＥ」―エネルギーのベストミックスとともに、みどりあふれる、生活を楽しむ都市をめざして―
・**西粟倉村**　限りある自然の恵みを大切な人と分かち合う
・**松山市**　環境と経済の両立を目指して「誇れる環境モデル都市まつやま」
・**梼原町**　木質バイオマス地域循環モデル事業
・**北九州市**　北九州市環境未来都市
・**水俣市**　人が行きかい、ぬくもりと活力ある～環境モデル都市みなまた～
・**宮古島市**　島嶼型低炭素社会システム「エコアイランド宮古島」
・**小国町**　地熱とバイオマスを活かした農林業タウン構想～ゼロカーボンのまちを目指して～
・**ニセコ町**　国際環境リゾート都市・ニセコスマートチャレンジ８６
・**生駒市**　日本一環境に優しく住みやすいまち「いこま」～市民・事業者・行政の“協創”で築く低炭素“循環”型住宅都市～

「環境未来都市」構想推進国際フォーラム

１　千代田区　平成二四年二月二一日（火）

２　下川町　平成二五年二月一六日（土）
３　北九州市　平成二五年一〇月一九日（土）
４　東松山市　平成二六年一二月六日（土）
５　国際フォーラムｉｎマレーシア　ジョホールバル市　平成二七年二月八日（日）

＊「高齢社会領域１５プロジェクト」（ＲＩＳＴＥＸ）

ＲＩＳＴＥＸ「高齢社会領域１５プロジェクト」は創見に満ちたプロジェクトである。

高齢社会領域について。研究開発領域の目標。

（１）高齢社会に関わる問題について、地域やコミュニティの現場の現状と問題を科学的根拠に基づき分析・把握・予測し、広く社会の関与者の協働による研究体制のもとに、フィールドにおける実践的研究を実施し、その解決に資する新しい成果（プロトタイプ）を創出します。

（２）高齢社会に関わる問題の解決に資する研究開発の新しい手法や、地域やコミュニティの現場の現状と問題を科学的に評価するための指標等を、学際的・職際的知見・手法に基づき体系化し提示するための成果を創出します。

（３）本領域の研究開発活動を、わが国における研究開発拠点の構築と関与者間のネットワーク形成につなげ、得られた様々な成果が、継続的な取り組みや、国内外の他地域へ展開されることの原動力となること、また多世代にわたり理解を広く促すことにつなげます。

地域やコミュニティの現場について。行政区、学区等に限らず、共通の目的、価値に基づいて活動する人々の集まりや、企業、コンソーシアム等の団体、関連する職種等のコミュニティに関わる現場も対象とします。

領域担当は秋山弘子東京大学高齢社会総合研究機構特任教授。

平成二二年に四、平成二三年に五、平成二四年に六の三年間で１５プロジェクトを採択。

１５プロジェクトについて

数字は採択平成年　敬称略

＊22　「新たな高齢者の健康特性に配慮した生活指標の開発」　鈴木隆雄

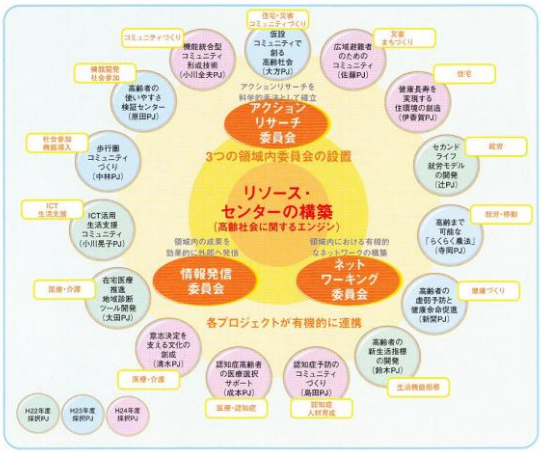
＊22　「在宅医療を推進する地域診断標準ツールの開発」　太田秀樹

＊22　「ＩＣＴを活用した生活支援型コミュニティづくり」　小川晃子

＊22　「セカンドライフの就労モデル開発研究」　辻哲夫

＊23　「社会資本の活性化を先導する歩行圏コミュニティづくり」　中林美奈子

＊23　「「仮設コミュニティ」で創る新しい高齢社会のデ



ザイン」　大方潤一郎

＊23　「高齢者の虚弱化を予防し健康余命を延伸する社会システムの開発」　新開庄二

＊23　「高齢者の営農を支える「らくらく農法」の開発」　寺岡伸悟

＊23　「高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発」　原田悦子

＊24　「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」　清水哲郎

＊24　「認知症高齢者の医療選択をサポートするシステムの開発」　成本迅

＊24　「認知症予防のためのコミュニティの創出と効果検証」　島田裕之

＊24　「健康長寿を実現する住まいとコミュニティの創造」　伊香賀俊治

＊24　「広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成」　佐藤滋

＊24　「二〇三〇年代をみすえた機能統合型コミュニティ形成技術」　小川全夫

＊「プラチナ大賞」（プラチナ構想ネットワーク）

プラチナ構想ネットワーク「プラチナ大賞」。未来のあるべき社会像として描く「プラチナ社会」は、成熟社会における成長の一つのモデルであり、日本が先進国として直面する課題の解決と、新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会です。

「プラチナ社会」の必要条件。

・エコロジーで（人間にとって快適な自然環境の再構築、環境との調和・共存）
・資源の心配がなく（エネルギー効率の向上、自然エネルギー活用、物質循環システムの構築）
・老若男女が全員参加し（生涯を通じた成長、社会参加の機会創造、健康で安心して加齢できる社会）
・心もモノも豊かで（文化・芸術に彩られた暮らし、飽和・停滞を打破する「限界を超えた成長」）
・雇用がある社会（イノベーションによる新産業の創出）

プラチナ大賞運営委員会（プラチナ構想ネットワーク　会長　小宮山宏）

審査委員会　敬称略

委員長　吉川弘之　副委員長　吉川洋　委員　秋山弘子　西條都夫　増田寛也　松永真理　箕輪幸人

第一回プラチナ大賞

平成二五年七月二五日（木）　最終審査発表会　都市センターホテル（東京都千代田区）

受賞団体　タイトル

大賞　総務大臣賞　海士町

「魅力ある学校づくり×持続可能な島づくり～島前高校魅力化プロジェクトの挑戦～」

優秀賞　上勝町
「ゼロ・ウェイスト政策から考えるサニテーションシステム」
優秀賞　富山市
「コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築　～ソーシャルキャピタルあふれる持続可能な付加価値創造都市を目指して～」
優秀賞　徳島県
「とくしまサテライトオフィスプロジェクト　～地域再生のための新たな戦略～」
特別賞　香川県
「かがわ遠隔医療ネットワーク「Ｋ－ＭＩＸ」を活かした遠隔・在宅医療の推進」
特別賞　雲南市
「小規模多機能自治による持続可能型“絆”社会の構築」
特別賞　柏市
「柏市における長寿社会のまちづくり」
プラチナ・イノベーション賞　東松島市
「東松島式震災ごみリサイクル（東松島方式震災がれき処理）」
プラチナ・イノベーション賞　最上町
「サスティナブルタウン最上～木質バイオマスエネルギーが地域産業を興す～」

（一二四件のエントリーから）

第二回プラチナ大賞

平成二六年七月二二日（火）　最終審査発表会　都市センターホテル（東京都千代田区）

受賞団体　タイトル

大賞　総務大臣賞　ヤマトホールディングス株式会社

「地域に密着したヤマト流ＣＳＶ『まごころ宅急便』」

大賞　経済産業大臣賞　北九州市

「都市間連携を通じたアジアのグリーンシティ創造」

優秀賞　自治医科大学

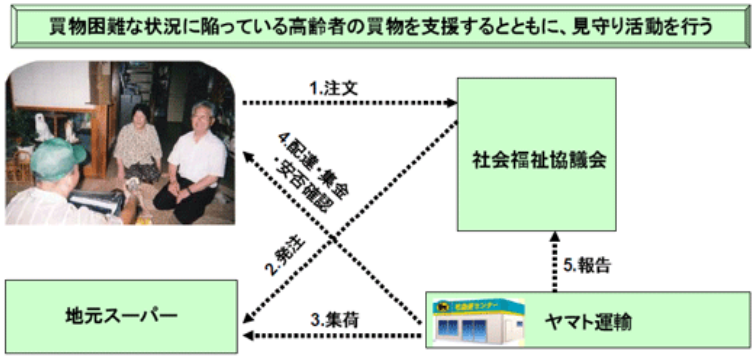
「スマートヘルスケアシティ　天草から始まる安心安全で豊かに成長する街づくり」

優秀賞　豊田市

「『自立×つながり』でシニア世代を地域の担い手に！『ミライのフツー』な自治モデル」

優秀賞　下市町

「『らくらく』で、プラス一〇年イキイキ元気！　働く老若男女が



笑顔で集う町　下市町」
審査委員特別賞　埼玉県
「世界に羽ばたくグローバル人材の育成」
審査委員特別賞　流山市
「流山市における真のコアコンピタンス経営～公共施設マネジメントにおける挑戦～」
審査委員特別賞　東日本旅客鉄道株式会社
「『ＣＯＴＯＮＩＯＲ（コトニア）吉祥寺』～子どもたちとシニア世代の交流～」
審査委員特別賞　横浜市、東京急行電鉄株式会社
「次世代郊外まちづくり～郊外住宅地の再生モデルの構築～」
審査委員特別賞　香川県
「世界をリードする香川の希少糖」
（五八件のエントリーから）

第三回プラチナ大賞

平成二七年一〇月二三日（金）　最終審査発表会　イイノホール（東京都千代田区）
受賞団体　タイトル
大賞　総務大臣賞　珠洲市（石川県）
「『能登半島最先端の過疎地域イノベーション』～真の大学連携が過疎地を変える！～」

大賞　経済産業大臣賞　積水ハウス株式会社
「『５本の樹』で命あふれる笑顔のまちを」
優秀賞　ニセコ町（北海道）
「『住民自ら考え行動する』住民自治によるまちづくり」
優秀賞　豊岡市（兵庫県）
「豊岡の挑戦　～小さな世界都市の実現に向けて～」
優秀賞　熊本県
「日本、そしてアジアをリードする認知症対策の推進！！」
審査委員特別賞　荒川区（東京都）
「子どもの居場所づくり事業
～子どもの未来を守る　荒川区の子どもの貧困・社会排除問題への取組～」
審査委員特別賞　株式会社イトーキ
「働きながらカラダとココロの健康づくり　workcise（ワークサイズ）」
審査委員特別賞　川崎市・横浜市（神奈川県）
「横浜市と川崎市との待機児童対策の連携協定」
審査委員特別賞　香川県
「かがわの里海づくり　～自然共生型の新しい社会とライフスタイルを目指して～」

審査委員特別賞　高知市（高知県）
「こうちこどもファンド　～子どもたちの『やってみたい！』を応援します～」

「高齢社会活動」の現場からの発言

すでにるる述べてきたが、高齢者（六五歳以上）の人的ボリュームが二五％を越えて、三四〇〇万人、四人にひとりまで達したいまこそ、高齢者が世代として「自立」して、新たな歴史をつくるときである。

そこで、ここでは将来構想をお持ちの次の方々の声に耳を傾けよう。

本来なら、政府の「一億総活躍国民会議」の中心にいて発言されるべき方々である。

安倍政権はオールジャパン「一億総活躍」をいいながら、全人口一億二七〇〇万人のうち三四〇〇万人の高齢者を除外しているのかといいたくなるところである。女性と若者に肩入れする安倍総理には、高齢者の円熟した人生のその先に、この国の新しい姿が示されていることに思い及ばない。

そこでここでは紙上セミナーの形で、敬愛すべき方々の発言の一端を、ご紹介することにしたい。みなさんそれぞれに確かな将来像をお持ちであり、ご存じの方々だから、静かに話されている声を聞いているうちに、将来の明るいこの国の姿が見えてくる。みなさん生来が明るいお人柄だからである。

まずは「高齢社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長の将来像から。

樋口さんの将来像は、歴史上で初代の「人生一〇〇年社会」である。

女性リードで「一〇〇歳社会」をめざす樋口さんご自身は、まだ「傘寿期」に到達したばかり。お仲間を引き連れてともに初代として「人生一〇〇年社会」の到達点を見据えている。

一〇年を差し引いて内閣府が「人生九〇年」としたのは、男性官僚たちの決断力不足ゆえであると評しながら。

「いまわたくしたちは、『人生一〇〇年社会』へという、人類の歴史のなかで初めての長寿を普遍的に獲得した社会を生きる。そしてそれにのっとった地域であろうと国であろうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、『なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか』と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」

「いままで公的な立場では『人生八〇年時代』までぐらいしかいっていなかったのが、『人生一〇〇年社会』にはちょっと値切られていますが、『人生九〇年時代』と、この『大綱』からいうようになりました。・・・われわれ女性にいわせれば『人生一〇〇年社会』へ、なのです。なんで九〇年で止まっているかというと、男の方の平均寿命が女より短いからなのです。こういうものへの感じ方も、そこに決定権を持つ男の人女の人の微妙な違いが現われているのではないか

と存じます。九〇年といわれると、女性は八六歳が平均寿命でしょ。で、平均寿命の八六歳になったとき、『人生九〇年社会』というと、ちょっと天井がつかえている。で、男の方は平均寿命がまだ七九歳だから、『九〇年社会』というと、『おおまだ二ケタある』。」（内閣府「高齢社会フォーラム　ｉｎ　東京」基調講演「シニアの社会参加で世代をつなぐ」二〇一三年七月。全文『月刊丈風』二〇一三年八月号）

次は「さわやか福祉財団」の堀田力会長の講演から。

二〇一四年七月二九日、内閣府主催の「高齢社会フォーラムｉｎ東京」での基調講演で、堀田さんの声は嗄れていた。

この夏は東奔西走といった忙しさで、全国の自治体をまわって「新地域支援構想」についての説明・講演をしておいでだったからである。

「支えられる高齢者」のための介護支援などの事業が、「地域医療・介護推進法」の成立（二〇一四年六月）とともに二〇一五年四月から地域自治体に移行した。地域住民のうちの元気な「支え手の高齢者」の自主参加が求められることになる。

堀田さんはいう。

「『共生の文化』というのは、どういうことか。中身に即して簡単にいえば、定年退職をして家に籠っている。あるいは外へ出ても、いく場所は居酒屋程度。あるいは家族で旅行はするけれどもご近所とのつきあいは一切なく、

通りで顔をあわせれば目礼するだけ。こういう暮らし方は『恥ずかしい』。そういうふうにみんなが感じるような風習、それを『共生の文化』というふうに呼びたいと思います」（内閣府「高齢社会フォーラムｉｎ東京」二〇一四年七月、基調講演「あたたかく助け合う地域社会へ」。全文『月刊丈風』二〇一四年八月号）

とくに「毎日が日曜日」といった暮らしに慣れ親しんでいる退職後の男性に、堀田さんは「月月火水木金金」といった忙しさで、「社会参加による共生の文化」を説いておられる。

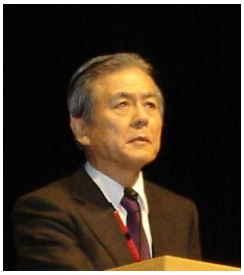
住んでいる地域に関心が薄く、自分の「介護・医療」のときだけは地域に頼るという内向的な暮らし方が「恥ずかしい」と感じるような生活意識を「共生の文化」と呼んで、元気な高齢者へ自主参加を呼び掛けている。

住み慣れた地域で元気な高齢者が「地域協議体」に参加して、介護者ばかりでなく、子どもでも障がい者でも困った人を助け合おうということで、自治体ごとに「生活支援コーディネーター」（地域支え合い推進員）が配置される。「助け合い」の中心になるその人を支えて、自治体とともに事業を支援しようというものである。

元東大学長の小宮山宏プラチナ構想ネットワーク会長は、「産業革命からプラチナ革命へ」の推移を説く。

わが国はすでに江戸時代には近代への準備を整え終えていたアジアで唯一の先進国であったが、いまや近代化の大量生産時代を終えて新しい価値ＱＯＬである「省エネ時代」にはいって

いる。「プラチナ社会」というのは、成熟社会における成長の一つのモデルであり、先進国として直面する課題の解決と新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会であると説明している。（ＲＩＳＴＥＸ　平成二五年度　コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン　第三回領域シンポジウム基調講演「日本「再創造」～活力ある長寿社会へのイノベーション～。全文『月刊丈風』二〇一四年三月号）



プラチナ構想ネットワークは、毎年、優れた事例を選考してプラチナ大賞・優秀賞ほかを贈呈して活動の推進につとめている。（二三九ページ）

第一回（平成二五年）の大賞・総理大臣賞は、海士町（島根県隠岐郡）の「魅力ある学校づくり×持続可能な島づくり～島前高校魅力化プロジェクトの挑戦」が、第二回（平成二六年）は、ヤマトホールディングス株式会社の「地域に密着したヤマト流ＣＳＶ『まごころ宅急便』」が、第三回（平成二八年）は、珠洲市（石川県）の「『能登半島最先端の過疎地域イノベーション』～真の大学連携が過疎地を変える！～」が選ばれている。

東京大学高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は、東大リーディング大学院での国際的人材育成や、「高齢社会検定試験」（高齢社会検定協会）による「高齢社会エキスパート」の認定、柏市でのまちづくりなど、多くの具体的な成果を積み上げておられる。

とくにＲＩＳＴＥＸ「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の領域総括として推進した全国一五プロジェクト（二三七ページ）は、各地にさまざまな課題をもうけて、課題解決型の事例を提供している。

高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立をこう提案しておられる。

「研究活動や事業をおこなっている組織もふくめて、ネットワークの拠点を構築すること。知見を集約して使いやすい『リソースセンター』をつくる。コミュニティの課題解決のための『リソースセンター』ですから、ここにくれば課題解決の具体的な方策、情報、支援がえられる。主なミッションとして、アーカイブの作成です。日本中の成果を一カ所に集める。長寿社会のまちづくりを志している自治体あるいは町民のコミュニティに啓発、情報の提供、できれば人を送って支援をする」（平成二五年度「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン　第３回領域シンポジウム」平成二六年二月一一日。全文『月刊丈風』二〇一四年三月号）

「ああいう国になりたいという国」がつくれるかを課題としておられる。

目　国際人としての多重性

国民性としての「ホスピタリティー」

二〇二〇年のオリンピック東京招致が決まって準備が進んでいるが、二〇〇二年六月に日韓の共催でおこなわれたサッカー「ワールドカップ」の折りの国際的な熱気はなつかしい。

ホスト国として、参加各国チームの選手を迎え入れ、みごとな「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）を発揮した二八市町村。

「アリガトー」は世界語になる勢いだったし、街の清潔なこと、花の多いこと、礼儀ただしいこと、どこにも温泉があること、列車が時刻通りに動いていること、スシが「トテモ、オイシイ」など、物価が高いことを除けばホスピタリティーは十分に実証されたのだった。

競技場の内と外で示したように、日本各地の人びとには世界中から訪れた人びとに、おのずから溢れ出る親和の感性によって国際交流を友好的にすすめることができる潜在力があることを、世界に証明する機会となったのだった。子どもたち、女性、高齢者が、それぞれの地域でみせた国際交流での「お国ぶり讃歌」であった。

とくにアフリカのカメルーン・チームを迎えた大分県の中津江村と、二〇一三年に引退したが当時人気ＮＯ１だった「ベッカム様」がいるイングランド・チームを迎えた兵庫県の津名町が話題になったが。

おのずから表れる「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）はどこから生じるのか。

大航海時代を通じて長く鎖国状態にあった島国であったことで、地域に潜んでいる国際交流への期待感には計り知れないものがあるように思われる。これこそが地域の資産として生かさ

れるべき地域パワーなのではないか。「地域から地域へ」のつながり、とくに海外の都市とのヒトとモノの交流には、労苦をはるかに越える成果が実現される可能性が見えている。

「アベノミクス」の想定外の「金融緩和」による円安効果で、海外からの旅行客が増えた。とくにアジアからのお客が多いというのは注目していいことである。

日本企業は海外進出で、とくにアジアの民衆の暮らしの近代化、豊かさに貢献している。豊かさを手にしたアジアの人びとが、「暮らしの先進国」を成し遂げたわが国に来てくれることで、いっそう「平和の国」の評価がアジアの人びとに理解されることが何よりなのである。

わが国の地域の「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）を支えているのは、四季の移ろいをじょうずに受け入れながら温和な感性を大切にして暮らしている人びと、だれに対しても等しく親切な各地域のみなさんである。

＊自然にあふれ出る「おもてなし」の心

その日本人の心の深い層に培われている繊細さや優しさは、四季折り折りに変化する風物との出会いがもたらしてくれた自然の恩恵（天恵）といえるものに違いない。

人生に何度となく繰り返される新たな季節との出会い・・。

- 春は桜前線（三月～五月）が北上し、秋には紅葉前線（一〇月～一二月）が南下する。
- 南からは春一番が吹き寄せ、北からは木枯らしが吹き抜ける。

▪八十八夜の晩霜を気にかけ、二百十日の無風を祈る。
▪南の海に大漁を伝えていわし雲が湧き、北の海にぶり起こしの雷鳴が轟く・・。

わが国の自然は、みごとに四季の変化に調和がとれている。

それはまた海の幸・野の幸・山の幸を豊富にもたらしてくれる。「平分秋色」というが、秋には収穫を等しく分け合い、奪うよりは譲り合い、見捨てるよりは助け合う、といった「国民性としての和の心」（温和、穏和、調和、親和、平和、協和、総和・・まだある）が、自然のうちに育まれている。

と、この「和の心」は海外の日本研究者が等しく指摘するところである。

だれかれの分け隔てなく萎えた心を励まし、痛んだ身を癒してくれる風物。どこも温泉や特産物に事欠かない。それとともに先人が貯えてくれた歴史・伝統遺産も数多く残されている。

二〇一三年には、「富士山」が世界文化遺産に登録された。自然遺産ではなく文化遺産であることに納得がいく。また「和食」が世界無形文化遺産に登録された。「和食」は、さまざまな知識や技術が人から人へと受け継がれ磨きあげられて成立している。「地場産業」や「お国ぶり」として地域がみずからの暮らしを豊かにしてきたのである。

だれかれの分け隔てなく等しく親切な高齢者。「日本高齢社会」へのプロセスは高い国際評価を受けるであろうし、それを成し遂げつつある長寿者への国民の敬愛の心情は、訪れた他国の人びとからも評価が寄せられるだろう。

外国人リピーターを増やす接客法

自治体が海外にふさわしい相手を見出して、地域から地域へとお互いの住民同士が親しく行き来し、異質な文化コラボや特産品の共同製作をおこなう。

そんな姿から将来への成果がうかがえる。ホームステイで訪れる青少年は第二のふるさとを感じて帰っていく。

常に開かれた不凍港のように、頼りがいがある存在としての日本の都市、町、村。それぞれの海外との世紀にわたる交流は将来かならず双方の豊かさを生み出す源泉となる。

いま「姉妹・友好自治体」は一七〇〇ほどであるが、まだ多くはない。複数都市にすることとや合弁企業や物産の共同開発といった経済活動や個別分野のさまざまな交流が進めば、数も内容的もおおいに広がることが予測される。

とくに長い民間交流の歴史をもつ日本と中国の場合には、国家間の不和・齟齬の時期を乗り越えて、すでに三五〇余の「友好都市」があり、信頼をつなぎ、友好の成果をもたらしてきた。太い友好交流のパイプになっている。戦後これまでに研修生として訪れた中国側の多くの若者たちが、いまや各地の都市で第一線で活躍している。

歴史に学ぶことの第一は、両国の政治家と軍事にたずさわる者が、その友好の絆の邪魔をしないことである。

いくつかの友好都市の例をあげれば、首都の東京（各区も）と北京（各区も）、近代港湾都市の大阪・横浜と上海、神戸と天津、福岡と広州、歴史文物の京都・奈良と西安、名古屋と南京をはじめ、産業では鉄の大分と武漢、石炭の大牟田と大同、伝統物産の金沢と蘇州、瓷都の有田と景徳鎮、ぶどうの勝沼とトルファン、牡丹の須賀川と洛陽、紙の富士と嘉興、酒づくりの西宮と紹興といった特産物。

そして人物を介した絆による交流では留学生魯迅のふるさと紹興と藤野厳九郎先生の生地あわら、亡命期の郭沫若にちなむ市川とふるさと楽山、中国国歌の作曲者聶耳の終焉の地である藤沢と生地昆明、孔子ゆかりの足利と済寧など幅広い関係を持つ。

そしてそれを地道に支えているのは、長い日中交流の歴史を思い、大戦時の不幸な記憶を忘れずに信頼を積み上げてきた両国の各地のみなさんである。

「国際交流課」が設けられている県、市、大学は少なくない。現地のことばに堪能な職員「国際交流員」が常駐して対応している。市に滞在している外国人滞在者には、各分野の研修者や留学生や企業人などがいて、さまざまな国際交流圏をつくって暮らしている。多くはないが結婚して定住している人もいる。

海外の姉妹・友好都市から友好・参観にやってきた人びとは、まず県都で交流の時をすごし、地方を代表する文化に接する。それから市町村にはいる。

＊領土小国を四倍に見せる法

海外からの客人たちは、それぞれの「友好市町村」を訪れて、目的である文化やスポーツや物産に関する交流の時を過ごす。各地にある温泉施設に案内されて、日本式のもてなしを受けることになる。これが楽しい。市町村が設けるのは、四季折り折りの美しい風物や料理や温泉を活かした「地域の国際交流施設」である。

海外からの訪問者は、

「一生に一度は行ってみたい国」

と心躍らせてはるばるやってくる。

「人生っていいな。日本ってすばらしい。別の季節にまた来たい」

と、野天風呂につかって暮れなずむ異郷の空の星を眺めながら、母国語でつぶやいてくれる。

そして「和食」のおもてなし。宿のおかみさんをはじめ、地元の高齢者のみなさんがだれをも等しく親しく迎える姿は、海外から訪れた一人ひとりの友人の心に、母国の暮れなずむ星空を見上げるたびに、「アリガトー」とともに一生のあいだ輝きつづけていることだろう。

わが国の高齢者が持つ「モノづくり」の能力やモノに込める「親和」の情は、「シニア海外ボランティア」のみなさんや海外進出企業の高齢社員の実績が示すように、途上国の人びとにとっては発想の原動力ともなるものだ。

これはとくに重要な視点であるが、迎える側の各地のみなさんが、四季を「四つの変化」と

して際立たせることによって、遠来の客人たちは春・夏・秋・冬（新年）の四回は訪れる楽しみを持つことになる。いうなれば、四季を時節の刻みとして活かす人びとの暮らしの知恵が、ここでは「優れた小国」の知恵として「国土を四倍に見せる法」となるのである。

そして何より喜ばしいことは、海外の市町村との地道で実質的な交流活動が、わが国が「恒久平和をめざしている優れた文化大国」であることを、海外各地からの発信によって明らかにしてくれることである。「文化大国」ならどんなに大国意識を競っても誇ってもいい。

「ローカル街着」の国際性

「ファッション談議」はここでの不得意の分野だが、あえていわせてもらえば、わが国の優れた衣装デザイナー（森英恵、川久保玲、コシノジュンコ、高田賢三、三宅一生、山本寛斉、山本耀司さん・・）は、これまでヨーロッパのファッション界のために日本的な素材と意匠と才能を提供してきたのではないか。

「洋装（欧装）」の基本は「北方（狩猟）系衣装」である。だから活動的だし、冬の寒気をしのぐにはいいのだが、年中いいわけではない。湿度の高い日本の夏にはもっと涼風が肌にかよう「南方（農耕）系衣装」の意匠と素材を採り入れた衣装がいい。

そしていま、わが国の風土（「南方（農耕）系衣装」に似合う衣装のために、世界のトップ・デザイナーが、「日本和装のモダン変容」を競う場としての「トーキョー・コレクション」（ト

ーコレ）を開催する時期がきているのではないか。

そうして初めて、ヨーロッパ中心の「欧装」指向から自立した、おおらかな国際性のある民族衣装の世界が開けてくる。「欧装」もまた、マンネリ化から脱するチャンスになるだろう。

オリンピックのデレゲーションの多様な華やかさは、衣の国際性の可能性を示している。各国の首脳が、国連の場で欧装以外の民族衣装を披露するのは、このレベルの「平等」に達してからになるのだろう。

このままもう一言、歯に衣を着せずにいいたい。

「トーコレ」では、はっきりと「衣装の多重標準」を意識したステージを演出して、黒人モデルが「欧装」を超脱した本来の特性を活かした「ネイティブ」の衣装を着けていきいきと登場することになる。そのほうにだれしも豊かな国際性を感じるはず。

もちろん、なかに「欧装」も含まれる。若い女性向けだけではなく、子ども向けの、中年向けの、高齢者向けのファッションが披露される。

いまなら日本シニア・デザイナーの総力で、「トーキョー・コレクション」のステージで、そういう多様な流れをつくれるはずだ。

＊反洋装パリコレの和装トーコレ

わが国の衣装としての「洋装（欧装）」は仮装であり、一〇〇％の「洋装（欧装）」を不思

議に思わないのは、不思議なことなのである。真夏にだれもが革靴をはき、クーラーの効いたへやでクールビズ姿ですごすのは、ぜいたくのきわみであることをだれもいわない。、

そんなに洋装がいいのなら、夏祭りのおみこしを、背広と革靴姿でかついでみたらいい。

「洋装（欧装）」の基本は「北方（狩猟）系衣装」であり、日本和装だけでなく、前世紀にはどの民族衣装も風土の魂を失って「欧装」に取り込まれた。

「エスニック」や「サファリ」といった「らしさファッション」がそれ。本国での衣装は、着る側からいって「地域和装」に属する。「欧装」もそのひとつなのである。なんでも「欧装」がいいというなら、夏祭りのお神輿を「スーツとシューズ」姿で担いでみたらいい。

現状では外来の賓客を迎える側も、それぞれの「和装」で応対するのではなしに、「欧装」の正装に頼っている。お互いにそれを不自然に思わない。ここにも意識して「衣装の多重標準」を活かす転回がありうる。

二〇世紀を風靡したのが「欧風・パリコレ」のファッション。新たな世紀での世界各地での「地域和風」の登場が次のステップ。その晴れの場のひとつが東京開催の「トーコレ」である。

同時の動向として海外の姉妹・友好都市から素材や意匠や職人を招来して個性的な「ローカル・ローカル街着」をつくり出せば、他ではみられないファッションで地域の街が華やぐことになる。

街着は和洋折衷がいい。

「１９９９国際高齢者年」からのメッセージ

新世紀に迎える地球規模での「高齢化社会」を潮流として予測し、国連は一九九二年に一九九九年を「国際高齢者年」（International Year of Older Persons 1999）と定め、一九九五年にそのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」（towards a society for all ages）としたのだった。

「国際高齢者年」――前世紀末近くにそんな国際的行事があったことを記憶している高齢者がどれほどいるだろうか。

国連がテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びとの賛同と参加を期待したためであったろう。活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年期を迎える高齢者であり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」がさきがけとなる立場にあった。

一九九〇年代から新世紀にかけて、そういう明確なメッセージが警鐘にも似た強い風圧として、この国で高齢期を迎えようとしていた人びとにしっかりと受け止められていたならば、新世紀一〇年の取り組み方もその結果も大いに異なっていただろう。

そうならなかったのは、なぜなのか。

この問いへの答えはたいへんに重い。

各国が新世紀に迎える「高齢化社会」にむかってスムーズに移行できるよう、国連から次々に取り組みが提案され、一九九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのである。

＊国連「高齢者五原則」が指針

毎年の一〇月一日を「国際高齢者デー」（International Day of Older Persons）と定めたのが一九九〇年の国連総会でだった。

そのあと、運動の国際的な展開への願いを込めて、

自立（independence）

参加（participation）

ケア（care）

自己実現（self-fulfilment）

尊厳（dignity）

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年である。

そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことだった。

一九九九年に全国規模でおこなわれた「国際高齢者年」の各種行事に参加した記憶をもつ人は少なくないはずなのである。

わが国も当時の総務庁を中心にして自治体や民間団体も参加して全国的な活動を展開した。

当時の民間の活動団体が結集した高連協（当時は「高齢者年ＮＧＯ連絡協議会」のちに「高齢社会ＮＧＯ連携協議会」に）が結成されたのもこの時である。

だれあろう、毎年一〇月一日の「国際高齢者デー」に、他国に先んじて活動を展開し、実質的な成果を積み上げて国際的に発信するのは、この国の高齢者の役割だったのである。

一九九九年の「国際高齢者年」をきっかけに新世紀へむかって「日本型高齢社会」へのグランドデザインが提案され、高齢化対応の具体的な取り組みが次々におこなわれ、増えつづける高齢者に主体者意識の醸成の呼びかけがなされていたなら、高齢社会への参加意識もまた広く醸成されていたことだろう。

自治体によっては、すでに九〇年代に、たとえば東大和市、春日市、枚方市、新居浜市、柳川市など先駆的に「高齢者（高齢社会）憲章」を定めたところもあったのだった。

「長生きは命の芸術品」ではじまるのは、「南国市高齢者憲章」である。

だが全国的な活動にまでは進まなかった。これは明らかに将来構想を示せなかった政治リーダーの責任である。団体でも個人でも国連の「高齢者原則」の五つを意識して活動することが「高齢化国際人」なのである。

わが国の場合は、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の国連五原則のうち、わずかに「ケア」だけは実体をもって官民協働で推進されてきたといえる。「国際高齢者年」に参加して高

連協を支えてきた福祉関係の団体は、その後も一貫して活動を継続してきているからだ。

九〇年代から新世紀を通じてこの二〇年、高齢者みんなが「わたしの高齢期」を意識して、みずからの暮らしを充足させる地域生活圏に「モノやサービスや居場所」をこしらえるために活動して、「高齢化」を一人一歩ずつ実現させていたならば、企業や組織もまた「高齢化対応のリストラ」にも努めていたことだろう。

そして新世紀を迎えて、国民運動として着実に推進されていたなら、わが国の高齢者自身がこれほど早くしわよせを受けて苦難を強いられることにはならなかったのである。

理由はさまざまだが、いまだから指摘できることだが、「高齢世代」として社会を形成するほどのボリュームがなかったことが最大の要因であろう。

ヨーロッパの先進国にこれまでになく、また条件が整っていなかったからといって、結果が許されるわけではない。日本の政治の側には、時代の先を見通して国際的に参加を求めて実現していく役割をもつリーダーを必要としているのである。

Ⅳ　不戦不争の灯かりを伝えて

「戦後七〇年目」の八月の心

戦後七〇回目の二〇一五年八月一五日の「終戦記念日」を前にして、村山談話（五〇年目）・

小泉談話（六〇年目）の継承が注目されていた安倍首相による「戦後七〇年首相談話」が八月一四日に閣議決定され、夕刻に安倍首相から記者発表された。

ＴＶ会見で全文を聞いたが、冗長であり間接表現になっていて、事前に話題になった課題は網羅されているものの、安倍首相本人の思いがどこにあるのかが伝わってこなかった、心臓音が聞こえないというのが大方の意見のようである。何かが欠けていたとすれば、それは戦後七〇年にわたって平和を守りぬいてきた国民へのねぎらいと誇りが際立つように語られなかったせいだろう。

翌八月一五日正午の黙とうを終えてから新聞で読み直してみたが、評価にかわりはない。「植民地支配」「侵略」「痛切な反省」「心からのお詫び」といった文言は入っているが、「二一世紀構想懇談会」による提言の上にたって（記者会見での冒頭発言）いるために、「こういう理由でこうなった」という有識者的な発言に終始したからであろう。付された英訳でみても「Ｉ」はたった四カ所、あとは「We」か「Japan」が主体者である。

＊命をいう女性と戦場をいう男たち

「戦後七〇年」についての発言では、先立つ二〇一五年七月三一日に開催された内閣府主催の「高齢社会フォーラム　ｉｎ　東京」での樋口恵子・高齢社会をよくする女性の会理事長の基調講演での発言が思い合わされる。

「わたくしたちは『人生一〇〇年』のモデルをつくっていく幸か不幸か初代という光栄を担ってしまいました。人間さまざまな選択ができますが、生まれる時と場所は選ぶことができません。幸いにも幸いにも戦争が終わって平和が訪れた中で物ごころつき、あるいは生まれました。そして戦後七〇年、ここにいらっしゃるほとんどすべての方々は、「戦争を知らない大人たち」として七〇年を生きてきたわけでございます。・・」（内閣府「高齢社会フォーラム　ｉｎ　東京」基調講演「シニアが主役　地域創生～出かける、出会う、何かできる～」二〇一五年七月。全文『月刊丈風』二〇一五年八月号）

わたしたちは平和の証として戦後七〇年を迎えており、自分で選びとった人生が画ける「命が主人公」が平和の代名詞。このことは若い人にも共通で、一〇代の少年少女にも、そして虹色のもやのかなたにこれから生まれる人びとにも「人生一〇〇年」がある。樋口さんのこの認識と発言が際立っている。

日本人の長寿を支えたものは平和と一定の豊かさ。その結果生じている新たな問題が社会システムの修正や新設。社会システムを「人生六五年型」から「人生九〇年型」へつくり変える活動、これを成し遂げて、初代として金メダルにふさわしい生き方老い方をしなければ、という樋口代表の要請に実感をもつことができた。

国会の議論で、男たちが多く「戦場」をいうのに対して、命の尊さをいう「生む性」としての発言には明るい未来がある。

不戦不争の灯かりを伝えて

人世のありようを知りつくした東洋の哲人老丹は、一個の人間としては人生がかかる、人類にとっては行方がかかる至言として、「善く戦う者は怒らず」といい切って去っていった。

戦いは怒りによって勝利してもほんとうの勝利者にはなれない。敗者による新たな怒りを呼び起こし怨みをかうだけだということは、だれもが体験として知っていることだ。

勝利者としてあるいは敗者としても、ひとときの鎮静は得られても、紛争の根本的な解決にはならない。では紛争の解決策として、ほんとうの成果を得る極意は何か。

一方で孔子は、子貢に一言で終身これを行うべきものは、と問われて、「それ恕か、人の欲せざるところを人に施すことなかれ」と答えている。

いま百寿期にある「明治丈人」のひとり日野原重明さんも「恕」への思いを述べていた。

漢字というものの不思議な存在感がここにある。

ふたりの先哲が用いたこのふたつの字をよく見てほしい。

「怒」（ど、いかり、憤懣）と「恕」（じょ、ゆるし、思いやり、憂慮）である。

下に心のついたよく似たふたつの文字は、人間の「心」の働きのどこか同じところから発するものなのであろう。だから「怒」も「恕」もそして「恕」も、人の心のはたらきの「多重標準」ということができる。

人は「怒」（いかり）を発しようとするとき、「恕」（ゆるし）として発することができる。それがほんとうの勝利者の言動であるとするのが、先哲から学んだ本稿の立場である。漢字をつくり用いてきた先人はそう認めて努めてそう用いてきたにちがいない。

この終章に近く、人生の最終期の「尊厳」をいおうとして、「怒」（いかり）と恕（ゆるし）から始まったのは、一気に「尊厳」に行けないからだ。いまや高年者の多くが、最終期に平常心を保てずに憂いを濃くし、憤りを抑えきれないところにいるからである。

本稿はここではだれの心にもある「恕」を、最後に「怒」を鎮める叡智として呼び起こしてほしいと願っている。わが心のうちの「怒・憤懣」を「恕・憂慮」に転ずる心のはたらきを、ここでは「尊厳」と呼びたい。

*「日本国憲法一〇〇年」を国際的に祝う

最終兵器。だれが名づけたのか。

原子爆弾という人類を破滅させる可能性すらある最終兵器が登場した先の世界大戦のあと、「恒久平和」を掲げた「日本国憲法」は、世界中で亡くなった人びとへの「哀悼のモニュメント」（歴史的記念碑）であるとともに、もはや人類は国際的紛争を解決する手段として、戦争や武力による威嚇が不可能になったことを宣告するものとなっている。

とくに「第九条」は、戦争の犠牲者の「心火」によって燃えつづけ、後人の心に戦争の悲惨

さを伝えつづける「不戦不争の灯」として、われわれ日本人に託された遺言とも宣言ともいうべきものである。

人類を破滅させる戦争という紛争解決の手段は、個人にとって、そして人類にとって悪夢である。悪夢であるから存在はするが現実にはありえない。問題は個人でも人類でもないその中間の存在である「国家」にある。日本国の国民は「日本国憲法」のなかの「第九条」を、各国の国民に伝え、国の法として掲げて共有するよう働きかけなければならない。

日本国民としてできることは、先人の意を体して、お互いを励ましながら平和の証としての「心火」を胸に灯しつづけながら「長寿」でありつづけることである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日本国憲法　第九条

第一項　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

第二項　前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

敗戦の惨禍から七〇年、新世紀を迎えて一五年。

国内には「憲法第九条」を含めてさまざまな条文の改正の議論をすすめようとする勢力の台頭がみられる。他の条文はそれとして、「憲法第九条」はその歴史的経緯を確認し、党派性を排して衆議して、新世紀を通じて引き継ぐべき国是として、国際的歴史的文化遺産としてこのまま護りつづけなければならない。

したがってあと三〇年余、二〇四七年の制定一〇〇年までは「制定」時を知る少数の長寿者がそのまま保持し伝えるべきものである。原爆が投じられた「太平洋戦争」のあとも国際紛争は絶えることなくつづき、原爆・水爆の製造と保有はつづき、軍事技術は仮想敵国を想定しながら発展・増殖をつづける。

アメリカ主導のそれは日米戦のあとも朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争にその恐るべき一端をみせつけてきた。しかも局地戦・自爆テロはなお後を絶たない。

先の戦争の後に得た「平和」のもとで、戦う性である男性がどこまで「命の感覚の進化」を得たか。相も変わらず「命」の大切さを言わず、なお「戦場」を論ずる政治家は舞台から去らねばならない。

大戦後に生まれ、両親から平和を託された戦後ッ子である「平和団塊」のみなさんは、「平和の証」としての長寿を競って生き抜いて、「平和憲法一〇〇年」の証になることをお互いの「自己実現」の姿とすること。

体現している「日本高齢社会」がそのまま「世界平和へのメッセージ」となることの願いを

胸中にして、そのとき不在となったみんなの願いを引き連れて生き抜くこと。

戦後七〇年のいま確認すべきことは、「不戦」の憲法の条文の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつづけている「先人の不戦の心火」を感得し、みずから引き継ぎ、平和への灯として伝えることである。そのとき、日本国会での「安保法制」の議論は根のない「紙上談兵」の議論でしかないことに気づくだろう。

現代の政治家は、想像力の深度も構想力の精度も問題の根幹まで届かず、「日本国憲法」を改変する能力も資格もないことを知らねばならない。先の戦争の惨禍を先人から聞き取り、「心火」として胸から胸へ引き継ぎ、その経緯を繰り返さないためにおおいに論議すべきであるが、自分が納得できるレベルの認識で改憲を実行しようとすれば、必ず過ちをおかすことになることに繊細でなければならない。。

憲法は今ある人びとのためのものではあるが、今ある人びとのものではない。

「自主憲法」などと称しておのれのレベルで根幹に傷をつけるとすれば、先人にも後人に対しても、これほど恥ずべき行為はない。

子どもを産まない性である男性が「命の感覚の進化」をみずからの命に課すことによって、戦争をしない、できない国に到達しているのが先進国である。自分の命をそこに置けない政治家が仮想する戦闘シーンのために軍備をすれば、結果は災禍を招き寄せることとなる。

日本の政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する憲法の趣意を「国際世論」とするた

めに努めて、三二年ののちに迎える「日本国憲法施行一〇〇年記念」祝典を、国際平和のもとで世界の国々のオベイションに迎えられて実現できるように支えつづけることである。

国際的に先行してたどる「日本高齢社会」形成への歩みを、そのまま「世界平和のメッセージ」として認知することである。

「日本国憲法」の「不戦不争」の明かりが途絶えたとき、わが国は半世紀あまりを積んで得た国際的な評価を閉ざし、歴史的な輝きを失うことになる。

耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、選ぶべき道はおのずと明瞭なはずである。

「ノウサギ平和主義」

夏の日の午後、続いた干天に「如滴の雨」があって、そのあと、稲にとって生育に快い風が吹きまた人間（じんかん）にも心地良く風は吹いていた。

カフェ・Hでの午後のお茶のひととき、風に乗って草の間を跳ぶノウサギをみた。子どもたちはそのすばしこい跳躍を見てよろこんだが、その姿がひとつの着想をもたらしてくれた。

「ノウサギ平和主義」である。

野に生きながら戦う武器（器官）をもたないノウサギは、戦わないし戦えない。逃げることで身を守り平和を守りつづける。

危険を察知する長い耳、跳んで逃げる後ろ足、そして三つの逃げ場をもっていること。これを「狡兎三窟」というが、ずるがしこい兎ではなく、かしこい兎でいいのではないか。「狡」は捉えられない加害者の人間のまけおしみの表現なのだから。

ここでの「ノウサギ平和主義」というのは何か。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ⅰ「戦争反対」をいいつづけること。

「平和憲法」を一〇〇年（あと三〇年余）保ちつづけて、国際的オベイションを受けて「日本国憲法＝世界平和一〇〇年記念式典」を行うこと。いまから国際広報をすること。この世紀の構想があってはじめて、「九条」は世界文化遺産にふさわしいものとなる。

Ⅱ「国際会議」を多く招請すること。東亜のスイスとして、各地に国際会議場を設けて、常時、さまざまなテーマの国際会議を開催すること。もちろん国際医療センター（会議にきたメンバーが信頼してカルテを残す）も。世界各地からの観光客が「日本の四季」（春夏秋冬の四回訪れる。国土を四倍にみせる）を堪能して、暮れなずむ温泉につかって、自国語で「ニッポンっていいな」といってくれること。そのホスピタリティ（おもてなしの心）は自然のうちに国民に備わっている。

Ⅲ一国「正倉院化」をおこなう。これまでも「海外のよいもの」をとりこんで保存してきた国民性をいかして、世界の文化遺産をレプリカとして保持し常時公開する。モノばかりでなく、

国際カラオケセンターといった世界の音楽が聞けて歌える施設も設ける。

Ⅳ現在の「三窟」はアメリカ、中国、ロシアの三大隣国である。等距離の自主外交によって「国際平和」を守ること。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「平和国家」であっても戦力は持つべきである。

日本への国際評価は「平和国家」の堅持にある。「平和国家」をいいながら軍隊を保持するのは「狡」といわれても、しかし自衛はノウサギ平和主義では不可能である。

「平和国家」の「戦力」の基本は、他のいかなる国にも依存しない自衛のための優れた「不戦の軍事力」があり、相手を納得させるに足る「能戦の文化力」があり、それを支えるに十分な「豊かな経済力」があること。これらが三位一体として常備すべき「平和国家の戦力」であり「国力」であることは論を待たない。

したがって高いレベルの「核の平和利用」である原子力発電、また平和利用の衛星誘導技術などは「戦争と平和」の多重性において平和国家として堅持し顕示すべき科学技術であること、これもいうまでもない。

３・１１以後、「原爆と原発（戦争と平和利用）」の核被災と核被曝としての放射能対処は新たな課題となっているが、全面禁止は目標だが、核は現実的な選択を必要としている。

＊国際平和会議と「第三回ＷＡＡ会議」の招致

この「国際平和」と「普遍的長寿社会」の推進のための活動のひとつが、二〇二二年に開催が想定される「第三回高齢化世界会議（ＷＡＡ２２）」の日本招致である。

この国際会議は首都圏（一都三県）の共催とし、成田国際空港や幕張メッセをもつ千葉県が中心で。東京は二〇二〇年のオリンピックの開催で精いっぱいだが避けるわけにいかないテーマである。スポーツの祭典の陰で下流老人の孤独死が続発するような国際都市であってはならないだろう。「世界長寿社会宣言」の起草を目標にすえて、全国三四〇〇万人の高齢者が存在感を示す機会とする。

二〇二〇年には四年ごとに世界のアスリートが力を競うスポーツの祭典「第三二回・オリンピック・パラリンピック」が東京で開催される。それと重ねてになるが、第一回・一九八二年・ウイーン、第二回・二〇〇二年・マドリードで開催されて、二〇年ごとの開催になる第三回・二〇二二年の「高齢化に関する世界会議」（World Assembly on Aging）を、「高齢化」のトップランナーである日本へ招致し開催することは重要な国際貢献である。

二一世紀の国際的な潮流である「地球丸ごと高齢化」という課題を取り上げて、各国の政府関係者、専門家、経済人、報道人、NGO、市民の代表が一堂に会して、一九九九年「国際高齢者年」、二〇〇二年「第二回高齢化に関する世界会議」以来の国際的成果を共有し、将来構想を討議する機会とする。わが国の高齢者の知識と経験による「すべての世代のための高齢社会」形

成への活動を公開しながら、世界から招いた優れた友人とともに、「国際平和と普遍的長寿社会」の証としての新たな構想を掲げることは、平和国家・長寿社会のリーダーとしてのわが国の責務でもあり、誇りうる歴史的事業である。

会議は国連の指針として「高齢者に関する国連五原則」にうたわれた「自立、参加、ケア、自己実現、尊厳」の精神を基調に、一人ひとりの高齢者のだれもがどこででも充実した人生を享受できるよう、新たな行動計画を練り上げることとなる。

世代間・民族間・男女間の協調を実現する日本での会議の成功は、「人類の平和的共存」の将来を明るいものにするだろう。二〇四二年・第四回への貴重なステップになる。

会場としてはアクセス、施設、これまでの活動経緯（千葉県の「房総長寿社会憲章」など）を考慮して、首都圏が負担にすぎるなら、関西をふくめての分散型にする。

［会議名］

Ⅰ　第三回「高齢化に関する世界会議」（World Assembly on Aging、WAA）2022

・国内会議としての「高齢化に関する国内会議（都市と地方）」

・地域会議としての「高齢化に関する東アジア地域会議」

各国に取組事例に関する情報収集・リソースセンターの設置を要請する。

第三回WAAの中心議題を「（仮）高齢化と社会経済の革新」とする

Ⅱ　「世界高齢者会議」―人類平和共存への道―

世界大戦後の「平和日本」を知る各界代表者および元大統領・首相・学者・宗教家ほか国際的な平和・高齢者リーダーを招へいする（この会議は日本で継続して開催）

Ⅲ　「世界高齢社会活動者会議」―すべての世代のために―　2022

ＮＧＯ、学者、経済人、報道人など各界の高齢社会活動の実践者・市民が地域の成果・課題を語り合う

おおよそ前記のようなことが想定される。

Ⅴ　「寿終正寝」（天寿）を全うする

「人生の達人」としての八面玲瓏

深夜に、愛用のパソコンを前にして、心を澄まして「八面玲瓏」を打ち出そうとした。

無理かなとは思いながら「れいろう」と打ったら、なんと「冷老」と出た。

眠気覚ましにしては「冷老」とはいささかサービス過剰な応答である。

パソコンの辞書からは学ぶところもないではないが、気ままな応答には辟易させられる。

「玲瓏」くらい一発で出なくては辞書として失格ではないか、「冷老」では失格のうえに失礼である。

「玉などの透き通りあきらかなさま」とペーパーの辞書にはある。「だれに対しても曇りなく

応対できて、処世が円滑である境地を示す」といったところが、わたしのほしい解説である。「玲瓏」を好んで揮毫する人に棋士の羽生（善治。永世名人）さんがいる。盤上の争いとはいえ、真剣勝負を前にしての心境が示せる、含みの大きいことばなのである。

夜も三更（これも一発では出ない。夜五更のうちのまんなか、いわゆる午前さまのころ）にいたって、思い立って日録に「八面玲瓏」と書こうとしたわけは、

ひとりの「人間」として、
ひとりの「親」として、
ひとりの「働き手」として、
ひとりの「住民」として、
ひとりの「市民」として、
ひとりの「国民」として、
ひとりの「国際人」として、
そして、ひとりの「現代人」として、

という八面から自省して、どこで出会うだれに対しても曇りなく応対したいと願ったからである。

そんな心境になるのは、棋士なら「名人戦」に向かうときだろう。

＊「名人」と「達人」との違い

ところで名人と達人はどう違うのだろうか。

「名人」は、技芸にすぐれて名のある人。

「達人」は、広く物事の道理に通じた人。人生を達観した人。

と、ペーパー辞書にはある。

とすると、「名人」は時間と労力の蓄積が必要で、バーの位置が高いから「名人」にはだれでもなれるわけではないが、「達人」にならその気になって務めれば、だれもがなれる。みずから跳べると思うところに「人生の達人」のバーはある。

「達」については、みずからを哲人という孔子から習うことにしよう。

弟子の子張に「達」というのはどういう姿をいうのですかと問われて、孔子はこう答える。

なにより質朴で正直なこと(質直)、だれのどんな言い分も有意義であると思うこと(好義)、人のことばをよくわきまえて（察言）、表情やふるまいをよく見定めて（観色）、配慮して人の下につくこと（慮以下人）だね、といっている。（『論語「顔淵一二」』から）

とすると、これからしようとする人も、途上にある人も、そういう生き方ができた人も、そろって「達人」である。だから目標には未達成でも、それを生涯にわたってめざしながら、だれとも等しく親しく接する人生を送ろうとしている人を「人生の達人」と呼ぶことができそうだ。これなら特定の人だけではなく、だれもが「人生の達人」になれる。

説明が込み入ってきそうなのでここでまとめたい。

「人生の達人」というのは、生涯にわたって質直に人生目標の達成をめざしつづける人、の意でいいのではないか。

ここでは同じ時代を生きるだれとも曇りなく接する「八面玲瓏」のガラス張りにして、人生の達人をめざそうというのである。

棋道の達人でもある羽生永世名人なら、盤の向こうに対面するのは、いずれ劣らぬ好敵手であろうが、願って「人生の達人」をめざそうというういま、盤の向こうにいるのは、他でもないもうひとりの自分である。もちろん先手はこちらにある。

「おまえが達人に？　丈人までは納得できたが・・」

そう口撃の先手を打たれて、初手から「挙棋不定」となる。コマを手にとって挙げたものの、さて、打つ心が定まらない。打たなければ先へ進まない。

「まあ、いいか」

そこで定石中の定石である２六歩にそのままコマを打つ。

将棋盤をはさんで、「達人」談義を交わしつつ、地域や職域や趣味や世代交流での活動にどう取り組んだらいいのかの策を練る。

一歩をすすめるのは「達人」をめざす自分である。

高齢意識は未熟か半熟のまま

これまでの「人生六五年」の意識を「人生九〇年」に改めたうえで、身の周りの社会のしくみを変えながらすごしてほしいという懇請に近い要請を、高齢者に対して出したのは、先にも記したように内閣府所轄の改定『高齢社会対策大綱』においてである。

こんな唐突な要請にひとりの国民として、質直にどう対応すべきかと考えているうちに、三更にいたって前記の「八面玲瓏」の心境に達したのである。

新世紀になって一五年余り、国からそんな苦渋に満ちた指摘や参加の要請が高齢者にむかって出されたことはなかった。まだ国庫に余裕があったころに定めた「社会の功労者」である高齢者を「温存」するしくみがどこまでつづくのかに不安を感じながらも、多くの高齢者は六五歳から支給される「年金」を頼りに生きられるところまで生きればいいと考えて、さしたる切迫感は感じなかったのである。

改定「大綱」を見渡しての内閣府からの要請は、「人生九〇年」への「高齢者意識」の変革と、**就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野**への積極的な「社会参加」である。社会のしくみ変革への参加の要請であることを、ことばをよくわきまえて（察言）、国民のひとりとして正確に認知する必要がある。

「高齢者意識」については、多くの国民は、定年が延びて年金が支給される「六五歳から」と意識することはあっても、「人生九〇年」の幅で考えることはなかった。この「人生六五年」

から「人生九〇年」へという二五年の唐突な延伸こそがこの間に政策不在であった証なのだから、別に詳しく述べるように、一九九九年以降の政治リーダーにはこぞって対策延滞の責任がある。だから多くの高齢者は、六五歳の高齢期に達したあとも国家の要請に質直に応じられる「高齢者意識」はだれもが未熟でありせいぜいが半熟のままでいるのである。

これまでも「現役長生」型の暮らし方を選択してきた少数の人びとだけは、

「やっと来たか」

と、遅すぎた要請を質直に受け入れられるだろう。

しかし「人生六五年」での「引退余生」を意識して、けっこう長かった現役時代のトップギアからミドルあるいはロウにまでギア・チェンジしてしまった大多数の人びとにとっては、「いまさら何を」の思いがあるにちがいない。

とはいえ一人ひとりの高齢者の二〇年を越える「余生」に、高いレベルの介護や医療を提供しつづけ、穏やかに終末までを看取るという「社会保障」ができなくなるということは、周辺を見、総体を考えれば、だれもが納得せざるをえない。

ここから「自分だけはなんとか」と考える人びとが現われる。

そのときあなたは、そこから「格差」を認める思考過程に入ることになり、「温かな助け合い」の輪から抜け落ちることになるのに気づいているかどうか。

＊「フレイル以前以後」の社会参加

先に芥川龍之介が書いた「蜘蛛の糸」の主人公、犍陀多の姿に触れたが、お釈迦様のおいでになる極楽と対極の地獄というのは当時広がりつつあった「格差」の表現であり、その途中で極楽への一筋の蜘蛛の糸にすがって「自分だけはなんとか」と考えたことで、犍陀多は地獄へ落ちていった。その後、関東大震災のあと芥川を襲い自死にいたらしめた「唯ぼんやりした不安」についてはここは論ずる場ではないが、その後の生きづらい時代を芥川が予見して出合うことを拒否したことは確かである。

すべての高齢者が九〇歳まで生きられるわけではなく、願っても女性で半分、男性は四人にひとりであるし、健康寿命は一〇年ほど短いことを考慮すれば、暮らしづらい世の中で、何がなんでもすべての人が「九〇歳・現役長生」の人生を前提にして暮らしてほしいというのは酷な話ということになる。

といって、みんながみんな「六五歳・引退余生」人生を送りながら、「自分だけはなんとか」という思いで暮らすというのも罪な話。

酷でもなく罪でもない穏当な話にならないのかということである。

どうすればいいのか。

「人生六五年」時代のしくみのなかで暮らしてきた人びとは、格差のひろがる時代の晩年期を「余生」と意識しているかぎり、極楽に身を寄せることはできない。

「引退余生」の立場でも、元気な健康寿命の間、フレイル状態（一五ページ）まではお互いが可能な範囲で社会参加をする。そうして気づいてみたら平均寿命である「人生八〇年」（女性は「人生八五年」）にまでたどりついていたとしたら、それはそれで幸せな晩年期であったということになる。その後がほんとうの「余生」。

いま高齢者が「地域デビュー」するのにむずかしいことはなにもない。現役時代からの「自閉的な暮らし」をそのままつづけることのほうが恥ずかしいと思えるほどだ。

社会に対して自閉的な症候を「自閉症」というなら、「地方創生」や「新地域支援構想」の「地域支え合い」の時期に自閉的な人はご自分を「＊地閉症」と呼んだらいい。

少なくともだれもが「フレイル状態」を自覚して「有訴」（症状が元にもどらない）となり、「介護」を受けざるを得なくなるプロセスを思えば、「フレイル」以前は「人生の達人」をめざしていけるところまでいけばいいのではないか。

ここは盤を挟んで自問自答の長考がつづく局面である。

「寿終正寝」（天寿）を全うする

本稿の終わるここまできて、生命体であるみずからの天寿を思ったとき、ふいになぜか、高倉健さんと蜷川幸雄さんが重なって思われた。質直に「文温」に生きることを課して文温を貫いて亡くなったお二人の人生に、ここで出会えたのは同時代人として幸せなことである。

蜷川さんの未踏の荒野へ踏みこんでいき、最後の一歩まで未萌のものにむかって燃え続けた魂の輝きから力を受けたが、高倉さんのエイジングとエンディングには内に燃え続けた煌めきを感じる。

はじめの「華麗な加齢」のところで、吉永小百合さんに出ていただいたので、ここの「寿終正寝」（天寿）を全うするでは高倉健（小田剛一）さんにご登場いただこう。

高倉健さんは、二〇一四年一一月一〇日に亡くなった。

そのとき、日本に対しては「政冷経冷」とまでいわれる中国でも、隠れていた「文温」の存在を素直に表現した。硬漢高倉健さんの去世は中国全土でも多くの人に惜しまれてニュースとして伝わった。文革のあと一九七八年に中国で最初に上映された外国映画が「君よ憤怒の河を渉れ」（中国名「追捕」）であり、その主演者として知られたからである。主人公の検事が着たコートは半月で一〇万着も売れたという。

温家宝前首相は「追捕」はもちろん、「三丁目の夕日」（「永遠的三丁目的夕陽」）や「おくりびと」（「入殮師」）をみて、戦後日本の大衆の暮らしや共有する死生観を映画から理解しているという。中国ではその後も高倉健主演の「幸福の黄色いハンカチ」（「幸福的黄手帕」）や「遥かなる山の呼び声」（「遠山的呼喚」）が上映され、二〇〇五年には張芸謀監督による合作映画「単騎、千里を走る」（「千里走単騎」）が撮影されている。張監督は、その公開にあたって、高倉さんは眼ではなく心で泣く（心在哭泣）演技者だったと紹介している。

文化勲章受章のときに、すでに症候は顔に現われていたという。式後の「日本人に生まれて本当によかった」ということばは静かに実感をもって離世の思いを伝えていた。

「往く道は精進にして、忍びて終わり悔いなし」

は、高倉さんが数多く演じた任侠に生きる男の「忍辱負重」（辱めを忍んで重責を負う。『三国志・呉書「陸遜伝」』など）を思わせる。「おしん」がそうであったように、健さんは自分が演じた「忍辱負重」の人物が、今の日本にではなく、東アジアの途上国で苦労して暮らしている人たちを励ます人間像であることを知っていたからだろう。苦労を忍んだアジア共有の盟友だったのである。

「不器用ですから・・どうぞお幸せに」（コマーシャル）といって去っていくうしろ姿を残して。健さん、現世で演じなかった幸福いっぱい（幸福開心）の人間を天堂で演じてください。

おつかれさまでした。享年八三歳。天寿（わが道をつらぬくこと）を全うした健さんをここに記しておきたい。

＊「自己実現」と円熟エンディング

「天寿」を「平和」のうちに全うすることが一人ひとりの願いであるとともに、みんなの願いでもある。安心して眠れることが一生つづくことがどれほどむずかしく貴重な経験であることかは、日々の世界のできごとを知り、歴史を知ることで明らかである。

庭越しに声をかけてくれた少年は、いつしか青年になり、父親になった。幼い子どもが庭越しに声をかけてくれる。時の流れははやい。

「年々歳々花（桃李）相似たり、歳々年々人（自分）同じからず」（劉廷之）

夜、横になって静かに心音を聞く。きょうを愛しんで過ごしてあすに繋ぐために。

戦後七〇年余を刻みつづけてきた頼もしい平和のリズムに変わりがないのをたしかめる。今度は右手を胸に押し当てて直接に心音を捉える。

高齢者みんなが等しく指針とする国連の「高齢者五原則」のひとつ、「尊厳」（dignity）ということばを思い起こす。

ひたすらにトップを行く「日本長寿社会」に、高齢化途上国の人びとが期待するものは、「恒久平和」を掲げる憲法をどこまでも保持しつづけることと高齢者がおだやかに暮らしている姿であろう。

新たな歴史を体現してそこに連なっていることを誇りとして、小さな水玉模様のような「尊厳期の人生」を日又一日と重ねて、「寿終正寝」のときまできちっと送りつづける。

そのために、ここまで論じてきた課題を整理して本稿はつぎのような「老中八策」を指針とし、眠りにつく前に一つまたひとつ口ずさむことができる形にしてここに提供しよう。

みずからの「尊厳」ある高齢期を送る指針として、ここからひとつでも。そしてみなさんがみずから創出した新たな一項を加えることを期待して。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊「老中八策」

一　六五歳から九〇歳までの二五年を他力依存でなく過ごすため「自立意識」を確立中

二　「引退余生」でなく「現役長生」で社会参加を続けながら「高齢期人生」を実現中

三　培ってきた知識技術を活かして高齢期の暮らしを豊かにする「優れモノ」を制作中

四　体（→病気）　志（→認知症）　行（→介護）　三つのバランスで「包括ケア」を体現中

五　「三世代（青少年～三〇歳　中年～六〇歳　高年～九〇歳＋）平等型」社会を創出中

六　高齢者がつどう「居場所」でそれぞれの自己目標やみんなの課題の解決策を談議中

七　日又一日欠かさずに出て「地域生活圏」（「支え合い」の現場）の形成に参加中

八　「水玉模様」のような小さな会に加わり成果を語って各地各界の仲間同士と連携中

注　「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」（高齢者五原則）は国連が提唱する国際的指針。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

こうして暮らすことで、国連が提唱する国際的指針である「高齢者五原則」を活かすことになり、国際的な活動に参加していることになる。ひとつずつ、ひとつでも実現にむかえるなら、それはまた「日本高齢社会」の形成に参加していることになる。

こうして日又一日を努めて、八面玲瓏の人生の達人をめざしつづけて、「尊厳」をもって「寿終正寝」（天寿九〇）を全うすること。願えばだれにでも可能なわが達意の人生である。

九〇歳に達したときに、「一以貫之」、生涯を通じて貫いた何かを、そのことを知る人びとに称賛されるような生き方を残すこと。それが後人への別れのあいさつとなる。「寿終正寝」は、成すべきことを成し終えて、住み慣れた家で、親しかった人びとに囲まれて、現代人としての命を静かに終える姿をいう。

「寿終正寝」を願わない人などありえない。

おわりに

二〇〇〇年の歴史遡行の旅

洛陽（ルオヤン）。

いまも現代都市として輝いている中国・中原の古都洛陽市には申し訳ないが、若年のころからわたしが関心を寄せつづけたのは、歴史の底に輝く文明揺籃の地であり、周公旦が「土中」と呼んだ洛邑であった。

そして何よりも二〇〇〇年ほど前の後漢時代に倭の奴国王の遣い（五七年）が、さらに三国時代の魏に女王卑弥呼の遣い（二三八、二四三年）がはるばると朝貢に訪れた都、「日中交流の原点」ともいうべき古都としての洛陽であった。

洛陽（洛邑）を訪れるという「二〇〇〇年遡行の旅」

それは若い日からの志として、心の奥のあちこちに移動させながら持ちこたえてきた。「初志」というよりは夢の領域に近かったから、実際に果たすとなると外から呼び覚ましてくれる何か特別の力が必要だった。そんな衝撃的な力が何度かやってきて、契機はこれといって明確ではなかったが、いくつかの力に合わせ押されるようにして、洛陽へと出奔した。

一九九四年の秋のこと。わが国が「高齢化社会」から「高齢社会」にはいったとされる年（高齢化率一四％に）である。

定年を待たずに五五歳で、通い慣れた新聞社を自主退社して、遠い日の夢　であった「二〇〇〇年遡行の旅」を果たすことになったのである。

かつて日本からの遣使が、「何か」貴重なものを求めて、　足跡を残した古都を訪れて、この国と大陸との関わりの原点に立つことで、大陸とこの国の将来を見はるかす糧を得るという漠とした目標を課しての出奔であった。

そんな唐突な来訪者を温かく迎えいれてくれた洛陽市の洛陽外国語学院での外籍専家（客員教授）として長期滞在することとなった。

九里×六里の城壁のほかは何も残らない「洛陽漢魏故城」。

夏はとうもろこし、冬は麦の畑中の道を歩きながら、倭国からの遣い人を思い、邪馬台国からの難升米や都市牛利（どう読むのか）を偲び、王城跡から漠として東方に思いを馳せたとき、「東京」は奈良や京都に対応する東都であるとともに、当然あっていい現代の「東アジアの大都市東京」として多重化して意識されたのであった。

飛鳥と洛陽。

かつて若い日に、「くにのまほろば」の地である奈良や飛鳥の地（ヤマト）をたずねて畑中の道を歩きながら東方をみたとき、日本の歴史のながれと東京の役割が納得されたように、現代アジアでの日本のなすべき役割が発見できるような予感があった。

＊洛陽で得たふたつの自己目標。

五五歳で、そのころめずらしかった「早期自主退社」をしてまで、しかも欧米の都市ではなくなぜ洛陽に？

長く「平和」でありつづけた時代が「長寿」として与えてくれるその後の人生になすべき課題とかかわってはいたが、三年の滞在を終えて「洛邑土中」の地から帰国したあとも、なぜ中原に？と問われてなお漠とした答えしかなかった。「平和裏」にこの国で暮らす国民（市民）としてなすべき役割ということだけは確かだったが。

そして世紀末に還暦とともに一九九九年の「国際高齢者年」を迎えたことで、この国に綺羅星のように輝く高齢の人びととともになすべき事業、平和の証である「日本高齢社会」形成への参画がひとつ明らかになった。それと同時にもうひとつ、平和裏での「アジア共生への貢献」（先行国日本の「アジア途上国化」とアジア途上諸国の「日本化」）も。

見出したふたつの課題に対して、一個の人間の力の小ささは自明のことであったが、「日本長寿社会（高齢社会）」の達成と「アジアの共生」（モノの豊かさの共有）というこのふたつの事業は、国際的にも注目され期待されるわが国の役割であり、「平和裏」になすべきその事業に力を尽くして参画するというのが、世紀を越えて一〇年余をへて、わたしの確とした信念となっている。

先達のご努力でどちらも具体的で明確になりつつあるが、どちらも後人の厚い支持をえて達

成される新時代の成果としての姿はまだみえてはいない。

上記ふたつの課題に関する著作を友人の支援をえて公刊することができたが、いずれも洛陽の紙価を高めるにはなお遠い。

赤い兎の目と戦争の記憶

灯火管制の下で。

昭和一三（一九三八）年の暮れ近くに東京の渋谷区で生まれた。

子どもの目に焼きついた戦争の鮮明な光景がある。

その夜、灯火管制でうす暗い家の中が急にざわめいて、大人たちみんなが二階にあがり、物干しや道路側の雨戸を細くあけて夜空を見上げた。わたしも雨戸の隙間からおそるおそる夜空を見上げた。何本かの探照灯に照らし出されたＢ２９。迫っていく日本の戦闘機。高射砲弾の煙と音。子どもの目でそれぞれの距離感は測りようもなかったが、Ｂ２９はゆうゆうと上空を横切っていった。

父と母の挫折。

それからまもなく、母と子どもたち（わたしと妹）は父方の実家がある群馬県の農村に疎開することになった。

父は農家の次男坊で、東京へ出て小さな工場を経営していた。母は勝気な江戸娘で、銀座の

デパートづとめをしていたころ、有名な女優さんが買い物をする場面に出演したことが自慢で、何度も繰り返し聞かされた。少年のわたしは両親の持ち味の違いに戸惑ったが、無口で実直な父のほうに味方した。

父の実家近くで借家暮らしをはじめてほどなく、東京大空襲で父の工場は焼失し職人たちは散っていった。東京での父の労苦は跡かたもなくなり、都会育ちの母は暮らしの基盤を失った。

疎開先での暮らし。

榛名おろしの空っ風、八幡さまの杜と杉の並木、信越線の細く長い線路、野外映画会を見た校庭、墨を塗った教科書、すぐ破れてしまった運動靴、春風と疾風のようなふたりの女先生、ドドメ（桑の実）、モモの摘果、ウメのひこばえ、道祖神の火、「鐘の鳴る丘」、草を食む兎、ぶっちめのスズメ、流し針のウナギ、田んぼのヒル・・。

戦争を避けて父の実家がある農村で過ごした日々。わたしは本家のいとこたちや学校の仲間とすぐに馴染んで暮らすことができた。しかし自分には見えない都会少年のシッポを付けていたにちがいない。将来のためといって母が着せた“衣装”である。

小学校に入ったときが終戦の年で、終戦の日は学校に呼び出されて、校長や先生方からいろいろな話を聞かされて、わけがわからないままひたすら明るい気分になって家まで走ってかえった。

赤い兎の目の記憶。

ある日、家の壁に寄り添って小さな兎小屋ができた。妹が求めたものだったのだろうが、摘んできた草の束を扉を開いて放ると、奥から兎が跳んで出てくる。赤い目でじっとこちらを見つめてから草を食べた。そのようすをこちらもじっと見つめた。危険を察知する大きな耳と跳んで逃げる後ろ足。戦うべき機能をもたない兎。ぴくぴく動く鼻とじっと見つめる赤い目が記憶に残った。

ある日、草の束をもって小屋にいくと、もうそこに兎はいなかった。死んだのか逃げたのか他の動物に襲われたのかはわからなかっ　たが、そのまますぐに忘れた。にもかかわらず、その姿がその後いくどとなくよみがえる。

「ふるさと」の喪失。

小学五年生の一学期の途中で、わたしはみんなと別れて東京に戻ることになった。

母の意向だったのだろうが、将来の不安は胸のなかに渦巻いていた。

担任のK先生は親しかった何人かの仲間といっしょに信越線の踏切まで見送ってくれた。線路を渡ってひとりになったわたしは、振り返ることもなしに八幡さまの杜に向かって走った。背中に感じたK先生の視線と親しかった仲間との「別れの感覚」はいまも忘れられない「ふるさと」喪失の記憶である。

「雪中高士」のように。

その後借りていた家は朽ちたが、わたしが植えたウメのひこばえは老樹のたたずまいをして

立っていると聞いた。わたしもあれから６０年余を大都会で過ごして、いま此処に立っている。願わくば親木がそうであったように、冬の野に「雪中高士」として立ち、幾輪かの香りのいい花をつけていてほしいものである。

上記はともに高連協（高齢社会ＮＧＯ連携協議会）の同輩とともに編んだ二著からのものである。

二〇〇〇年の歴史遡行の旅

『頑張って生きよう！ ご同輩』（博文館新書・二〇一二・一一・二〇）より

赤い兎の目と戦争の記憶

『続・頑張って生きよう！ ご同輩』（博文館新書・二〇一四・四・八）より